

勝るとも劣らない。 ウッドラックパネルのカラーバリエーション。

新製品3mm厚製品が加わり、さらに多彩な表現が可能になりました。

で 7. ウルエのウッドラック//なル®

素板(ウッドラックパネル-B)の両面にカラー塗工した商品です。目を見張る鮮やかなカラーバリエーションで、多彩な表現が可能。POP、ディスプレイ、立体組立、手描きメニュー等、幅広い用途に使用できます。

西日本地区総代理店



マリヤ画材株式会社

販売促進材料・宣伝用各種パネル・額縁・デザイン材料・各種紙類・製図器械 〒536 大阪市城東区永田3-9-16 TEL.06-962-8888(代) FAX.06-962-6263 MARIYA GAZAI Co., Ltd. 3-9-16, Nagata, Joto-ku, Osaka, JAPAN 536

ナッドラック、アストアデオー

楽板(ウッドラックパネルーΒ)の両面に美しいカラーアート紙を張り合わせたパネルです。 新しい感覚のPOP素材、クリエイターのイメージ通りの作品づくりが可能になりました。

ウッドラック/「本版 CP

素板(ウッドラックパネル-B)の両面に上質の白紙を貼りました。色のり効果が特にでれ、印刷はもちろん、フリー ハンドの高度なデザイン処理も可能です。新製品3mm厚 製品が加わり、さらに多数な表現が可能になりました。

ウッドラックカテノノネル

寮板(ウッドラックパネル-B)に18色の鮮やかな色をつけました。「ソリ」「タワミ」が、ほとんどなく、長期使用が可能です。

ウッドラック/「本ル・R

棄板(ウッドラックパネルーB) に粘着剤を塗りました。うわ紙をはがすと、ポスター、 写真など簡単に貼れ、膨張・収縮の心配も ありません。

ナッドラック/「本ルB

表面はなめらかなスキン層。直接スクリーン 印刷ができ、カットや打抜き加工も簡単、軽く 美しく仕上がります。

*ザ・ダウ・ケミカル・カンパニーの商標











資料のご請求は FAX(ファクシミリ)で 03-5275-2402

移行期のデザイン材料を開発しています。 レイアウト用紙の思想がプリンターペーパーに 画像・パターン集がCD-ROMに CMY・RGBのデータが色見本帖アソシエに こうした展開は、弊社のデザイン書が 永年に亙って培った成果です。 コンシューマー商品――アイコピエも定着し、

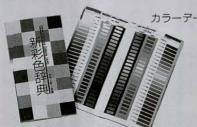
製造発売元 株式会社ジーイー企画センター ☎03-5275-2401 通販代理店 G & E コーポレーション ☎03-5275-2831

若いファンの期待に応えています。

ルームページ http://www.gek.co.jp/ 電子メールKYS05672@niftyserve.or.jp

アソシエ準拠 カラーチップ類 associe

色見本帖 アソシエ







カンとコツ

2色印刷準拠 カラーチップ



すべては、パブリッシングのプロフェッショナルのために。 V.D.P.Cシステム搭載フルカラープリンタ、登場。

これまで多くのクリエータが待ち望んでいた自然な色彩の世界を実現するために、MICROLINE C7300PSIIは生まれました。ドットごとに大きさを64段階に調節し、150線のオフセット印刷と同様のプロセスでトーンを表現するV.D.P.Cシステム(Variable Dot Pulse Control System)を採用。最新のPostScript®レベル2インタブリタを搭載しています。また、A3トンボ入り原稿がそのまま出力できるA3ノビワイド用紙に対応。カンプ制作やプリプレスに即戦力となる性能を搭載したこのフルカラープリンタなら、あなたの仕事に新たな創造性が加わります。

- ●V.D.P.Cシステム(Variable Dot Pulse Control System)採用。
- ●PostScript®レベル2インタプリタ標準搭載。
- ●A3ノビワイド(332×480mm)までの定型用紙に対応。
- ●LocalTalk、セントロニクス、SCSIの各インタフェースを標準装備。
- ●Macintosh7.1以上/Windows95の各日本語対応版ドライバ付属。
- ●Ethernetインタフェースカード(オプション)が、EtherTalk(AppleTalk)、TCP/IP、IPX/SPX(NetWare)の共存を実現。
- ●1WAYローディングが版ズレを防止。
- ●A3ノビワイド/カラー出力時で、1枚あたり323円の低ランニングコスト。
- ●MICROLINE C7300PSII+Fには、リュウミンL-KL™、中ゴシックBBB™、太ミンA 101™、太ゴB101™、じゅん101™、の日本語5書体と欧文39書体を標準装備。
- ●500MBハードディスクを標準装備。メモリは標準24MB、最大136MBまで増設可能。

実物の美しさに、触れていただきたい。
お試し
プリントキャンペーン

MICROLINE C7300PSIIの美しさは、是非あなたの目で実感していただきたい。 そこで沖データでは、あなたの作品を使って無料で出力できる「お試しプリントキャンペーン」を開催いたします。 MICROLINE C7300PSIIの真の実力をお試しいただける、このチャンスを、お見逃しなく。

実施期間:11月11日(月)~12月25日(水)

このページ右下の「沖データファクシミリ情報サービス(資料番号1116)」にて、詳細をご確認ください。

DTPプロフェッショナルのためのフルカラープリンタ

MICROLINE



C7300PSIIseries



MICROLINE ©7300PSII (日本語2書体) 標準価格:¥1,498,000(規別) MICROLINE ©7300PSII+F(日本語5書体) 標準価格:¥1,598,000(規別)

PostScriptプリンタのスタンダード「MICROLINE PSIIV」シリーズ

DTPで威力を発揮するA3ノビプリンタ

MICROLINE 803PSIIV

ML803PS2V (日本語2書体) 標準価格:¥648,000(税別)

ML803PS2VF(日本語5書体) 標準価格:¥798,000(税別)

(沖データファクシミリ情報サービス)

り 63-5445-6171 ②

2 資料番号 ● メニュー 999 を押して ● ブリントキャンペーン 116 下さい。 ● ML7300PSI 730

スタート ポタンを 押して 下さい。



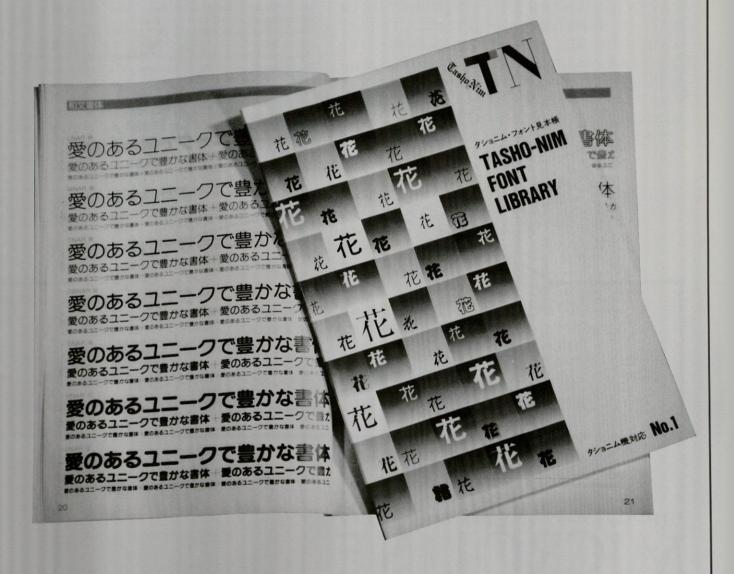
Adobe PostScript

株式会社沖データ

国内営業第1部/〒108東京都港区芝浦4丁目11番22号 ☎(03)5445-6110(代表) 関西支店/〒541大阪市中央区今橋4丁目2番1号(大阪富士ビル)☎(06)229-3013(代表)

*ブッシュ回線に接続されているか、トーン信号を送信する

紙面を豊かな表現にできる多書体ライブラリー





主要フォントを見やすく使いやすい形でまとめた写研70年の歴史の集大成。タショニム・フォント・ライブラリー。必要な書体を素早く選択し、的確に指定できるニモニックコードを使用するなど、さまざまな工夫を満載しています。

タショニム・フォント・ライブラリーは、漢字109書体のほか、欧文・記号類を網羅した書体見本帳です。今回発表する*SAMPRAS-C*は、すべてのフォントを収容出来るほか、CRT上ではリアルフォントで見ることができます。この見本帳をご利用になりたい方は写研までお申し込みください。

※ご利用の際には、同封のアンケートにご意見を賜りますようお願い申し上げます。 次の改訂時にもっと使いやすいものにするための参考にさせていただきます。

お申込みは「タショニム企画室」まで。※定価800円

本社:〒170 東京都豊島区南大塚2-26-13 TEL.03-3942-2211 大阪 TEL.06-375-4500/名古屋 TEL.052-962-1731/福岡 TEL.092-713-8871 札幌 TEL.011-741-4701/仙台 TEL.022-234-2995/金沢 TEL.0762-22-8891/静岡 TEL.054-283-8241/広島 TEL.082-291-3113/高松 TEL.0878-51-7831



Tokyo Communication Arts.

HOW TO THINK 16

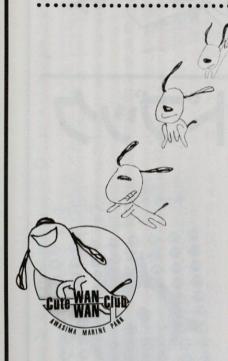
問題点とその解決方法

現地に行き、

実際に感じたものを形に



毛利恭子 Kyoko Mohri 広告デザインコース3年 秋草学園高等学校出身





たちTCAは今年の4月に、協力企業からの課題に従って広告デザインを制作する「クリエイティブ・コミュニケーション」を開催しました。いくつかの課題の中で淡島マリンパークのキャラクター商品用のロゴマークに挑戦した作品が見事クライアントの目に止まり、商品化が決定。実際に現地に足を運び、たくさんの子供たちが楽しんでいる姿を見て「子供が好きになってくれるものがいい」と感じたままを形にしてみる。その結果、クライアントのコンセプトにぴったりな、温かく親しみを感じるロゴマークができ上がったわけです。

HOP, STEP, JUMP!

Every spring, as our annual school event. we invite various clients who'll give their problems to graphic design students to solve.

Ms. Kyoko Mohri's solutions to the Awashima Marine Resort Park were selected from many entries and actually printed on their souvenir goods and currently being sold at the marine shop.



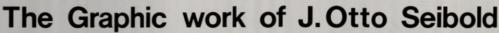


インターネットにホームページを開設しました。 We've opened our Internet Homepage. URL http://www.tca.ac.jp よろしければ広告のご意見などお寄せ下さい。 Please feel free to send your comments on these works. e-mail yoshiko@tca.ac.jp

グラフィックデザイン科(3年制) 【Graphic Design Department】3years イラストレーション科(2年制) 【Illustration Department】2year

イントロデューシング ジョットワールド





ジェイ・オット・シーボルド著 ㈱インターリンク・プランニング編 B5・56ページ 定価2400円

アメリカで大人気のイラストレーター &絵本作家のJ.オット・シーボルドの 待望の絵本風作品集。ミスター・ランチ をはじめとする、魅力いっぱいのかわ いいキャラクターもたくさん登場しま す。日本でも人気上昇中、夢のある楽 しい世界が広がります。 ISBN4-416-89630-1



スージーキャラクターハンドブック

+Bomb KAT100



スージー甘金著 アートディレクション/江並直美 B6・160ページ 定価1400円 ISBN4-416-89635-2

> 人気のイラストレーター、スージー甘金氏の、 100を越すオリジナルキャラクターを一堂に集 めた待望の一冊! 線画はもちろん、3Dソ フトを使った立体作品も多数収録、各作品に はスージー甘金ならではの爆笑プロフィール もついています。さらに、幻の作品といわれ た秘蔵コミック『Bomb KAT』全100話を完全 収録。ファン待望のユニークな作品集です。



パーサムライデジタルロドニ アートフォースツーサウザン



SUPER SAMURAI DIGITAL RODNEY ARTFORCE 2000 ロドニー・A・グリーンブラット著 ㈱インターリンク・プランコ B5・48ページ 定価2200円 ISBN4-416-89629-8

フジテレビ系の番組「ウゴウゴルーガ」の中の 「ロドニー・ガイ」で、日本でもおなじみとなっ たロドニー・A・グリーンプラット。彼の制作 した数ある素晴らしいCGとマルチメディア の中から、選りすぐりの作品を、アーティス トのコメントとテクニカルインフォメーショ ンと共に紹介する楽しい作品集。彼の人気の 秘密と魅力のすべてをオールカラーで収録!



外体性性の一般ない。

生年 ころにその名の由来があります。楷書芸術が高、褚遂良とともに欧陽詢(五五七年—六四一年)は初唐の三大家といわれ、最も楷書を得意としました。欧体楷書はその唐代の楷書芸術の特性と個性そして手書き文字の優雅な味わいを、現代のタイプフェイスの世界に見事に甦らせました。楷書として非常に高い芸術的水準を持ち、らせました。楷書として非常に高い芸術的水準を持ち、らせました。楷書として非常に高い芸術的水準を持ち、自意に満ちていながら完全無欠で可読性に優れ、しかも創意に満ちていながら完全無欠で可読性に優れ、しかも

学

容易に真似のできない領域にあると言える所以です

タイプフェイスコンテスト銀賞受賞作品「欧体楷書」が

タイプフェイスに仕上げました。第三回モリサワ賞国際

同氏を日本に招聘し、約三年をかけて九千字の日本語

せる技と言えるでしょう。作者は名実ともに欧陽詢の後

継者といわれる欧陽詢書法芸術研究会会長の存青氏

字特有の情感や伸びやかさを失いません。これだけ巧みに

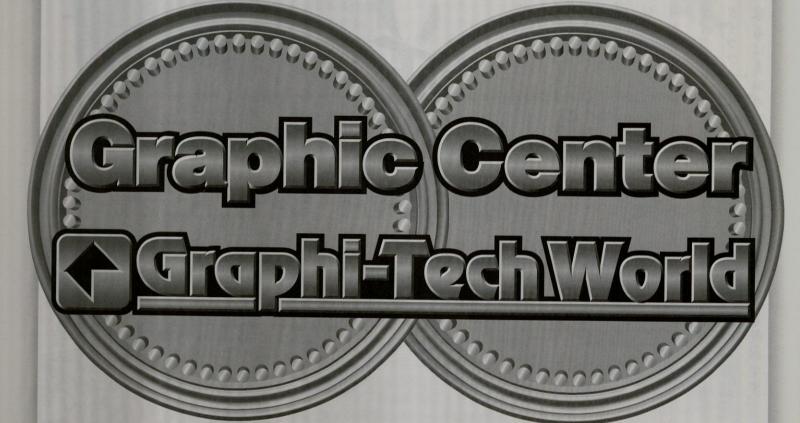
リファインされた書体は、さすがに漢字の国の人のみが成

タイプフェイスとして一定の枠組みの中であっても筆文

モリサワ

Macintosh Output Service Bureau

おまかせ下さいMACの出力



Osaka

グラフィックセンター谷町店 TEL.06-764-6695

グラフィックセンター梅田店 TEL.06-316-1130 グラフィックセンター四ツ橋店 TEL.06-539-5420

グラフィックセンター信濃橋店 TEL.06-441-8543 グラフィックセンター新大阪店 TEL.06-308-8698

グラフィックセンター谷町北店 TEL.06-943-8262 Tokyo

グラフィテックワールド 渋谷店 TEL.03-3498-7491

グラフィテックワールド 銀座店 TEL.03-3562-2911 紀伊國屋アドホック店 TEL.03-3354-6490

• • • お近くのショップをご利用ください。皆様のご来店をお待ちしております。 • • •

ーイメージセッター MT-R1120 (B1) DT-R3100 (A1) MT-R1080 (B2) Lux setter5600 (B2) DT-R1065 (A2) DT-R2065 (A2) Select set7000(A2) Auautra25 (A2) Select set5000(B3) FT-R3035 (A3) UT-6000 (A3)

AS-1500 (A3) ●スキャナ

・ドラム DTS-1045 (A4) DTS-1035 (A4) ICG355i (A4) ・フラットベッド SF-C500PV (4×5) SF-C5000RF (A3) CELSIS360i (6×7) Scan MakerⅢ (B4) Studio Scan

●カラープリンター ・インクジェット IRIS3047 (A0) IRIS3024 (60×60) Kaleida36 (B1) DTM-E×P(1300×)

DTM-Pro (900×) HP-750C (900×)

昇華 HP-600S (A1.A2) 3M-Rainbow (A3) ●その他 ・デジタルカメラ DS-515

・オンデマンド印刷 E-Print 1000 · PS版出力 PI-R1080

・ダイレクト校正 TC-P1080 (A2)

Jan.

Cover Design: Me Company

カバー・デザイン: ミー・カンパニー

1997年1月1日発行 (毎月偶数月10日発売) 第45巻1号·通巻第260号 定価2.850円 国内年間購読料19.380円 (会送料)

Jan. 1997 / Vol.45, No.260 / Bi-monthly Price per copy: ¥2,767 For one-year overseas subscriptions, please inquire our sales agent directly: Nippan IPS Co., Ltd. Fax: +81 (3) 3238-7944

発行人: 小川茂男 編集人: 瀧田 実 編集長: 吉田秀道

発行所: 器該文堂新光社 〒164 東京都中野区弥生町1-13-7 編集: Tel: 03-3373-7255

Fax: 03-3373-7313 広告: Tel: 03-3373-7181 Fax: 03-3373-7301

営業: Tel: 03-3373-7171 Fax: 03-3373-7100 振替口座: 00170-6-6294

印刷所:

本文/錦印刷株式会社 大日本印刷株式会社 表紙/光村印刷株式会社

編集協力:今竹翠,青葉丝輝 レイアウト: 大江安芸,森香橋、福田 忍 翻訳:青木俊夫,日笠干品,長谷川稔, Oxbridge Communications Ltd., The Write Staff, The Workplace,

Publisher: Shigeo Ogawa Editorial Director: Minoru Takita Editor in chief: Hidemichi Yoshida

Published by Seibundo Shinkosha Publishing Co., Ltd. 1-13-7 Yayoicho, Nakanoku, Tokyo 164, Japan Fax: +81-3-3373-7313

Printers: Nishiki Printing Co., Ltd., Dai-Nippon Printing Co., Ltd., Mitsumura Printing Co., Ltd.

Translations: Toshio Aoki, Chiaki Hikasa, Minoru Hasegawa, Oxbridge Communications Ltd., The Write Staff, The Workplace,

Editorial cooperation: Midori Imatake, Masuteru Aoba



Seibundo Shinkosha Publishing Co., Ltd.

●小社発行の雑誌:アイデア・ブレーン・天 文ガイド・MJ無線と実験・子供の科学・展 耕と園芸・HERB・フローリスト・愛犬の 友・ねこ俱楽部・囲碁

●雑誌・書籍のご注文は下記受注センター にお願いします。

誠文堂新光社 練馬支社商品受注センター 〒176 東京都練馬区豊玉上2-6 Tel: 03-5999-5121 Fax: 03-5999-5120

© 1996 Selbundo Shinkosha 禁無断転載 回本誌からの複写を希望する場合は,日本 複写権センター Tel: 03-3401-2382にご 連絡ください。



No. 260

●1月号 目次 / Contents

10

Special Feature Work from London

特集:ワーク・フロム・ロンドン

Cooperation/Text: Michael Horsham 協力/テキスト: マイケル・ホーシャム

Process; A TOMATO Project

⁵² プロセス: トマトのプロジェクト

Text: IDEA Editorial Staff テキスト: 編集部

ME COMPANY Snapshots from a Virtual World ヴァーチャル・ワールドのスナップショット

Text: Jim Davies テキスト: ジム・ディヴィース

NAOHIRO UKAWA "MoM 'n' DaD Productions" 字川直宏 マム'ン'ダッド・プロダクションズ「マガジン・イン・マガジン」

ROGER PFUND Expression Within the Polar Oppositions

ロジャー・プンド 両極をかける表現者

Text: Ines Scolari テキスト: イネス・スコラリ

Series : Elements - Re · Elements Part 8

連載: エレメンツ・リ・エレメンツ パート8

by Keiji Ito →Shinya Nakajima 伊藤桂司→中島信也

One in a Million KYOJI TAKAHASHI's Photographs Designed by KOICHI HARA ワン・イン・ナ・ミリオン 写真: 高橋恭司 デザイン:原 耕一

86 HIROMU HARA The Dawn of Japanese Modern Graphic Design

特別展:原 弘 近代グラフィックデザインの夜明け

Text: IDEA Editorial Staff テキスト: 編集部

SHINRO OHTAKE's Silly But Striking Book

"どうしようもなさ"の落ち着き先

Art/Text: Shinro Ohtake アート/テキスト: 大竹伸朗

The Czech Avant-Garde and Czech Book Design: 1920s and 1930s

チェコ·アバンギャルド ブックデザイン 1920s - '30s

Text: Naomichi Kawahata テキスト: 川端直道

102 Good-Bye JOSEF MULLER BROCKMANN

追悼:ヨセフ・ミューラー=ブロックマン

Text: Yusaku Kamekura テキスト: 亀倉雄策

110 IDEA Talks vol. 1: with MIKE MILLS —マイク・ミルズ

Interview: IDEA Editorial Staff インタビュー: 編集部

News & Information, Exhibitions and Book Reviews,
Addresses of Contributors

ニュース&インフォメーション、展覧会案内、掲載者一覧

Special Feature Cooperation / Text: Michael Horsham LONGON



インターナショナルなグラフィック・シーンにおいて最も注目すべき「場」は、現在、ロンドンをおいて他に存在しないのではないだろうか。ここから生みだされる多様で質の高いグラフィックスは、同様に国際的に注目度の高い東京のシーンと比較しても、東京がともすれば流行からか、ある種のまとまった傾向へと収れんしてしまうような状況とは異なり、エッジにあるものも、保守といわれるものも、それぞれが、もちろんオリジナリティに富み、「確信犯」的な表現で、拠って立つベースがしっかりとしているように見受けられる。表現が明らかに大人であり、ヴィジュアルのそれぞれが、与えられた制約や、自らのスタンスの中で最大限の鮮烈な印象を打ち出しているのだ。おそらく、ロンドンという街には、そういった個々の表現――それはエネルギーと言い換えてもよい――を受けとめるインフラストラクチャーがやはり多様な形で存在しているのだろう。それは、ロンドンの街に無数にある様々なクラブから響く音楽の多様さ、豊かさを例にとっても明快だ。世界各地を自らの「場」へと持ち込んだ大英帝国の威光などを持ち出すまでもないだろう。

歴史や伝統を含め、ロンドンが通過してきた視覚経験と、そこから発せられる創造性は、表層的には模倣できても、そのエッセンスまでを消化するのは困難な作業ではある。こういった蓄積はここ30年間という短いスパンをとってみても、日本のそれと比べようもないくらい起伏に富み、豊かさを感じさせるものなのだから。こういった環境で生き残り、また新たに生まれてくるヴィジュアルたち……。マッキントッシュというツールが、オリジナリティと個人主義を尊重する国民性に見

事に合致し、一挙に加速したということももちろんあろうが、それ以上にグラフィック・シーンを動かす「場」としてのロンドンの現在にわれわれは注目せずにはいられない。
"Work from London" ロンドンという特異な「場」の現在を、そこから生み出されるヴィジュアルを通して様々な角度から知ることは、われわれ個々の視覚経験のみならず、クリエティヴィティをも豊かにする端緒であるとは言えまいか。

本特集では、世界各地での巡回展をスタートさせる同名の展覧会の「アイデア」版をお届けする。



展覧会「ワーク・フロム・ロンドン」は、チェコのデザイナーであり、アーティストであり、俳優でありミュージシャンであるアレシュ・ナイベルトと私の共同作業の結果実現した。アレシュが、ブルノのプラスキ広場に広大なペースがあることが判ったから、ブルノ国際グラフィックデザイン・ビエンナーレの一環として、ロンドンで制作されているグラフィック作品の一部をここに展示する仕事を一緒にしないかと私に持ちかけてきた。私はチェコの人たちはそんな展覧会に興味を示すだろうかと彼に尋ねた。チェコの人たちは、ロンドンではごく当り前の作品すら見る機会がないのだ、というのが彼の答えであった。

結果は彼が言った通りであった。1996年6月にブルノでこの展覧会が開かれると、この展覧会のパンフレット(ごく普通のパンフレットだった)が、まるで貴重品のように扱われた。ポップグループのポスターは、ロシアの聖像を見るときのような熱心さで細かいところまで観察された。(デザイン・ユニット)トマトの出品作品は商業的色彩は皆無のもので、他の出品作に比べて不可解なものであった。しかし、逆にそれが幸いして、観客の好奇心をそそり、観客が群がる結果になった。他の作品の場合も、作品を説明するものは作品名と作者名を示したキャプションだけであった。この展覧会は、それ自体が奇妙な加工品=つまり、思いもかけぬことがきっかけとなって、地理的にほとんど無関係に見えるロンドンとブルノという2つの都市を結ぶイベントとして企画・実施された展覧会であった。また、それは余りにも有名な都市ロンドンの様々な要素を含むデザインとそのプロセスを紹介するものでもあった。

リスの首都ロンドンで制作されているデザインをプロモートす る上で費用対効果の高い方法であると判断されたのである。巡 回展としてグラフィックスを梱包し、展示する非常に適切な方 法を考案し、実施したグラフィック・ソート・ファシリティー のポール・ニールとアンディー・スチーブンスの協力を得て、 また、私が参加を求めたデザイナーたちの惜しみない協力があ って、巡回展「ワーク・フロム・ロンドン」はスタートした。 この記事が『アイデア』誌に掲載される頃には、この展覧会は 最初の開催地マルタを巡回していることだろう。この巡回展は、 マルタから始まってマレーシア、トルコ、イスラエル、パキス タンと続く。これらの国で「ワーク・フロム・ロンドン」がどの ように評価されるかは予想できない。この展覧会で展示される 作品に見られる興味とアプローチの多様性がこの展覧会の特性 の一端を物語っている。しかし、巡回先の国の人々はこれらの 作品の洗練された趣味、ドライさ、巧妙さ、そして「デザイン」 に対してどのように反応するだろうか。こうした作品への興味 がよくても、最近ようやく芽生えたにすぎず、最悪の場合だと まったく意味をなさないこれらの国においてこそ「ワーク・フ ロム・ロンドン」は、その独特の性格が最も明瞭になるのだろう。 そのことがまた、このプロジェクトの最も魅力的な部分となる 可能性がある。

マイケル・ホーシャム

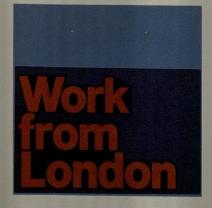
The exhibition Work from London came into being as a result of an initial collaboration with the Czech designer, artist, actor and musician Alés Najbrt. Having found a huge space in the Praski Palaz in Brno and as part of the 17th International Biennale of Graphic design, Brno, Alés asked me if I would be interested in pulling together some graphic work which is coming out of London. I asked why such an exhibition would be interesting to the Czechs. Alés's reply was that people there simply didn't get to see the kind of stuff we in London take for granted.

He was right. When the exhibition opened in Brno in June 1996 the most mundane brochure took on the quality of a rare and precious object. Posters for popgroups were scrutinized with an attention usually reserved for Russian icons. The space that was inhabited by Tomato had no commercial content whatsoever, and was therefore more impenetrable than perhaps any of the other exhibits. Perhaps because of its inscrutable quality it drew inquisitive crowds. As far as the rest of the material goes there was little in the way of a coherent explanation for the stuff that was on the walls other than a caption saying what it was and who made it. This exhibition was in itself a curious artefact, an exhibition curated on the basis of geographic happenstance; a disparate collection of design and work from a city everyone had heard of.

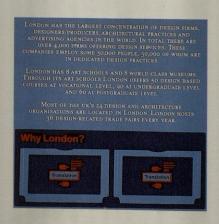
Returning to the UK, the British Council became interested in the idea of the exhibition, seeing it as a cost effective way of promoting the fact of design coming out of the capital. Together with Paul Neale and Andy Stevens of Graphic Thought Facility, who conceived and executed a highly appropriate method of packing and displaying the graphics as a touring exhibition, Work from London began to come together mainly due to the generousness of the people I approached to contribute material.

Now the exhibition exists and by the time you read this it will have appeared at its first port of call in Malta, moving from there to Malaysia, Turkey, Israel and Pakistan. Quite what the visiting public in those disparate places will make of Work from London remains to be seen. The diverity of interests and approaches represented by the work in the exhibition tells something of its own story. But how will people react to this material with its built in sophistictation, dryness, cleverness and 'design'? In countries where these qualities are at best nascent and at worst meaningless Work from London will take on its own distinct character, and that is potentially the most fascinating part of the project.

Michael Horsham







From Mon Mon



Shot of W.F.L. Exhibition, part of "TOMATO" (Brno)

Michael Horsham(L), Alés Najbrt (Brno)



The quality and communication of the idea has always been central. To the fractice of graphic design. Traditionally, the execution of the idea has been carried out by an army of paste-up artists skilled in the Use of Linovitee, frotocopters, cow-gim and scalpels. The arbiyal of the Macintosh computer is 184 sam the beginning of the end of this 'workshop' approach to graphic design. Computer technology allowed small studios to compete with the Larger practices in a way which had

Scalpel->computer



ALTHOUGH WORK FROM LONDON CONCENTRATES UPON THE OUTPUT OF DESIGNERS BASED IN THE CAPITAL, LONDON EXISTS IN THE WIDER CONTEXT OF THE UK AND THE WORLD AT LARGE.

IN THE UK, AND DESIGNERS EARNED ÉTONG MILLION FOR THE BRITISH ECONOMY IN 1994, THE LAST YEAR FOR WHICH FIGURES ARE AVAILABLE.

or graphics, communications, product and interior design, the uk is the biggest market in Europe.

he wider context













Work from London

London is some 610 square miles containing around 8 million people. Like other cities. London continually reconstitutes and reinvents itself by dint of a dynamic economy coupled with the effects of changing demographics. As well as the 'hard' factors of economics and population. London is driven by an ephemeral and sometimes nebulous cultural dimension. The mood created by contemporary approaches to fine art, film, music, fashion and photography, together with the rhetoric surrounding digitization and technology and the so-called 'new media' has shaped a number of approaches to the manufacture of London's visual culture. Within that visual culture. London continues to spawn a series of graphic languages and is a seemingly inexhaustible font of ideas. The diversity of approaches emerging from London's design studios and practices embraces many different ways of working and producing

Traditionally, graphics has been the domain of the visual pun articulated by means of the combination of image and typography. Other approaches explore the rationalism inherent in design as problem solving, using the resolution and security of the grid applied to the difficulties of clear communication. Latterly, some practitioners have also found the opportunity to move away from static print media and into moving images. Work from London reflects all of these approaches. In addition the exhibition presents the diversity of opportunity for the manufacture of work available to designers in London. Work from London features designs for corporate brochures from UK and international clients; there is promotional material for record companies and bands; there are corporate identities, promotional material for arts organizations, public information design and there is personal, experimental work.

To place these different approaches to making graphic work together in an exhibition is not to imply a greater validity on the part of one approach or another. This exhibition is not directed towards explaining graphic design in terms of its quality or effectiveness. Instead, the intention behind Work from London is to offer a way to appreciate some of the qualities of London and by extension, the UK as a place where a particular and unique set of circumstances prevail. Those circumstances have resulted in a rich diversity in the approach to the idea of design and the making of visual communication.

In keeping with London's own awareness of its importance as a city that invents and establishes global trends instead of simply following them, the city has begun to assess itself. There have been reports written and published concerning London and its relationship to design. Two, by Comedia and Mary Rodgers for the London lobbying group

(continues on page 20

where i come from we eat iam



Strict - misic + media
the first exhibition of its kind

2 september

1 median

shakealuk

barbican art gallery barbican centre london ec2

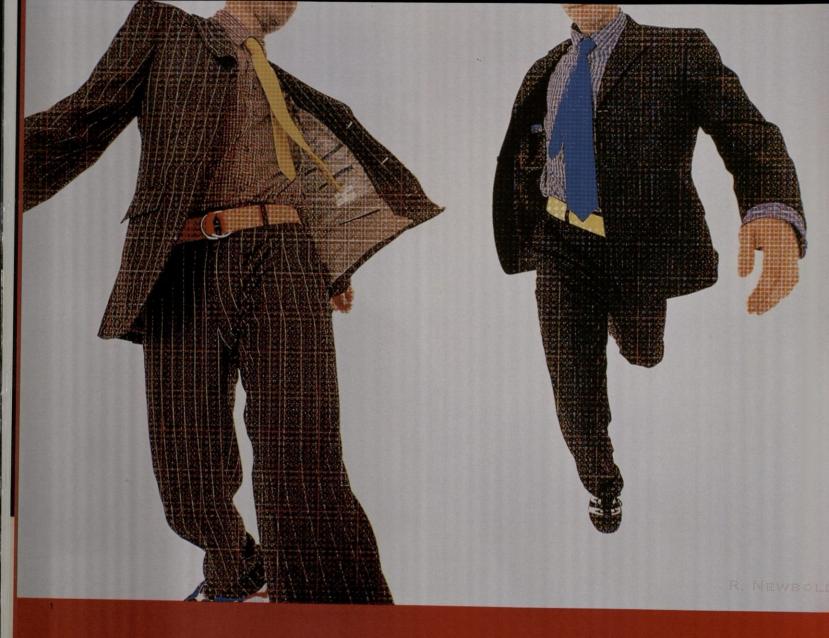
http://www.obsalete.cass/jere

\varTheta barbicas, moorgate

1

BARBICAN ART GALLERY

+++FLY











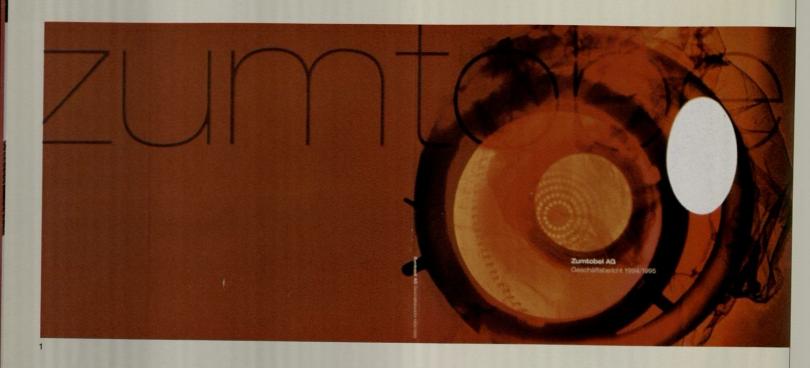
DON?T BLAME ME

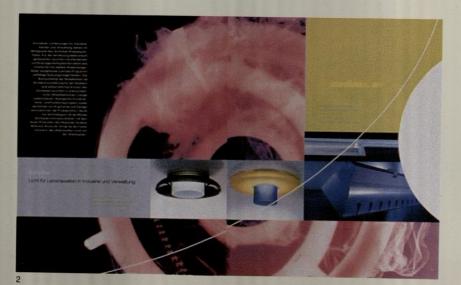
+++ABOUD SODANO

7.8









リサーチ·スタジオは10年前に、ネヴィル· ブロディによって設立された。

10チーム編成から成るこのスタジオはアイリントンに拠点を置き、マスメディア全体にわたるさまざまな活動を世界各国で展開している。その内容は、印刷メディアに関わる表現はもとより、映像、マルチメディアなど、あらゆる視覚メディアに及んでいる。

主なクライアントは本国イギリスのほか、ドイツ、オーストリア、アメリカ、そして日本 となっている。

ブロディとこのスタジオを共同創設したフワ・リチャーズとサイモン・スタインズはマネージメント面のほか、アートディレクションにおいても中心的役割を果たしている。



GCOMMork
London

+++RESEARCH STUDIOS

THE HUKYLE CKYL deranscends dans ETAS Y MINAS Ups an Academics 1000年第一章 SALL SALL offer the Voice ecomes 3 #auch.



PLES IN CHAST CONDUCT WHEN SHE SHALL BELLING WHEN THE STREET STREET SHE STREET SHE STREET SHE

This volume contains some of Kafka's most famous stories, including Metamorphosis, Investigations of a Dog and In the Penal Settlement.

'Only one character appears in all his work; the *Homo* domesticus so Jewish and so German, so eager to keep his place, however humble and in whatever order – the universe, a ministry, a lunatic asylum, a gaol' – **Jorge Luis Borges**

'There is no other writer of his age – and it was the age of Rilke and Proust – whose work carries so continuously, inevitably and naturally the mark of greatness' – Edwin Muir

'One of the few great and perfect works of poetic imagination written during this century'

Elias Canetti

Kafka

Kafka

Metamorphosis & other stories

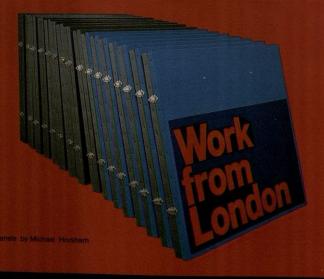
MINERVA



Minerva U.K. £5.99

+++ANGUS HYLAND

Work Francisco



designers into the design economy and many make thei from all over the country.

London as the capital city of the UK, contributes to the UK as a center for design. For graphics, communications, prodesign the UK is the biggest market in Europe. 40% of firms are in the UK and Designers earned £ 1000 mi economy in 1994.

Within the UK, London is the acknowledged center for denot tell the whole story in terms of graphic design or visu UK cities are important and have their own scenes. The gr from Sheffield, Manchester and Leeds is no less culturallicities and by extension the UK as a whole, but in terms of and the sheer opportunity to make work, London is uniqueds to be assessed and addressed on its own terms.

Most design practices are located in central London and the for that: in spite of the burgeoning web of telecommunication phones, ISDN lines and such most of the communication





UNILEVER

WE CASE SEEN RETAINED BY CHILEVER TO DESIGN

AND PROCESS. THAT SEARCH SEEN CHILEVER TO

CONTROL THAT SEARCH SEEN CHILEVER

CONTROL THAT SEEN CHILEVER SEEN CHILEVER

CONTROL THAT SEEN CHILETER

CONTROL THAT SEEN CHILEVER

CONTROL THAT SEEN CHILE

u

RONED OFF

WELT ARE ALL COMMITTED SUPPORTERS OF A UNITED EUROPE. IT IS INCONCEIVABLE THAIN CAN SURVIVE ON ITS OWN AS AN ISLAND FULL OF EUROPHOBES DESLY AVOIDING CONTAMINATION BY THOSE DAMN FOREIGNERS. HOWEVER. OUR ATIL HAS BEEN DRAWN TO ONE PIECE OF ECLEGISLATION THAT HAS SET OUR ALARM BEIGING. THE GREAT BRITISH BANGER DOESN'T MEASURE UP TO EC STANDARDS. WET TALKING INCHES HERE. OR SHOULD I SAY CENTIMETRES. WE ARE IN FACT TALBOUT MEAT CONTENT. I HAVE ALWAYS FOUND MY EARLY MORNING SAUSAGE PER MEATY ENQUGH BUT APPARENTLY THERE IS TOO MUCH CEREAL AND TOO MUCH CENEAL THAT THE OWNER AND THE SHORT HAS EQUIS THE GREAT BRITISH SNORKER. THE ONE MEAL THAT NO OTHER COUNTRY HAS EQUIS THE GREAT BRITISH COOKED BREAKFAST AND THE SNORKER IS A VITAL PART OF ILINARY DELIGHT.

YOUHAVE TO REMEMBER YOUR LAST CONTINENTAL BREAKFAST – ROCK HARD BREAD. CRIG CROISSANTS AND SYNTHETICALLY FLAVOURED JAM – TO REALISE THAT THE CONTALS WOULD BENEFIT FROM A MEAT INJECTION AT BREAKFAST TIME.

WHUT CEREALS I HEAR YOU CRY. WHAT ABOUT THEM I SAY, I'D RATHER EAT SAWDUST FROBOTTOM OF A HAMSTER'S CAGE. IF YOU CARE ABOUT COOKED BREAKFASTS, TOAD IN ILE OR BANGERS AND MASH, THE TIME TO ACT IS NOW. CALL YOUR MEP AND MAKE SUF ARE AWARE THAT WE WON'T ALLOW THE SAUSAGES DEMISE WITHOUT A FIGHT.



Pork?

+++GIANT

way to London

overall success fluct and interior Europe's design on for the UK

sign but it does I culture. Other phics emerging valid for those scale, invention e and as such

ere is a reason ations, mobile and discussion that goes on around design - briefings, pitches, development and delivery is still carried out face to face by word of mouth. Luckily, designers are among the most flexible of workers in term of the spaces in which they can operate. A combination of a London's recent history and the development of computer technology has allowed designers to move into areas which were once the preserve of other industries. Economically, geographically and in terms of workspaces, in the last couple of decades, London has shifted its shape to an enormous extent. The fluid dynamics of global market forces have made their impact felt on both the fabric of the city and the shape of the city's industries.

In the past, the urban fabric and therefore the economics of London had been shaped by local industries and their proximity to either the source of their raw materials or the traditional location of ancient trades. Bermondsey on the south side of the river Thames, close to the docks, was the center of the leather trade where tanneries and dressing houses, warehouses and saddlers were based, up until the early part of this century. Hackney, to the east of the city, with its canal networks leading to the London's timber

wharves, where wood was delivered from all over the globe, was the center of the furniture manufacturing trade up until the last decade. Now only vestigial traces of these once thriving industries remain.

Closer to home as far as this exhibition is concerned, the streets around St Paul's cathedral were, in the eighteenth century, the center of the printing trade and letter press, chapbook printing, engraving and reproduction were centred around a tiny area. Fleet Street, the centre of the newspaper industry until the early 1980's, grew from the concentration of traditional print expertise in this area. New technology was at least in part to blame for the withdrawal of the newspaper industry from its traditional central London location. The computer removed the need for hot metal compositing and the business of making newspapers suddenly became more flexible in terms of location than it had ever been.

It's no accident that new technology - in the shape of the Macintosh computer - has also shaped the way that graphic design lives in London. The arrival of Mac technology from the early 1980's onward saw the dissolution of the geographic certainty of 'workshop graphic design' and

(continues on next page)



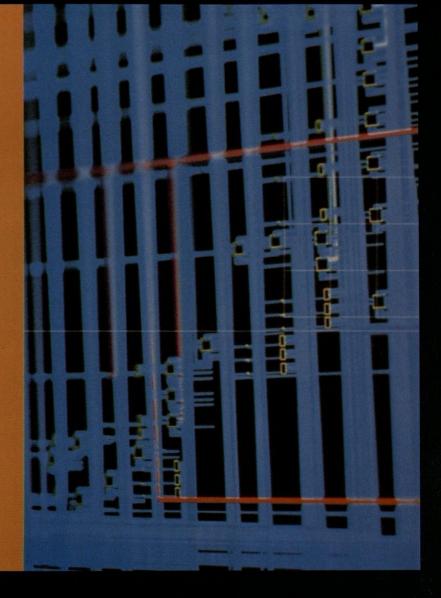
together with it the art of paste up and letterpress. In short, to a large extent, the traditional printshop/graphics industry closed down and moved out. This coincided with the slump in manufacturing in the city center. Where once hatmakers, sewing machine manufacturiers, dress-makers and fabric dressers, warehouses, wharves and welders plied their trades empty industrial spaces became available ideal for studios equipped with computers rather than drawing hoards.

As London's traditional, industrial manufacturing base has shrunk so the kind of space has become available which makes ideal studio space for designers. Those working in the field of graphics, and those making graphic material, have tended to locate themselves near their providers of commissions work in a variety of graphic media. In this way the old model of trades operating close to the source of their raw materials is continued. Soho with its range of advertising agencies, film companies, post production houses and repro houses, is densely populated with designers occupying small studio spaces.

Furthermore, the impact of new technology in the shape of the computer







+++CARTLIDGE LEVINE

has meant that it is completely feasible for a small operation to compete with larger, more established practices. Historically, the mark of a high-end, established practice was its ability to deliver finished artwork prepared to a high standard. On big jobs this demanded teams of paste up artists adept in the use of glue and scalpels who made the camera ready artwork

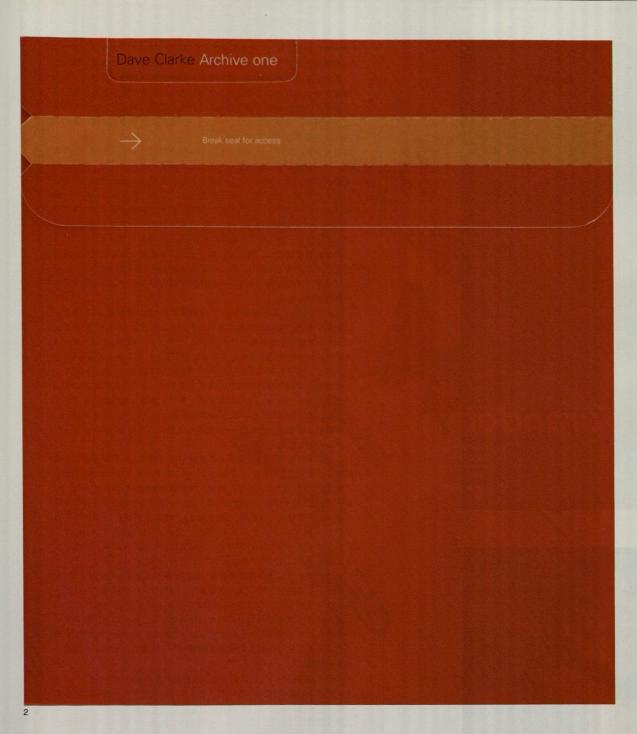
Now, a couple of people with a good Macintosh can output their work on disk to a reproduction house who will color correct, proof and prepare to the highest standard. Teams of skilled workers are no longer needed, and the smaller studio is lean with minimal overheads and running costs, and if the quality of ideas is there, then they can do rather well. In London, this is true of the likes of Push, GTF, North and many others. Size, in many ways, no longer matters. Push are three people occupying an old factory space with computers, GTF are just two working from a disused sewing machine factory with computers and North are four people working out of what was a Thames-side warehouse with the ubiquitous computers.

Whilst many designers know of each other and each others work, there is perhaps little in the way of community. Quality of work, approach to work,

size and constitution of company, the generation and age of the various practitioners serves often to divide rather than unite. Design is after all an industry and as such it is competitive at its core and relies to some extent on the diversity and difference in approach inherent in London's visual culture. It is this capacity for difference that is illuminated by placing problem solving from Cartlidge Levine next to the continuous manufacture of personally-motivated work by Tomato. Equally, the investment in the idea and the fact of new technology at Neville Brody's Research Studios throws into relief the dogged belief in the traditional approach to graphic design at Pentagram and the Partners. The clarity and immediacy of pop ephemera with Mark Farrow and Stylorouge, or the design for a quality graphic publication and as in the work of Stephen Coates and Mark Porter sit at opposite ends of the spectrum to, say, the typography of Jonathan Bambrook, hopefully their juxtaposition here tells its own story. Ultimately, Work from London offers an opportunity to view a disparate collection of design from the UK's capital and thereby to begin an understanding not only of the graphic languages emerging from the city, but also of the city itself.

A DESIGN FOR LIFE MANIC STREET PREACHERS

A NEW SINGLE 15 04 96 TWO CDS, CASSETTE



現在、7人のメンバーから成るファ ロ・デザインを主宰するマーク・ファローは1960年、マンチェスター 生まれ。テイムサイド大学でデザインを学んだ。

1985年にロンドンに移りXLデザインで勤務した後、1986年に<3アソシェーツ>を結成(<3アソシェーツ> はのちに<3a>となる)。

彼らの代表的な仕事として、ペット・ショップ・ボーイズの一連のアート ディレクションがあり(デビュー・シングルを除く)、1987年にはD&AD 最優秀レコード・ジャケット賞を受 賞している。

(彼らのデザインの特徴は、過激で、 饒舌なデザインが多いロンドンのサ ウンド・ヴィジュアルのなかにあっ て、写真と色彩を見事に活かした、 いたってシンプルでアンビエントな 表現に戻きるだろう。



Work fir

「ワーク・フロム・ロンドン」

ロンドンは、約610平方マイルの面積の中に約800万の市民が居住する都市である。他の都市と同様、ロンドンは、ダイナミックな経済と変化する人口動態の影響という要因を背景にして、絶えず自己改造を繰り返している。ロンドンを動かしているのは経済と人口という「客観的な」要因だけではない。現われてはすぐに消えてしまう、また、時として掴みどころのない文化的な要因も関係している。美術、映画、ファッション、フォトグラフィへの現代的アプローチにより創出されるムード、デジタル化とテクノロジーを取り巻くレトリック、それにいわゆる「ニューメディア」とが相まって、ロンドンの視覚文化形成へのいくつかのアプローチが出現した。

そのような視覚文化の中で、ロンドンは一連のグラフィック言語を生み出すことをやめず、尽きることのないアイディアの泉であるかのようである。ロンドンのデザイン・スタジオ、ロンドンのデザイン・シーンから出現するアプローチの多様性は、無理矢理割られたものではなく、実際に用いられている様々なデザインの手法、プロセスを反映している。

ロンドンでは古くから、グラフィックスはイメージとタイポグラフィのコンビネーションによって、視覚言語としての役割を果たしている。他のアプローチとしては、コミュニケーションの明快さを重視した際に応用されるグリッド手法を用いて、デザインに固有の合理主義を探求するものもある。

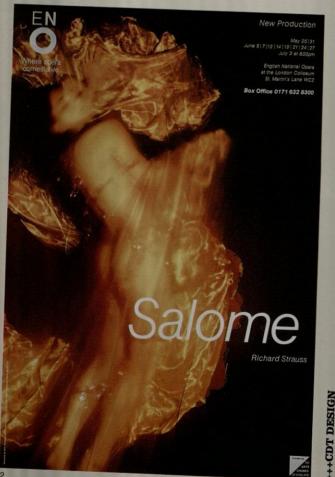
最近は、一部のグラフィックデザイナーが静的なプリント・メディアから、ムービンク・イメージ(動画)へと転換するチャンスを手に入れている。

「ワーク・フロム・ロンドン」はこうしたアプローチのすべてを反映している。さらに、この展覧会はロンドンのデザイナーが得られるデザイン制作するチャンス(デザイン・フィールド)の多様性をも反映している。「ワーク・フロム・ロンドン」のボイントの一つは、イギリスや海外のクライアントから依頼されたパンフレットのデザインである。レコード会社やバンドのプロモーション用パンフレット、CI計画、美術団体のプロモーション用パンフレット、公共機関の広報デザインなどのほかに、デザイナーの個人的な実験的作品も展示されている。

「ワーク・フロム・ロンドン」はこれらの異なるアプローチに重点を置いて様々なグラフィックスを一堂に集めた展覧会である。従って、この展覧会は、ある特定のアプロー

→P. 28につづく)





この展覧会はグラフィックデザインを、その質あるいは効果の観点から説明するものでもない。ロンドン、ひいては、独特なデザイン制作環境を持つ場所としてのイギリスの特性の一部を理解する方法を示すことがこの展覧会の目的である。こうした環境のパターンはデザインという概念、視覚コミュニケーションの創出に対するアプローチの多様性に起因している。

ロンドンは、グローバルなトレンドに従うのではなく、グローバルなトレンドを創出する都市としての自らの重要性を意識して、自己評価を開始した。ロンドン、そしてロンドンのデザインとのかかわり合いに関するリポートが作成され、発表されている。ロンドンのロビー活動団体「ロンドン・ファースト」のために、それぞれコメディアとメアリ・ロジャースが作成した2つのリポートには「ワーク・フロム・ロンドン」のコンセプトと最も密接な関係のあるデータが含まれている。

これらの報告書には、例えば、ロンドンで毎年開かれるデザイン関係の見本市は36件にのぼり、ロンドンには国際的な美術館が8つあり、さらにイギリスの24のデザイン・建築団体の本部はロンドンにあるなどの一般的説明がある。

このような事実は国際都市ロンドンを説明するためには役立っているが、ロンドンがその真価を発揮するのはデザインの分野においてである。ロンドンは世界中で最もデザイン会社、デザイナー兼プロデューサー、建築家、広告代理店が集中している都市である。ロンドンでは4,187ものデザイン会社がデザイン・サービスを提供している。これらのデザイン会社の従業員の総数は約50,000人であるが、そのうちの約30,000人はデザイナーである。さらにデザイン業界と密接な関係のあるプロフェッショナル―デザイン・ツール供給業者、ソフトウェア・メーカー、印刷業者、編集者、著述家―が活動しており、これらのプロフェッショナルの数も数万人にのぼる。

ロンドンでは教育界と産業界との結びつきは期待されているほどに明瞭でも、活発でもない。しかし、ロンドンのアートスクール8校で履修できるデザインのコースは、50コースが専門学校レベルのコース、90コースが4年制大学レベルのコース、60コースが大学院レベルのコースである。イギリスでは毎年、約15,000人の学生がデザイン・コースを修了している。ロンドンでデザイン実務、デザインが繁栄しているのは、若いデザイナーが次々とデザイン界に入り、また、その多くがロンドンに進出しているためである。

ロンドンがイギリスの首都であるため、イギリスは国際的デザイン・センターとして成功している一面もある。グラフィックデザイン、コミュニケーション、プロダクト・デザイン、インテリア・デザインに関しては、イギリスはヨーロッパ最大の市場である。ヨーロッパのデザイン会社の40%はイギリスのデザイン会社である。1994年におけるデザイナーのもたらした収入の合計は10億ポンドに達し、イギリス経済に大きく貢献した。

イギリス国内においては、ロンドンは自他ともに認めるデザイン・センターであることは間違いないが、グラフィックデザインあるいは視覚文化については、そうは行かない。他の都市も重要であり、それぞれ個性を発揮している。シェフィールド、マンチェスター、リーズなどで制作されているグラフィックスはそれぞれの都市、ひいてはイギリス全体の文化に貢献している。しかし、規模、創造性、制作のチャンスという点では、ロンドンに比層する都市はなく、従って、ロンドンは、ロンドンそれ自体として評価されたばならない。

ロンドンでは、デザイン会社の大部分は市の中心部に位置しているが、これには理由がある。遠距離通信網、携帯電話、ISDN回線が発達したにもかかわらず、デザインに関するコミュニケーションとディスカッション―オリエンテーション、見積もり、制作、作品の引渡し―の大半は依然としてマン・ツー・マンの口頭によるコミュニケーションでなされている。さいわい、デザイナーは作業スペースに関しては最もなされている。さいわい、デザイナーは作業スペースに関しては最も横の発達のお陰で、デザイナーはかつては他の業界の拠点であった場所に移ることができた。過去20年間に、経済的にも地理的にも、また、作業スペースに関しても、ロンドンはその形が大きく変わった。クローバルな市場構造の流動がロンドンとこの都市の基本構造と様々な産業の形態に影響を及ぼしている。

かつては、ロンドンの都市構造、従って、ロンドンの経済は、国内産業が原材料供給源あるいは古くからある貿易都市に近いという事実を背景に形成された。今世紀初頭までは、テムズ川の南側にあるバーモンジィーが皮革業界の中心地で、ここに皮なめし工場、皮仕上げ工場、

(→P.30につづく



renaissance ibiza 96

Renaissance at Pacha DJ's

Every Wednesday 26th June - 18th September 1996 Midnight - 7am



Residents John Digweed Fathers Of Sound Ian Ossia

None of the above DJ's are exclusive... But the club is!

PA's

Wednesday 26th June Tickets

John Digweed Fathers Of Sound Nigel Dawson

Advance tickets available from Renaissance 01782 717872/3 Kiwi Bar, San Antonio

1000 Pesatas discount and free drink with a Renaissance flyer

Free coaches from San Antonio to Pacha 12.30am - 2.30am from Kw Bar and Cafe Del Mar Peturn coaches from Pacha to San Antonio 5am - 7am

For further details of Renaissance at Pacha call 01782 717872/3

eixmag MUZIK DÜ

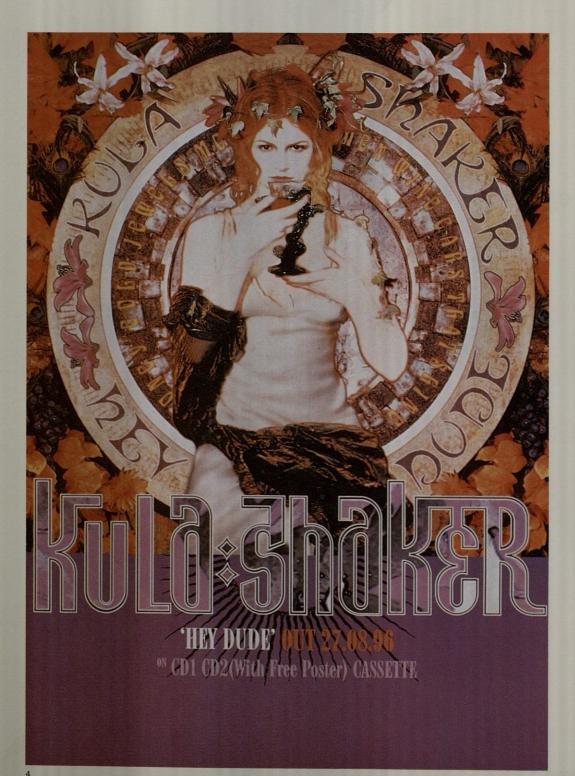
+++DOLPHINE

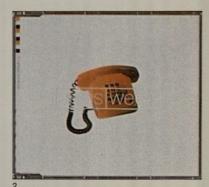














+++STYLOROUGE

日本でもいち早く注目され、人気も高い Stylorougeはロッド・オコナーが81年に設立したデザイン集団である(現在スタッフは10人)。日本でのコンテムボラリー・プロダクションのような存在にあたるこの集団は、仕事のメインはやはリレコード・ジャケットで、ここ数年はブラーをはじめとするブリッド・ポップ系のアーティストのジャケットを手掛け、一層注目度を増した。そのせいもあってか、最近は日本のアーティストの作品も手掛けており(ムーンライダース、遊佐未森など)。一方ではロイヤル・オペラ・ハウスなどのヴィジュアルも手掛けている。現在、最も活気のあるデザイン集団の1つである。



+++STEPHAN COATES

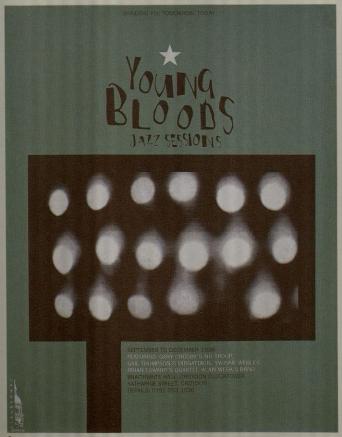
+++SIOBHAN KEANEY





+++RUSSEL WARREN FISHER

+++PUSH



倉庫、馬具屋などが集中していた。10年前までは、ロンドンの東部にあるハクニー―ここから運河網が市の木材河岸に通じており、この河岸に世界各地から木材が運ばれてきた―が家具製造の中心地であった。現在、これらのかつて栄えた産業はその痕跡をとどめるだけである。これもこの「ワーク・フロム・ロンドン」に関連することだが、18世紀には、セントポール大寺院周辺の通りは印刷業の中心地であり、この狭い場所に活版印刷所、チャップブック(呼び売り本)の印刷所、製版業者などが集中していた。1980年代のはじめまで新聞業界の中心地であったフリート街は、伝統的な印刷技術がここに集中した結果、発展したのであった。新聞業界がこのロンドンの中心部から撤退した背景には少なくともニュー・テクノロジーの出現があった。コンピュータの発達により金属活字による植字や印刷の必要がなくなり、新聞づくりという作業は場所に関してはより柔軟性を持つようになったのである。

ニュー・テクノロジー マッキントッシュ・コンピュータという形 がロンドンにおけるグラフィックデザインに大きな変革をもたらした。1980年代のはじめにマック・テクノロジーが導入されて以来、「グラフィックデザインのためのワークショップ」や、さらに版下技術、活版印刷などが手近な存在である必要はなくなり、伝統的な印刷業界は他の場所に拠点を移した。これは市の中心部における製造業の不振と時を同じくした。

かつては帽子製造業者、ミシン製造業者、婦人服仕立て業者、織物仕 上げ業者、倉庫業者、河岸、溶接業者などが空地同然の工業用地に殺 到する形で進出した場所が、今や製図板ではなくコンピュータを備え たスタジオにとって理想的な場所になった。

ロンドンの伝統的な工業基盤が縮小するにつれて、デザイナーにとって理想的なスタジオ用スペースが提供されるようになった。その結果、グラフィックデザイン会社やグラフィックデザイン用材料を製造する会社が様々なグラフィック・メディアの仕事を提供する企業、団体の所在地の近くに事務所を構えるようになった。このように、原材料供給源の所在地の近くで事業を営むという伝統的な事業パターンは存続しているのである。広告代理店、映画会社、ポストプロダクション、印刷業者がひしめくソーホー地区にはまた、小規模なスタジオを拠点に活動するデザイナーがうようよしている。

さらに、コンピュータという形で導入されたニュー・テクノロジーは小 規模な企業が大企業と競争することを可能にした。これまでは、高水 準のアートワークを納入できるということが一流デザイン会社の看板 であった。そのため、大規模な仕事の場合、糊とカッターの使い方が 上手で、フィニッシュしたアートワークを制作できるチームが必要で あった。

しかし現在は、デザイナー2人と高性能のマッキントッシュ・コンピュータ1台だけで最高水準のアートワークがフロッピーにアウトブットされ、そのフロッピーが印刷所に持ち込まれる。熟練者のチームはもはや必要とされず、小規模なスタジオは最小限の間接費と運営経費で運営することができ、アイディアの質がよければ、うまくやっていける。ロンドンでは、プッシュ、GTF、ノースなどがその好例である。今や規模は問題ではない。プッシュは古い工場を改造したスタジオで、3人のデザイナーがコンピュータを駆使して作業を進めている。GTFは2人のデザイナーが廃れたミシン製造工場にコンピュータを持ち込んでスタジオにしたものであり、ノースは4人のデザイナーがテムズ川のほとりにある倉庫をスタジオに改造し、至るところにコンピュータを配置したスタジオである。

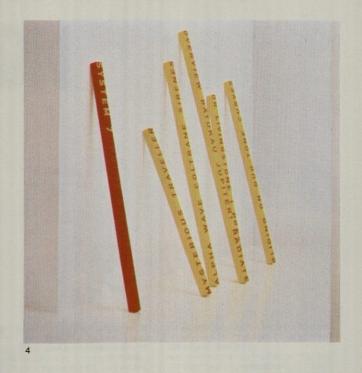
多くのデザイナーがお互いを、またお互いの仕事を知っているが、彼 らの間にコミュニティ的な意識はほとんどない。仕事の質、仕事への アプローチ、会社の規模と構成、世代と年齢の差といった要因が彼ら を団結させるよりもむしろ分裂させている。要するにデザインも1つの 産業である。それは競争を基本原則とする産業であり、その根底には ロンドンの視覚文化に固有のアプローチの多様性と差異がある。この 多様性と差異はカートリッジ・レバインの問題解決型のデザインとトマ トの個人的動機に基づく継続的な創作作業を並置することにより明ら かにすることができる。同じように、ネヴィル・ブロディのリサーチ・ スタジオにおけるアイディアとニュー・テクノロジーへの投資はペンタ グラムにおけるグラフィックデザインへの伝統的アプローチに対する 確固たる信念を浮き彫りにしている。マーク・ファローやスタイロルー ジュにおけるポップアート、すなわち高級グラフィック誌のためのデ ザイン、それにステファン・コーツやマーク・ポーターの作品に見られ る明快性と即時性と、例えば、ジョナサン・バーンブルックのタイポグ ラフィとは非常に対照的である。このような作品の並置がこの「ワーク



+++STUDIO MYER SCOUGH

・フロム・ロンドン」の目的をよく説明してくれると思う。要するに、「ワーク・フロム・ロンドン」は、イギリスの首都ロンドンの様々な要素を含むデザイン・コレクションを見て、そしてロンドンに出現するグラフィック言語のみならずロンドンそのものを理解する機会を提供するものである。





+++DAVID JAMES ASSOCIATES

PROCESS; IS

PROCESS; A TOMATO PROJECT

A COLLECTION OF WORK AND THOUGHTS
IMAGES AND TEXT
MEMORIES AND IDEAS

A BOOK

TOMATO NOVEMBER 1996

(WHEN YOU ARE NOT THINKING) WHAT GOES ON

(WHEN YOU ARE THINKING) WHAT GOES ON

「その後、学校教育などを通じて祖父の語った物事の相互 関連性、進化、"旅"(プロセス) についての考えが深まった。 この世には、従うべき、あるいは表現すべきためのルール はなく、ただ瞬間、そしてその瞬間は手元にあるあらゆる 手段を用いて表現できること――それが造形、言葉である に関係なく――が明らかになった」

トマトの精神的支柱であるメンバー, ジョン・ワーウィッカーの言葉である。

トマトというグループのストレンジさについては、今まで様々な形で語られてきた。例えばそれは、「反美学」「越境者」「異端者」といった具合に。そういった言辞の中には

もちろん,シンプルに「カッコいい」といったレベルものまでもが含まれている。だが、これらのどれをとってもトマトの部分を踏るには正しい形容であったが、そのすべてを物語るのには不充分なものであった。

上記のジョンの言葉ほど、トマトを端的に表わすものには出会ったことはない。

「プロセス」あるいはジャーニー(旅)――これこそが、トマトがトマトでありうる条件である。

個々のメンバーの経験や感覚のすべてを集め、互いが刺激し合うポジティブな相互依存関係の中で―個々の感覚や考え方の変容を享受しながら―言葉、造形そして意

味について、あらゆるメディアにおいてこだわり続け、表現し続ける……時には自ら設定したルールを破り、時には状況に応じて互いに役割を変えつつ複数のメンバーでそれらは構築され、表現されていく……それぞれの瞬間。 モニへ至るプロセス(瞬間の集積)がまさにトマトそのものなのだ。だからこそ彼らの行なっていることは、見た目は模倣できてもその本質においては彼ら以外の何者も

イメージ、意味、言葉における永遠の未完形……プロセス、 トマトの「旅」はさらに続けられる。

今回,彼ら自身が自らの哲学に焦点を当てて「Work from

London] 特集のためにオリジナル・ヴィジュアルを提供してくれた。 彼らの哲学である「プロセス」焦点を当てた作品集もまもなく完成の予定だ。

なぜ、トマトのような、ヴィジュアルにおいても、そして 何より哲学においても、特異な集団がロンドンに誕生し えたのか。それをヴィジュアルから読み解くことこそが、 Work from Londonへの回答の一つをを導き出す最良の方 法だと言えよう。









Charlie is water He doesn't true Harry Knows to He doesn't dwe Charlie keeps

The two men was The two men...

ng Harry. snim.

m It.

tching.

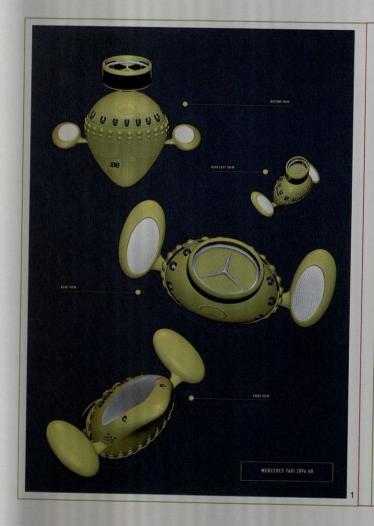
laugh about everything.
laugh about nothing.
become inseparable friends.
kill each other.

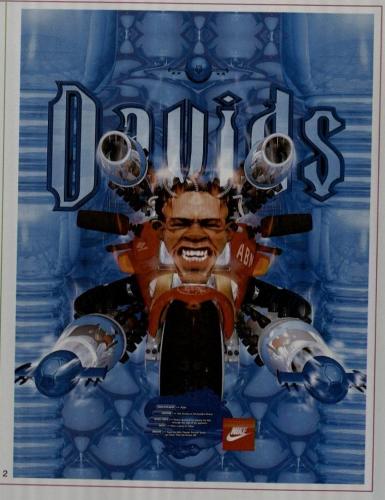




Me Company Snapshots from a Virtual World

Text: Jim Davies





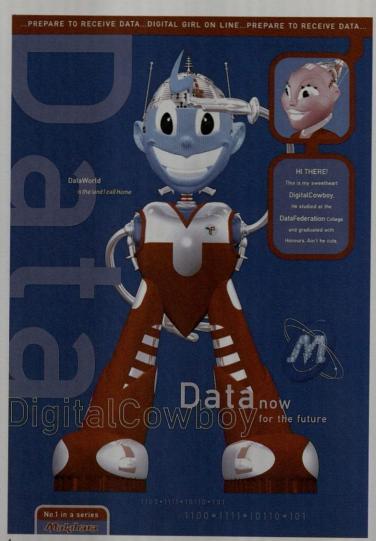
ヴァーチャル・ワールドのスナップショット

「ワーク・フロム・ロンドン」――ロンドン・ベースのクリエイターの中でも,リードオフ・マンとしてひときわ生彩を放っているのが,Me Companyである。自分たちのイメージを実現すべく,コンピュータを駆使して生み出されるヴァーチャルでしか成立/存在しえないキャラクターやストーリーをはじめとした独自の世界は,まさに彼らの世界観の反映であり,彼ら自身が求めるものなのだ。ヴァーチャル・ワールドならではの神話の構築である,と言えよう。それはまた,動画やグラフィックスに定着され,可視化されることで現実のデザイン・シーンにおいても新たな神話を創造することにもなるのだ。

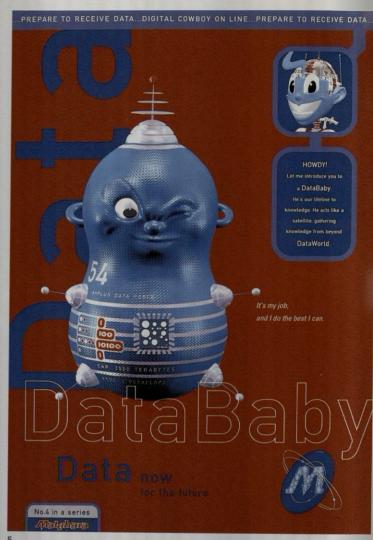
As an improtant part of Work from London, IDEA features Me Company, one of the leading London-based design groups. The images they create are the reflections of their visions which can only exist in the virtual world. Me Company provides a kind of mithology from the virtual world when their thoughts come into graphics and moving pictures.





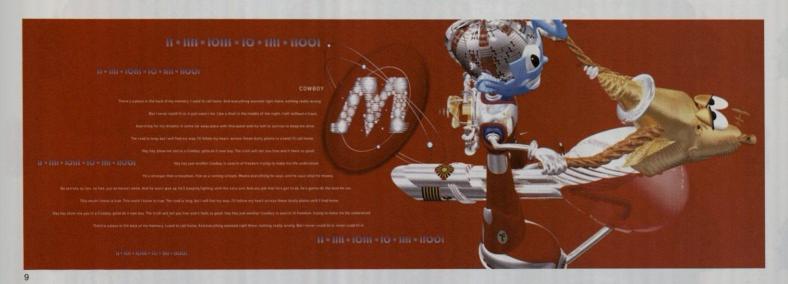














ロンドンは今、文化・芸術のルネッサンスを迎えている。アメリカの有 力誌「ニューズウィーク」に至っては、"世界でいちばんクールな都市" とまで断言している。今のロンドンの雰囲気は、プライドが空ほどに高 く、自己表現が何よりも優先し、猛烈な技術革新が前途をますます洋々 たるものにしていた'60年代のようだ、と識者達は言う。その発露は多 岐にわたっている。イギリスのポップ・ミュージックが再びヒットチャ **ートの上位を占め、かつてない多様性を誇っている。代表的なブリッ** ト・ポップのみならず、ウィットと知性でやすやすと異なる音楽ジャン ルをミックスしたポスト・テクノのダンスフロア・シーンでも活躍が目 つ。ファッション界もブームを呼んでいる。今年のロンドン・ファッシ ョン・ウィークは、パリ・ミラノと並んで最も注目度が高かった。アレ クサンダー・マックイーン, コッパーウィート・ブランデル, フセイ ン・チャラヤンら先鋭的な若手デザイナーがニュー・ウェーブとして台 頭している。映画,美術,建築,プロダクト・デザインも紀元2000年 を目前にした狂乱的ムードの中で再燃しいる。そして、最後に忘れては ならないのが,時代精神を敏感に吸収し包み込むグラフィックデザイン のかつてない躍動と挑戦である。(p47に続く)



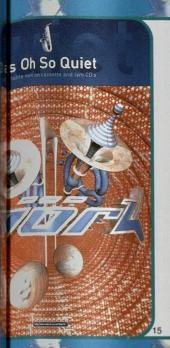
10

- 4-7. Posters for Noriyuki Makihara's "Love Songs of the Digital Cow Boy," WEA Japan, 1996
- 4. "Digital Cow Boy"
- 5. "Data Baby"
- 6. "Dog of Dog World"
- 7. "Digital Girl"
- 8-10. Design for Makihara's single "Love Songs from the Digital Cow Boy," WEA Japan, 1996
- 11. Still from the "Digital Cow Boy" video for Makihara, WEA Japan, 1996









London is currently enjoying a cultural rennaisance; the influencial US magazine Newsweek recently went so far as to declare it "the coolest city on the planet." Pundits are likening the atmosphere to the 60s, when confidence was sky high, personal expression was at the top of the agenda and aspirations were fuelled by the white heat of technology.

There are many more paralells: British pop music is back in the fast lane, more expansive and diverse than ever, not only in the obvious manifestation of Brit pop, but also an exciting post-techno dancefloor scene, which mixes and matches musical genres with effortless wit and intelligence. The fashion industry is also booming. This year London Fashion Week finally became a crucial date on the catwalk calendar, up there with Paris and Milan. A thrusting new breed of young designer, as epitomized by Alexander McQueen, Copperwheat Blundell and Hussein Chalayan are making waves.

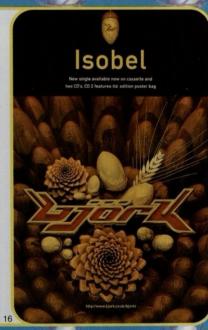
Cinema, fine art, architecture and product design are also resurgent, indulsing in a pre-Millennial frenzy of activity. And last, but certainly not least, graphic design, a discipline which absorbs and encapsulates the zeitgeist, is more vibrant and challenging than ever.

The London graphic design scene can't be defined by a particular look. Examine the work of some of the more influencial studios and you'll discover the only similarity is how different they are from each other. There is, however, a shared attitude, a certain determination to follow a personal agenda and explore a personal aesthetic. These are trailblanzers also tend to be relatively small and informal — bustling workshops rather than the massive consultancies favored in the 1980s. "London's graphic design studios have grown in a very divergent manner," confirms Paul White, founder of Me Company, one of the most progressive design companies. "We may overlap slightly, but we remain essentially separate. The things we have in common is that we are producing personal work for public corporations." One thing's for sure, Me Company certianly does its own thing. "We work against the flow of fashion and cultural normality," says White. "We embrace technology and ideas rather than fashion." Over the past few years,

White has developed a distinctive futuristic style which has involved building dense 3D landscapes; shiny, molten environments into which music industry, and it is probably best known for its collaborations with the Icelandic singer Björk. In fact, White and his six designers currently work with numerous bands — from the well known to the downlight obscure. Their work for one of the world's leading DJs Carl Cox and his techno label World Wide Ultimatum has been particularly well received.

Commissions are starting to come in from less expected sources too. Me Company has been asked to design several London bars and clubs, including the bristling Riki Tik in the heart of Soho. There has been a spate of advertising commissions too, notably a press and poster campaign for Nike through the Amsterdam-based agency Weiden and Kennedy, which saw Dutch football players transformed into rampant 3D cyber heros. Raw and muscular, these characters appeared almost to jump from the constraints of their billboards, so great was the sense of movement achieved within the design.

The concept of movement is central to Me Company's design aesthetic. There is a strong relationship between the studio's print-based output and its film and video work. "Imagine a virtual film that hasn't been made," says White. "Many of the images we create are like snapshots from a virtual film." This is because most of his designs are rooted in a well defined narrative. The images represent a single moment in time — events will have taken place leading up to this particular point, and others will occur afterwards — it's as if some bizarre 3D film footage has been freeze-framed. "The images suggest the future and the past," explains White. "You can extrapolate forward and backward. The clues and ideas are there in the work. But you can also get an instant hit from it." With record sleeves (such as Björk's Hyperballad, for instance) the narrative content will often be based on the song





Biörk Possibly Maybe

Available on 3CD's. Possibly Out Now



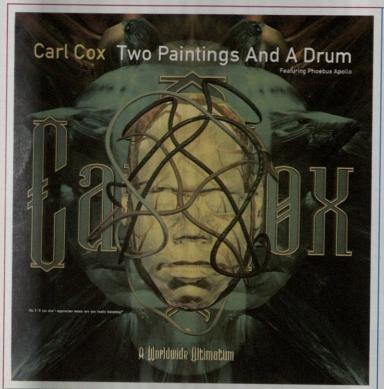
lyrics. Other designs will involve composing a fable or allegorical tale from scratch. For Japanese pop star Noriyuki Makihara's album Love Songs of the Digital Cowboy, Me Company came up with a complex space-age scenario. A virtual world of 3D images and characters was constructed, comprising two planetoids (DataWorld and DogWorld) and their various inhabitants.

From this starting point, street posters and ads were created as well as a 15-second commercial and a four-minute video for Makihara's latest single Cowboy. The Cowboy video is a real breakthrough in the often sterile genre of computer animation, managing to be simultaneously funny, funky and probing. The underlaying narrative becomes the glue which holds the disparate elements and media together, contextualizing them and giving them a depth and meaning beyond the merely decorative.

The DataWorld project hints at another of Me Company's continuing obsessions — their predictions for and visions of a future culture. "You have to look forward, otherwise you stagnate," says White. The Brave Me World is neither utopian or dystopian, but dark and dangerous underneath. Says White: "It's all skin and surface, dig a bit deeper and things get nasty." The studio recently created yet another mythcal world a future city based on 12th-century mathematical theories, which will feature on a forthcoming calendar for Mercedes — other contributors to the calendar include Rei Kawakubo, David Carson, and Porsche Design.

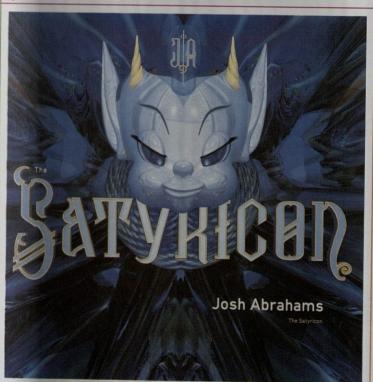
white insists that Me Company's work isn't about technology, even though the unapologetic computer-generated style might suggest that it is. "It's about conveying moods, emotions, character and narrative," he says. "These are all very human characteristics." And though he may spend a great deal of his time theorizing about the future, he agrees that now is an exciting, invigorating time to be working as a graphic designer in London. After all, it is the coolest place on the planet.







18



A Windows in the hard transcript in facility in the facility in the hard in th

20

- 14. "Hyperballad," limited edition CD poster insert for Björk
- 15-17. Posters for Björk, "It's Oh So Quiet" (15), "Isobel" (16) and "Possibly Maybe" (17)
- 18,19. "2 Paintings and a Drum," 12" single design for Carl Cox, front (18) and back (19)
- 20,21. "Satyricon," 12" single design for Josh Abrahams, fornt (20) and back (21)

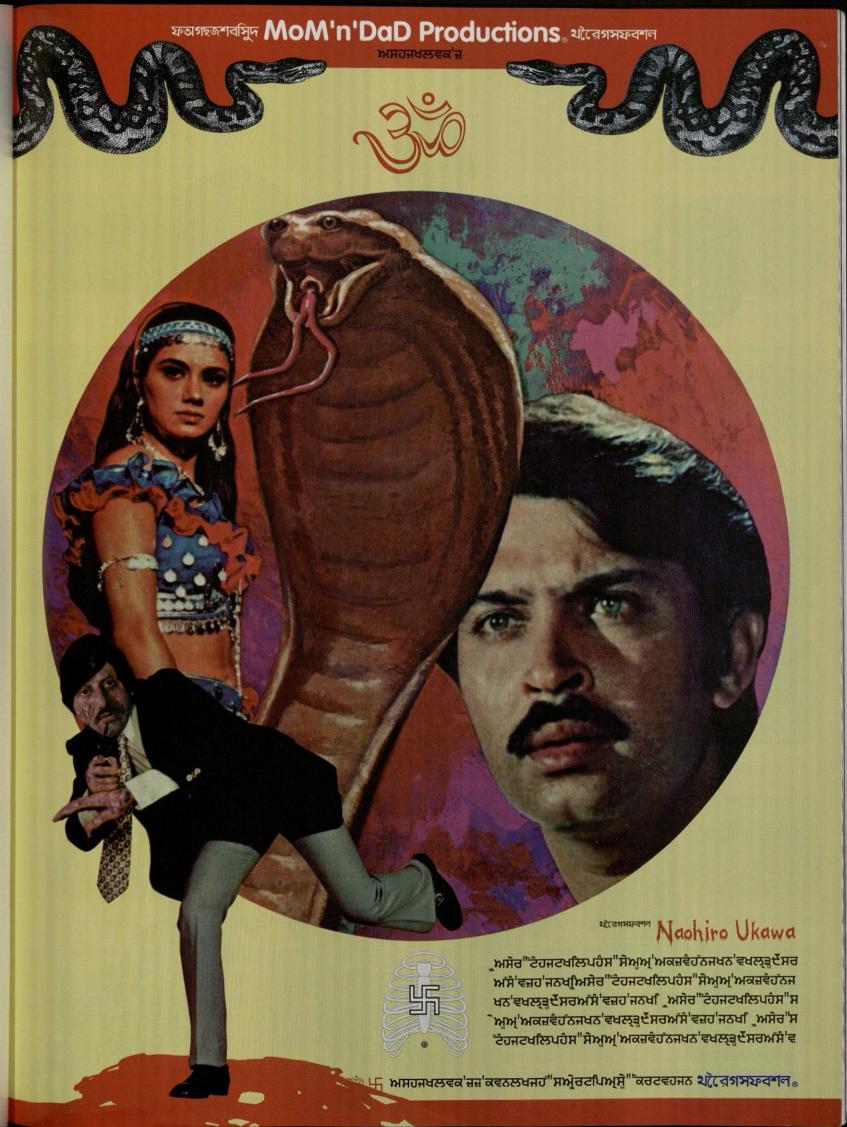
profile

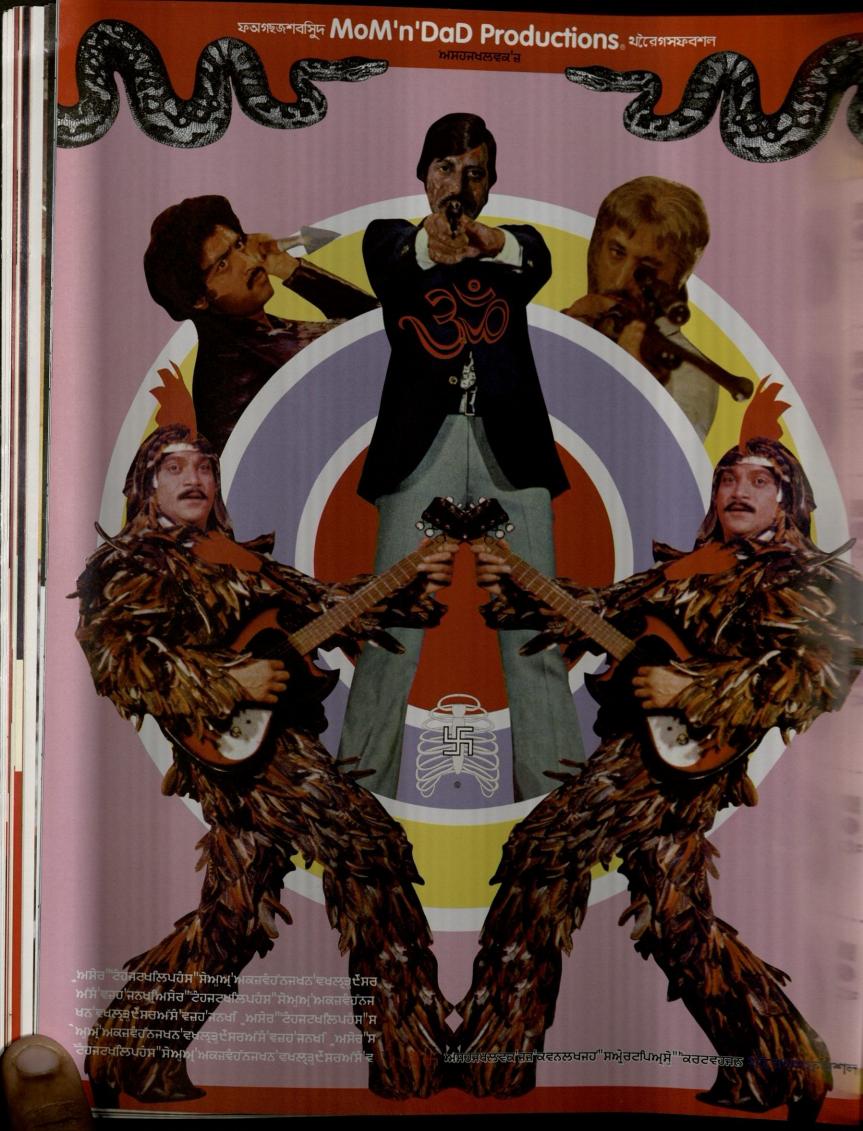
A London-based design company founded in 1985 by Paul White, now with a team of five people. The name "Me Company" expresses their attitude that they are doing what they want in the way they want based on their anti-corporate or anti-identity thoughts. Most of the company's clients are from the music industry, such as Mute Records and Eternal Records, but their work is not limited to the music field. Their work has been exhibited in exhibition such as "Graphic Design in Great Britain" at La Maison du Livre, Villeurbanne, 1994. Also Me company is one of the most important participants in the "Work from London" exhibition.

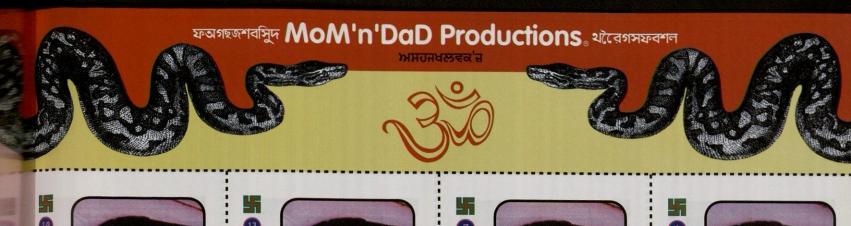
1985年、ボール・ホワイトによって設立されたロンドン・ペースのデザイン会社、現在ボールを含め、 8人で活動している。Me Companyというネーミングはアンチ・コーポレート、アンチ・アイデンティ ティという彼らの考え方を基本は、彼らが提む手法で、彼らがやりたいことをしていくという姿勢を表 わしている。彼らのクライアントのほとんとはミュート、エターナルといったレゴード会社、すなわち 音楽産業であるが、最近ではテキスト(もあるように、多様な広がりを見せている。彼らは、ヴィヨバ ンヌ図書館で開催された『イギリスのクラフ・ックデザイン』展(194年)をはじめ、多くの展覧会に 参加しており、今回の「Work from London」でも、新聞の表現では、また。これを



















































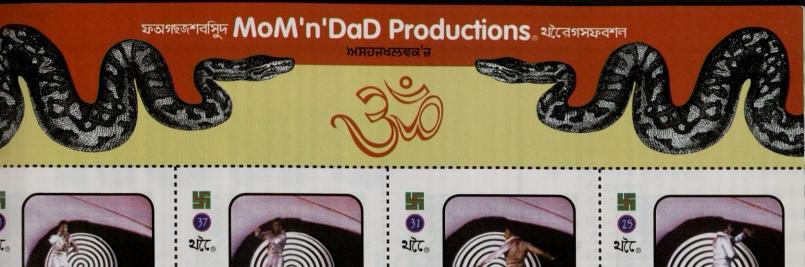
































































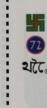






































































News Information

Page

News and Information (Overseas) 海外ニュース

58 News and Information (Domestic) 国内ニュース

61 Book Reviews ブックレビュー

62 Exhibitions 展覧会案内

ニュース、インフォメーション、展覧会などの掲載を希望される方は右の番号までFAX、または〒164 東京都中野区弥生町1-13-7 株式会社 誠文堂新光社アイデア編集部N&I係まで郵送してください。掲載料は無料です(ただし、掲載に関しましてはお送りいただいた情報を編集部がセレクトいたしますので、非掲載の場合はご容赦ください)。

If you have exhibition or other news and information you would like listed (free of charge), please fax your press releases to our editorial office at Seibundo Shinkosha Publishing Company.

IDEA FAX

03-3373-7313 (+81-3-3373-7313)

The 5th International Poster Triennial in Toyama Now Inviting Entries

NAME:

The 5th International Poster Triennial Toyama 1997 (IPT'97)

PURPOSE:

This exhibition of poster chosen from throughout the world is intended to provide a review of the current state of international poster design.

ORGANIZER:

The Museum of Modern Art, Toyama SUPPORTED BY:

Japan Graphic Designers Association Inc. (JAGDA)

ORGANIZING COMMITTEE:

Yusaku Kamekura(Chairman), Shigeo Fukuda, Kazumasa Nagai, Masataka Ogawa, Ikko Tanaka

DATE:

Early July-early September, 1997

The Museum of Modern Art, Toyama IPT'97 ENTRY QUALIFICATIONS:

All entries must be the work of the entrant, printed in poster form after 1994. Entries should be no smaller than 36.4cm×51.5cm (14.3inch×20.3inch) and no larger than 180cm ×120cm (70.9inch×47.3inch), and must fall into either of the following two categories,

- (A) Poster with cultural, social and public themes
- (B) Commercial posters for business

NUMBER OF ENTRIES:

Not more than three per artist or group.

Each participant may submit a maximum total of 3 posters or series of poster that constitute a single work.

REGISTRATION FEES:

none

ENTRY DEADLINE:

All entries must be received at the following address by March 20,

The Organizing Committee, IPT'97
The Museum of Modern Art, Toyama
Nishinaka-machi 1-16-12
Toyama-shi, Japan 939
Tel +81 764 (21) 7111

SCREENING:

The Qualifying Committee will select all posters for the exhibition.

Prizes will be awarded by the international Jury.

Qualifying Committee

Fax +81 764 (22) 5996

Shigeo Fukuda, Yusaku Kamekura, Mitsuo Katsui, Shin Matsunaga, Kazumasa Nagai, Masataka Ogawa, Makoto Saito, Koich Sato

International July

Stasys Eidrigevicius (Poland) Yusaku Kamekura (Japan) Bruno Monguzzi (Switzerland) Masataka Ogawa (Japan) Gunter Rambow (Germany)

PRIZE

The following prizes will be awarded to winners:

Gold Prize:¥1,000,000each (one per category) Silver Prize:¥500,000each

(two prize from both categories)
Bronze Prize:.....¥100,000each
(ten prizes from both categories)

◎第5回世界ポスタートリエンナーレトヤマ1997 (IPT'97) 作品募集

富山県立近代美術館が主催し、 JAGDAが後援する第5回世界ポスタートリエンナーレ・トヤマ1997 (IPT '97) の作品を募集している。

【主旨】富山近代美術館では世界の ポスターデザイン作品を国際的に公 募・選抜して展示公開する。

【実行委員会】亀倉雄策(委員長) 田中一光/永井一正/福田繁雄/ 小川正隆

【会期】1997年7月上旬~9月上旬 【会場】富山県立近代美術館1階企画 展示室

【応募資格】問わない

【募集作品】作品は応募者本人が作成したもので、1994年以降に印刷発行されたポスターを原則とする。サイズは36.4cm×51.5cm~180cm×120cmの範囲とする。なお、次の2種部門が設定されている。

(A) 部門:文化・社会・公共をテーマにしたポスター

(B) 部門:企業等の商業ポスター 【出品点数】1人または1グループに つき3件以内とする。なお、シリー ズポスターは3点以内で1件とみな す。但し、シリーズポスターは3点 のうちから2点ないし、1点のみを入 選とする場合がある。

【出品料】無料。

【作品受付締切】応募作品の受付は、 1997年3月20日までとし、同美術館 へ期間内に必着のこと。

【審査】第一次審査及び第二次審査 とする。応募作品は、同美術館が組 織した第一次審査会により審査し、 入選作品を決定する。また、入選作 品のうちから第二次審査会により審 査し、(A) (B) 2種の部門の入賞作品を

○第一次審査員: 亀倉雄策 田中一光/永井一正/福田繁雄 勝井三雄/松永真/戸田正寿 サイトウ・マコト/小川正隆 ○第二次審査員:

ブルーノ・モングッツィ(スイス) ギュンター・ランボー(ドイツ) スタシス・エイドリゲヴィチウス(ポーランド) 亀倉雄策(日本)/小川正隆(日本)

【賞】 金賞(A)(B)それぞれ1点

賞金 1,000,000円

銀賞(A)(B)両部門で2点

賞金 500,000円

銅賞 (A) (B) 両部門で10点

賞金 100,000円

★問い合わせ先・応募先 〒939 富山市西中野町1-16-12 富山県立近代美術館 IPT'97係 TEL:0764(21)7111/FAX:0764(22)5996

◎『第8回CLSヴィジュアル・アート・コンペティション』作品募集 CLS(キャラクターライセンスシステム)では、『第8回CLSヴィ ジュアル・アート・コンペティション』のための作品を募集する。若手の作家にとっての発表の場は限られている。また、商業的な評価になりやすく、的確で素直な批評を受ける機会も少ないため、独自の創作活動に行き詰まりを感じている作家も少なくない。そこで彼らを支援し、またそれによって作家たちとの連携を図ろうというのがこの『CLSヴィジュアル・アート・コンペティション』である。

8回目となる今回も前回に引き続き、秋山孝、サイトウ・マコト、立花ハジメ、日比野克彦、といった第一線で活躍しているアーティストたちが審査にあたる。



第7回CLS賞「相撲愛」 作者:太良 慈朗

【日程】1997年2月3日作品受付開始,97年2月14日締め切り。

4月末日までに応募者全員に結果通知,5月「イラストレーション」誌上にて入賞作発表・作品展開催 【問い合わせ】(株)キャラクターライ

【問い合わせ】(株) キャラクターライ センスシステム・ヴィジュアル・アート・ コンペ係

〒150 東京都渋谷区神南1-9-2 大畠 ビル402

Tel:03-3463-7163/FAX:03-3463-7156

◎第10回コイズミ国際学生照明デザインコンペ 作品募集

照明,家具メーカーの小泉産業は、 国内外の学生を対象とした照明のデザインコンペティション「第10回コイズミ国際学生照明デザインコンペ」の作品募集を行なっている。このコンペは、1987年から毎年開催されているもので、インテリアデザイナーや建築家を志す若い人々に、 照明に対する認識を深めてもらい、 創作活動の場を提供して人材育成を しようというのが主旨。

第10回というひとつの区切りを迎える今回は、過去9回の募集テーマ「あかりの造形」「光の希求」「Lighting Ecology」「NEW LIGHT QUALITY - エコロジーのための新しい光の質」「Lighting Ecology-

自然と人口、住まいのあり様」「Lighting Ecology-進化と人間らしさ」「Lighting Ecology-用のひかり(あかり)Working Light」からひとつを選択の上、応募してもらう。

小泉産業では、デザインをする上で環境への配慮を考えて、5年前から「エコロジー」をテーマに作品を募集したところ、「自然光を活用したり自然の現象を光に変換したりといった、素材やエネルギーの有効利用や再生・循環を踏まえた優秀な作品が集まった」としている。

なお、過去9回の「コイズミ国際学生照明デザインコンペ」の入賞者は、現在、デザイン・建築を中心に活躍中。その中には、照明設計・デザインに活躍の場を見つけた人も少なくないという。「第10回コイズミ国際学生照明デザインコンペ」の概要は次のとおり。

【審査基準】テーマとの適合性,新 しい発想,着限,新しい提案,造形 美など。

【募集対象】現在在籍中の全世界の 学生

【参加申込受付】1996年10月1日から1997年1月31日まで



第9回金賞作品「Flextable」 作者:カーロ・ヴォルフ

【作品受付】1997年2月10日から 1997年2月20日

【応募点数】制限なし

【審査】●第一次(1997年3月) -写真,図面,スケッチにより選出。

●第二次(1997年5月)第一次入選 作を実際に点灯する状態に仕上げ、 その作品で各賞を選考。なお、制作 には補助金を支給する予定、アドバ イスも行なう。

【賞】

- ●金賞(1点)賞状賞金100万円
- ●銀賞(2点)賞状 賞金 30万円
- ●銅賞(5点)賞状 賞金 10万円
- ●第10回特別記念賞 賞状·賞品
- ●佳作(若干数) 賞状・賞品 【審査結果】関連雑誌等で発表予定,

入賞作品展は東京,大阪ほかで開催。 ★問い合わせ先

小泉産業株式会社 広報開発室 芳野大樹 Tel:06-262-1369

◎ I C S トークセッション都市文化 学校『21世紀の娯楽』開催

ICSトークセッション都市文化学校(企画・総合プロデュース 伊東順二)は、1996年10月から1997年2月まで『21世紀の娯楽』と題したトークセッションを開催している。このトークセッションは、「画楽」「伝楽」「装楽」「形楽」「映楽」という5つの切り口から、各分野の第一線で活躍するオピニオンリーダー達とともに語り合うというもの。1回目の「画楽」(10月開催、ゲストは画家の横尾忠則氏)、2回目の「伝楽」(11月開催、ゲストは両家の横尾忠則氏)、2回目の「伝楽」(11月開催、ゲストは陶芸家の大樋年雄氏、日本画家の千住博氏)はいずれも大盛況だった。

今後は3回・「装楽」(12月19日開催, ゲストは東京ファッションデザイナー協議会議長の久保尚子女史,ファッションデザイナーの松島正樹氏), 4回・「形楽」(平成9年1月21日開催,ゲストはストアデザイナーの牛建務氏,東京クリエイティブ理事長の水野誠一氏),5回・「映楽」(平成9年2月27日開催,ゲストは映画監督の石井聰互氏,ライティングデザイナーの海藤春樹氏)が予定されている。

- ●会場 ICSカレッジ・オブ・ア ーツ柿の木坂校舎(B1)30HALL 目黒区柿の木坂1-5-6
- ●定員 各回150名(各回随時受付·先着順)
- ●時間 開場18:30PM 開演19:00PM
- ●入場料 1,500円 (トークセション後にレセプション予定)
- ●申し込み方法 TEL またはFAX でICSカレッジ・オブ・アーッへ TEL:03-5701-2211 FAX:03-5701-2212

◎ e A T'9 7 K A N A Z A W A 開催 およびアワード作品募集

金沢がエレクトロニック・アートコンテンツを制作する人々に提案するフェスティバル「eAT'97 KANAZAWA (イート金沢)」(フォーラム/セミナー/夜塾/アワード/作品展)が「人、色と形」をテーマに1997年2月26日~28日まで開催される。場所は金沢市文化ホール、金沢市民芸術村、金沢湯涌温泉。また、第1回アワードとして「金沢」または「人、色と形」をテーマ(イメージ)としたインターネットのホームページを募集している。

●フォーラム (2/26 15:10~17:00)

講演 マイケル・バックス

- ●ウェルカムパーティー (2/26 17:30~19:00)
- ●eAT ギャラリー

(2/27~3/2 10:00~17:00) 講師の作品,アワード優秀作品等の 展示

- ●セミナー(2/27)
- ●夜塾(2/27 20:00~ 湯涌温泉)
- Digital Movie Theater (2/28 10:30 ~12:00)
- ●eAT'97Award 最終審査会‧受賞 式(2/28 13:00~14:30)
- ●全体討論会(2/28 14:45~15:30)
- ●参加費 (交通費別)

夜塾券(すべての事業の参加費含。 1泊2食の宿泊費含:定員200名) 25,000円

セミナー・一般券(夜塾,ウエルカムパーティを含まない) 5,000円 セミナー・学生券(夜塾,ウェルカムパーティを含まない) 3,000円

●作品募集

作品の条件は、自分で制作したオリジナル作品に限る。また作品中に使用される美術、写真などは、著作権、および音楽著作権について出品前に必ず著作権者の承諾を得て応募すること。 【応募締切】1997年1月6日

【賞】グランプリ 1点/盾、副賞 アイ・オーデータ機器製ハードディスク+メモリ (合計8 +0.128GB)、外部記憶装置(M O ドライブまたは CD-ROMライター) 、ナナオ20インチディスプレー1台 (グランプリ受賞者には、翌年度のeAT'98 KANAZAWAのホームページデザインを依頼・委託費50万円)

- ・審査委員特別賞 5点/盾, 副賞 rイ・オーデータ機器製ハードディスク+メモリ (合計4 +0.064GB) 外部記憶装置 (MOドライブまたは CD-ROMライター), ナナオ17インチディスプレー1台
- *一次審査を通過された方は,本事業へ招待(1名)

【入選発表】一次審査を通過された 方は「eAT'97KANAZAWA」のホー ムページ (http://www.iia.or.jp/ eat/) にて発表

開賞式】1997年2月28日(金) 場所 金沢市 金沢市民芸術村 ☆資料請求/応募/問い合わせ先 〒920-77 石川県金沢市広坂1-1-1 金沢市役所 都市政策部 高度情報 化推進室内 金沢国際デジタルアー ト実行委員会

TEL:0762-20-2031

FAX:0762-64-2535

e-mail:eatinfo@kanazawa.iia.or.jp 詳しくはホームページで

(http://www.iia.or.jp/eat/)

◎第3回「あなたが作る地下鉄マナー・ポスター」の作品募集

営団地下鉄では、第3回「あなたが 作る地下鉄マナー・ポスター」の作 品を募集している。マナー・ポスタ ーについては、昭和49年9月から駅 構内に掲出しているが、さらに快適 な地下鉄を目指し、マナーについて 客とコミュニケーションをこれまで 以上にアップさせるため、今回の作 品募集となった。

募集内容は、客が地下鉄を利用する際、気がついた「ちょっといい話」、「ちょっともない話」、「ハッキリいって迷惑な話」などで、マナーに関することを写真、イラスト、漫画、絵などで表現した作品。誰でも応募できる。選考は特別審査委員として漫画家の黒鉄ヒロシ氏を迎え、マナーアップ実行委員会にて厳正な審査のうえ決定される。

【応募規定】

(1) B 4 もしくはA 3 サイズ (縦使用) の用紙, および写真の場合はキ



第2回「あなたが作る地下鉄ポスタ 最優秀受賞作品

ヤビネ判以上。

(2) 画材は自由だが、イラスト、漫画、絵などで応募の方は、絵具、クレヨン、サインペンなどの色がはっきりしたもので描くこと。

(3)作品の中には、メッセージ、文字、コピーを入れない。

【応募方法】作品に郵便番号,住所, 氏名,年齢,職業,電話番号,デザインテーマ(作品の説明)を明記した別紙を添付して応募先へ。

【応募先】〒104 東京都中央区築地 1-11 (株)電通CC局内

「あなたが作る地下鉄マナー・ポス ター」係

【応募期間】平成8年12月1日(日)~ 平成9年2月17日(月) 当日消印有効 【賞】最優秀賞 1点(賞品・10万円 相当の旅行券)

優秀賞 7点(賞品・5万円相当の 旅行券)

黒鉄ヒロシ賞 2点(賞品・5万円 相当の旅行券) なお、入賞作品10点は平成9年6月から平成10年3月まで、毎月1点ずつ、マナー・ポスターとして営団地下鉄駅構内に掲出される。

【発表】メトロニュース平成9年4 月号 (No.243) 誌上(入賞者には事 務局から連絡)

★問い合わせ先

「あなたが作る地下鉄マナー・ポス ター」 P R 事務局

TEL:03-3401-3303

◎ 『写真〔人間の街〕プロジェクト '97』作品募集

ガーディアン・ガーデンでは、来年5月に開催する写真展『写真[人間の街]プロジェクト'97』の出品作品を募集している。1993年にスタートしたこの写真展も今回で5回目を迎えるが、これまで同様、百々俊二、橋口譲二、柳本尚規の三氏とガーディアン・ガーデンのプロデュースにより開催される。この写真展は完成された作家ではなく、あくまでも"途中"の作家たちの発掘、応援を目指すもので、彼らが時代や社会の流れにとらわれることなく、自己確認できる「場」を提供しようとするものだ。

【応募締切】1997年1月16日~22日 【出品者】6名(それぞれ2週間ず つの個展を開催予定)

【会期/会場】1997年5月26日~7 月3日 12:00~7:00P.M. 入場無 料 ガーディアン・ガーデン

〒104 東京都中央区銀座 8-8-18 ギンザ・ガーディアン・ガーデンビ ル1 F・2 F

【応募資格】性別・国籍は問わない 【出品料】無料。

【提出内容】

- (1) 応募用紙 ガーディアン・ガーデンより取りよせて必要事項を記入。
- (2) 作品写真 (1テーマにつき20~30枚程度)

・モノクロ作品については六ツ切 $(8 \times 10 \times 10^{-1})$ から大四ツ切 $(11 \times 14 \times 10^{-1})$ まで、カラー作品はポジでも可。但し、カラー作品の場合には、キャビネサイズから六ツ切 $(8 \times 10 \times 10^{-1})$ までのブリントをつける。写真の裏には見せる順番 (展示順)

写真の裏には見せる順番(展示順) を必ず記入する。

・作品写真はファイルなどに入れ ず,封筒や箱に入れて提出する。

【提出期間】1997年1月16日~22日 12:00~7:00P.M. 日曜日除く

【提出方法】上記(1)(2)を直接ガーディアン・ガーデンへ提出。但し、遠方などの理由により、直接持参が不可能な場合には、郵送でも受け付ける。郵送の場合には、必ず事前に電話連絡の上、提出日必着で送ること。

☆問い合わせ先

ガーディアン・ガーデン TEL:03-5568-8818 FAX:03-5568-0512

◎第9回『3.3 ㎡展』作品募集

ガーディアン・ガーデンでは、来春 3月から5月にかけて開催する第9 回『3.3m展』の出展作品を募集する。 『3.3m 展』はガーディアン・ガーデ ンでの個展開催を最終目的にした公 募展で, グラフィックアートと写真 の2部門で作品を募集。3.3 ㎡(ひ とつほ)の範囲内で構成可能な作品 を募集し、一次(ポートフォリオ) 審査により選出された10数名で 『3.3m 展』を開催する。展覧会会期 中には,一般見学者の目の前で出品 者と審査員が直接対話をする公開二 次審査会を開催し, グランプリを選 出、グランプリ獲得者には約1年間 の制作期間を経た後に、個展開催が 約束されている。

【応募締切】グラフィックアート展 1997年1月14日(火)19:00まで

写真展1997年2月24日(月)19:00 まで 【会期】

第一次審査で選出された10数名によ る作品展

第9回グラフィックアート 『3.3㎡ 展』 - 1997年3月10日(月)~3月 27日(木) [予定]

第9回写真『3.3㎡展』-1997年5月6日(火)~5月22日(木)予定【募集作品】

第9回グラフィックアート 『3.3㎡ 展』 - グラフィックデザイン, オブジェ, イラストレーションなどテーマ・手法は自由

第9回写真『3.3㎡展』ードキュメンタリー,フォトアート,報道写真などテーマ・手法は自由

【サイズ・重量規定】

平面作品/縦1.82m×横1.82m以内 の壁面, 重さ20kgまで

立体作品/高さ1.82m×幅1.82m× 奥行0.9 m以内の空間, 重さ50kgま で, 但し, 縦2.4m×横0.75mの搬入 可能な状態であること。

【応募資格】プロ・アマ問わず。年 齢35歳以下。国籍,性別不問。個人 制作であること。

【出品料】無料。

【応募方法】写真やカラーコピー、アイデアスケッチなどビジュアル中心で、ボートフォリオ(B4サイズのクリアブック)1冊以内に次の3つの内容をまとめ、応募用紙のコピー2部を添えて、ガーディアン・ガーデンに直接提出。

内容 1 『3.3m 展』への出品作品 内容 2 これまでの活動,代表作品 等(写真部門については,1テーマ につき複数枚〔10点程度〕以上の作 品を提出)

内容3 1年後のガーディアン・ガ ーデンでの具体的な個展プラン ☆問い合わせ先

ガーディアン・ガーデン

〒104 東京都中央区銀座 8-8-18 ギンザ・ガーディアン・ガーデンビ ルB1

TEL:03-5568-8818 FAX:03-5568-0512

○ローランド、サイン・メーカー「CAMMー 1 P RO」シリーズに新モデル「PNCー 1410」を新発売

ローランドディー,ジー,株式会社は、 サイン・メーカー「CAMM-1P RO」シリーズに加え、新モデル「P NC-1410」を新発売した。プロフェ ッショナル向けサイン・メーカー 「CAMM-1PRO」シリーズ「P NC-1860」、「PNC-1210」に加え た新モデル「PNC-1410」は中間サ イズである1メートル幅のロールシ ート(最大幅1,067mm)がそのまま使 用可能なミッドレンジ・モデル。 今回のPNC-1410の発表・発売に よって,ローランドディージーのサ インメーカーは計7モデル(メディ ア・ムーブ方式5モデル,フラッ ト・ベット方式2モデル)となり、小 型から大型まで国内海外のサイン業 界における標準シートにすべて対応 したと同時に,これらの豊富なライ ンナップからユーザー要望・目的・ 予算に合わせたより最適なモデルの 提供を実現した。

- ●新モデル「PNC-1410」の主な特長 (1) 1メートル幅のロールシートが そのまま使用可能
- (2)プロの業務に応えるハイ・スペック (3) クラス最高レベルのコスト・パ フォーマンスを実現
- (4)高い機能性と安全性
- (5) 多種多様なコンピュータ, ソフトウエアに対応

☆問い合わせ

〒431-21 静岡県浜松市新都田1-6-4 ローランドディージー株式会社

TEL:053-484-1206 FAX:053-484-1218

◎アドビシステムズ社、Adobe Photoshop の最新バージョン4.0Jを発売

アドビシステムズ社(米国カリフォルニア州サンノゼ)は、フォトデザインおよび印刷、マルチメディア、インターネット用グラフィックスの作成ツールとして世界標準となっているAdobe Photoshop の最新バージョン4.0Jを新たに発売する。

今回発表したWindows版とMacintosh

版のAdobe Photoshop4.0Jでは、生産性と操作性をこれまで以上に向上させ、アドビの各グラフィックスアプリケーションとの総合性を強化し、インターネットのWebページ用のイメージをさらに簡単に作成することを可能にした。

ユーザーの生産性の向上という点では、Adobe Photoshop4.0Jアクションパレットによって、自動編集や一括処理が可能になり、飛躍的に生産性を向上させている。アクションパレットの特長的な機能として、デジタルカメラからイメージをバッチ処理で読み込ませることが可能なため、大量の写真をまとめて読み込み、色調を補正し、ファイルへ保存するまでを自動的に実行させることが可能になる。

インターネットのWeb ページ用イメージ作成機能としては、従来の印刷とWeb ページ出版の間のギャップを埋め、両環境に対応した高品質のグラフィックスを作成するための最強の機能を備えている。さらに、Adobe Photoshop4.0J のアクションパレットは、グラフィックアーティストのデザイン作業を合理化するだけでなく、ファイル形式の変換とダウンサンプリングを簡単にバッチ処理することが可能なため、Web ペ

ージ用にイメージを作成するユーザ ーの作業時間も大幅に短縮する。 ☆問い合わせ先

(株)システムソフト

TEL:092-752-5264/FAX:092-752-5268 (株) ソフトウェア・トゥー

TEL:03-5676-2177/FAX:03-5676-2188 (株) メディアヴィジョン

TEL:03-3222-6841/FAX:03-3222-3287 (株) 大塚商会

TEL:03-5280-5615/FAX:03-5280-5075 マイクロウェアハウスジャパン (株)

TEL:0462-28-0812

FAX:0462-28-2212

(大塚商会はWindows 版のみ, マイクロウェアハウスジャパンは Macintosh 版のみの取扱い)。

○ Tooが 「INKJET MATERIALS (インクジェトマテリアル)」新8アイテムをを追加発売

株式会社Tooは現在発売中のインクジェットプリンタ専用の出力素材「INKJET MATERIALS(インクジェトマテリアル)」現8アイテムに新たに8アイテムを追加発売する。同製品は、パソコンの普及と共に急速に拡大しているインクジェットプリンタ市場に応え用途を明確にし、出力目的にこだわった出力素材シリーズである。一昔前に比べると、インクジェットプリンタの性能



INKJET MATERIALS SERIES 2

の向上は著しいものがあり、ブリンタ本体の価格もリーズナブルになってきていることを考えれば、これらの素材集の需要も今後高まってくるであろう。 「INKJET MATERIALS」新シリーズは、手軽に購入できるパッケージ価格(600円~1,200円)が設定されている。 INKJET MATERIALS SERIES 2 NO.9 フォトペーパーG (厚口)

A4・10枚入1,200円 インクジェトプリンタ出力ができる 印画紙風の光沢素材 写真プリントの雰囲気 NO.10 フォトペーパーM

A4・10枚入1,200円 インクジェトプリンタ出力ができる 印画紙風の半光沢素材 写真プリントのセミマット仕上げそ のままの仕上がり NO.11 パステルペーパー5(厚口)

エンボス加工されたインクジェット

A4·10枚入800円

ブリンタ専用カラー素材。 パステル調 5 色が 1 パッケージになっており、両面使用できる。

NO.12 ホワイトカードM (厚口) A4・25枚入600円

カード用途に適した表面がマット調 の厚口高品位インクジェット用紙。 NO.13 パールペーパー

A4・10枚入1,000円表面がパール調の光沢を持った用紙。他では表現できないパール独特の質感があり、作品出力や小物のパッケージ・ラッピング・グリーティングカードなどに最適。

NO.14 和紙 (厚口)

A4・10枚入1,000円 インクジェットプリンタで出力でき る本格的な和紙。

NO.15 ホロラベルクリア

A4・3 枚入1,200円 透明ホログラムフィルムに粘着加工 がされている。張り付けるとステン ドグラスのような効果があるシール が作成可能。

NO.16 ホロラベルシルバー

A4・3 枚入1,200円 シルバーのホログラムフィルムに粘 着加工されていて、細かなドットが 七色に輝くような効果のあるシール を作成可能。

★問い合わせ:(株)Too

Addresses of Contributors/掲載者一覧

Work from London (P.10) Michael Horsham 25 Graham Road, London W4 5DR U.K.

Roger Pfund (P.33)
Atlier Roger Pfund
Commucation visuelle sa agi sgv
43 rue Vautier,
CH 1227 Carouge Genève,
Switzerland

Me Company (P.42) 14 Apollo Studios Charlton Kings Road, London NW5 25A, U.K.

Tomato (P.65) 26/27 D'Arblay St., London W1V 3FH, U.K.

Shinya Nakajima (P.75) Tohoku Shinsha Corporation 4-17-7 Akasaka, Minatoku, Tokyo 107, Japan Keiji Ito (P.75) LOP LOP DESIGN #106 Calm House Higashiyama, 2-10-13 Higashiyama, Meguroku, Tokyo 153, Japan

Kyoji Takahashi (P.80) c/o Tsuda Office #302 Doel Taiyo Fukazawa, 4-8-14 Setagayaku, Tokyo 158, Japan

Koichi Hara (P.80) Trout Inc. Ogura Bldg, 6F 8-18-11 Ginza, Chuoku, Tokyo 104, Japan

Shinro Ohtake (P.91) 3-6 Nishikicho, Uwajimashi, Ehime Pref, 798, Japan

The Czech avant-garde and Czech book design (P.96) Trans Art Inc. Ginza Graphic Gallery 7-7-2 Ginza, Chuoku, Tokyo 104, Japan 中島信也 (P.75) (株) 東北新社 〒107 東京都港区赤坂4-17-7 Tel 03-3582-0216

伊藤桂司 (P.75) ロプロプデザイン 〒153 東京都目黒区東山2-10-13 カームハウス東山106 Tel 03-3760-9691

高橋恭司 (P.80) 津田事務所 〒158 東京都世田谷区深沢4-8-14 ドゥエルタイヨー302 Tel 03-3701-4224

原 耕一 (P.80) (株) トラウト 〒104 東京都中央区銀座8-18-11 OGURAビル 6F Tel 03-3543-0165 大竹伸朗 (P.91) 〒798 愛媛県宇和島市錦町3-6 Tel 0895-23-2868

チェコ・アバンギャルド・ブックデザイン (P.96) (株) トランスアート ギンザ・グラフィック・ギャラリー 〒104 東京都中央区銀座7-7-2 DNP銀座ビル Tel 03-5568-8024

マイク・ミルズ (P.108) HKプロダクションズ 〒150 東京都渋谷区鴬谷町7-1



■TCC広告年鑑 1996

定価19.800円、AD:青木克憲

編 東京コピーライターズクラブ A4上製判, ケース入り, CD-ROM付, 416ページ, オールカラー, 誠文堂新光社刊

今回のTCC広告年鑑にはTCC最高賞, TCC審査委員長 賞,各部門TCC賞および、そのノミネート作品,そして TCC最高新人賞, TCC新人賞約120点を収録したCD-ROMがつけられた。特に, TVCFは音声, 動画, ラジオ CMは音声が収録されており、放映時の状態で再現でき る。これは、今年のTCC最高賞であるサントリーの 「BOSS」, JR東日本「東北大陸」, フジテレビジョンの企 業広告といった3点がすべてTVCFであったこともあるが、 この数年応募・掲載作品にTVCFの大幅な増加には瞠 目すべきものある。グラフィックのような目から入ってくる 言葉と違い、抽象具象の映像を伴って耳から入ってくる TVCFという表現の中でコピーがどのように受け手に作用 するか。広告というメディアの中で言葉はどのように変化 していくか。「時代を映す鑑としての広告」を伝えるとい うコンセプトで、従来印刷物としての役割を果たしてきた 本書の、これは一つの実験でもある。



■ THE NOW ART BOOK

監修 ヴァルデマー・ヤヌシャック B5変型判, 196ページ

光琳社出版刊

定価2,950円、デザイン: 仲條正義

本書は、イラストレーション、写真、デザインなどのサブカルチャ ーや現代アートのカリスマ、ヒーローともいうべきアーティストたち を紹介し続けている資生堂のザ・ギンザアートスペースが発行 している『ル・ミレニュム』の企画・編集による。彼、彼女らの奇 形ともいうような、残酷なノンフィクションを思わせる作品群は、特 有のグロテスクな表現を伴っている。若い世代からの絶大な支 持と共感が得られるのは、彼らの言葉にしがたい精神の奥深 〈の自由、束縛、愛や暴力などの、表現したいことや伝えたいこ との代弁者となり、かつ新たな疑問を投げかけてくれるからでは ないだろうか。時代の作るその表現や感情に新たな驚きを加 えてくれる一冊となっている。ザ・ギンザ・アートスペースは今や 現代のカリスマ・ヒーローとなった現代アーティストを多く紹介して いるが、本書では、ヴァルデマー・ヤヌシャック監修のもと、まさ に 現代の鏡像というべき50人のアーティストの作品を収 録している。ちなみに、登場するアーティストの半数が女性で ある。



■イントロデューシング ジョットワールド

著作者: J. オット・シーボルド 編者 インターリンク・プランニング B5上製判, 56ページ

定価2,400円、デザイン: J. オット・シーボルド/イン ターリンク・プランニング

Mr.ランチという犬のキャラクターが登場する絵本のシリー ズで人気のアメリカ人イラストレーターである著者の絵本的 作品集。もちろん、日本では彼の初めての著作である。ウ ゴウゴ・ルーガでオンエアされたアニメ「モンキー・ビジネ ス」をはじめ、カルトなファンの多いクリエイターで、日本の 広告においても数々の露出がある。

なんといっても彼の作品の特徴は、その表情豊かなキャラ クターたち。 千変万化の表情を持っていて、 見る方はそ れだけでワクワクさせられる。本書はそうしたキャラクター たちを満載するとともに、彼が日頃の仕事ではできなかっ た, コラージュ作品を織りまぜているのが特徴だろう。可愛 さ,怖さ,ささくれだった風景 ・・・・。コラージュからは, 我々の同時代を特徴づけるイコンへの著者ならではのまな ざしが感じとれる。今までには存在しなかったアート・ピク チャー・ブックと言えよう。



■原子心母 ― 芸術における心霊の研究

著者 椹木野衣

B6上製判, 188ページ

河出書房新社刊

定価2,500円、デザイン:鈴木成一

美術をコアに、音楽、映画、文学そしてサブカルチャーに いたるまでを俎上にのせて同時代性を軸に評論を繰り広 げてきた著者の4冊目の書籍。著者の興味は、本書では、 神秘主義の謎解きを果たしてきたはずの科学が、現在の技 術発達の高度化によりブラックボックス化し、むしろ新たな 神秘主義を生むことになったパラドキシカルな様相へと向 けられた。「こともあろうに今度は『プログレ』である」と著者 自身あとがきで語るように、プレグレッシブ・ロックの名のも とに彼らの周囲に生起する音楽をはじめとした諸要素・領 域を1つの曲にブリコラージュしてみせたバンド、ピンク・フ ロイドの名曲「原子心母」と同じタイトルを冠し、批評という 範ちゅうで同時代における新たな「神秘」にまつわる領域の プリコラージュを試みているのが本書なのだ。隠れタイトル は「ヒップ・グノーシス」。中世の錬金術やユング後期の思 素のバックボーンともなったグノーシス主義の神秘思想をコ ンテンポラリーに昇華させたヒップな企てというべきか。



■資料 マーク シンボル ロゴタイプ 1993-94 編集 長谷川純雄, 小林茂二

A4変形判 360ページ

グラフィック社刊 定価4,800円

今号で20年目を迎え、ますます資料性が高まったこのシ リーズの最新刊。95年秋に刊行されたカラー編も6巻目 になる。編集室で作品募集を行なってきたわけだが、こ の20年での掲載作品総数は33,686点にも上ぼるという。 最近では、企業のCI導入ももう当たり前に行なわれるよ うになり、そこから生まれるロゴやマーク、シンボル も、モノクロから企業イメージを反映させるような色を 含むようになり、ともすれば類似したデザインが誕生し がちであったことにある程度の歯止めがかかり、その中 に真にオリジナリティが高く、かつきちんと企業の思想 を反映した優れた作品も多く見受けられること、また造 形もキャラクター的なものが増えるなど、様々な傾向も 膨大な収録作品から読みとることができる。応募作に限 られるとはいえ、著名なデザイナーの作品も多く掲載さ れている。一人のデザイナーがその期間に制作した作品 を一覧でき、その中で意外な作風を発見することができ るのも楽しい。



■ギャラリー・間 叢書 04

ニール・ディナーリ

インタラブテッド・プロジェクションズ

著者:ニール・ディナーリ A4変形判, 88ページ

TOTO 出版刊 定価1,500円

文中に"この本はグラフィック主体の本である。イメー ジとテキストは、「解説的で誘惑的なINTERRUPTED PROJECTION展」の視覚的な経験に密接に関係してい る。"とあるように本書は非常にグラフィカルでポップ に仕上がっている。一つ一つのドローイングには表情が あり、最後まで楽しむことが出来る。もちろんニールの 建築的な主題はリアリティーには無く, むしろサイエン スやテクノロジーだろう、にもかかわらずヒューマニズ ム的なリアリティーを感じさせてしまうのはニールとい う人の奥深さだと思う。『建築』=『難しい』という概 念があったとしても、それを心地良く裏切ってくれる。 モダンもポストモダンも超えた『建築』という快楽がこ ういった方向に向かうとすれば、それは歓迎すべき事実 だろう。

ギンザ・グラフィック・ギャラリー

◎アラン・ル・ケルネ展─

●下谷二助展 1/10-1/31

◎ジョセフ・アルバース展 1/10-1/31

の大橋正展

₩ クリエイションギャラリーG8 中央区銀座8-4-17 リクルートG8ビル1F ☎:03-3575-6918 土・日曜・祝日休

◎ '96年末チャリティー企画アーティスト のオリジナルプレート集 「美味しい絵皿 100VS100」 (ガーディアン・ガーデンと共催)

◎「青空画報」峰岸達展 1/7-1/31

●ザ・チョイス大賞展1997 2/3-2/28

ガーディアン・ガーデン 中央区銀座8-8-18 キンザ・ガーディアン・カーテン : 03-5568-8818 日曜・祝日休 ギンザ・ガーディアン・ガーデンビル

●'96年末チャリティー企画アーティストの オリジナルプレート集 「美味しい絵皿 100VS100| (クリエイションギャラリーと共催)

12/2-12/20 ●昭和38年生まれのイラストレーター14名 による展覧会 「石の上にも10年」展 1/6-2/6

資生堂ギャラリー

中央区銀座8-8-3 資生堂パーラービル9F 古: 03-3571-7720 ●ピエリック・ソラン

「なさけないほど、ドジで、孤独なアーテ ィスト」展 12/5-12/28

パルコギャラリー 渋谷区宇田川町15-1 ☎:03-3477-5873 1/1休

●デイヴィッド・リンチ展 DREAMS 12/20-1/21

渋谷パルコ SQUARE7 渋谷区神宮前4-19-8 アロープラザ原宿112 **23**: 03-5474-7514

THE EXHIBITION OF TINTIN

ギャルリータイセイ 新宿区西新宿1-25-1新宿センタービル17F ☎: 03-5381-5510

●超高層の時代 -シカゴ建築のオプティマム構造の思想-12/30-1/10

ワコール銀座アートスペース

中央区銀座5-1-15 第一御幸ビルB1

☎: 03-3573-3798

●ジョリー・ジョンソン豊かなる変容 ③ 12/16-12/25 日曜·祭日閉廊

●藤本 哲夫-MACHINE DRAWING-1/10-1/18 日曜休廊

麻布美術工芸館

港区六本木4-6-9

a: 03-5474-1371

●スウェーデン現代工芸展 12/19-1/12

●金 恵敬作品展一生命,そして生命一至 高のナレーション

●拓殖大学工学部工業デザイン科 大学院 工学研究科工業デザイン専攻

アートラッシュギャラリー 渋谷区代官山町1-7-B1

☎:03-3770-6786 月曜定休

●「手作り時計展」 -12/25

●Hair&Make Shin個展 「WORKS」~空気感・こころ・そしてい まの自分~ 1/24-1/30

GALLERY · MA

港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル 3 F ☎:03-3402-1010 日祝祭日休

●槇 文彦展「建築という現在-現場からの リポート -1/18

青山ベルコモンズ9F,クレイドルサロン 港区北青山2-14-6

☎: 03-3475-8121

●The Bitter Years/ビター・イヤーズ写真展 12/18-1/8

渋谷BEAMギャラリー

渋谷区宇田川町31-2 渋谷BEAM B1

T: 03-3496-7333

●Digital Express 第3回全日本学生マルチ メディア作品展 一 12/6-12/18

-ZEXEL ART SPACE-

渋谷区渋谷3-6-7(株)ゼクセル本社ビル1F

☎: 03-3400-1551

●Abflug2離陸 -12/27

たばこと塩の博物館

渋谷区神南1-16-8

☎:03-3476-2041 月曜休

●企画展 高度成長期の青春像-1960~ 1975

フジタ ヴァンテ ミュージアム 渋谷区千駄ヶ谷4-6-15 木曜休

☎:03-3796-2486

●「ベンジャミン・リー写真展」~彫刻家 佐藤忠良の世界~

TNプローブ 港区六本木5-14-35

5:03-3505-8800

●ヘルツォーク&ド・ムーロン展:知覚への探求

セゾン美術館

豊島区南池袋1-28-1

☎:03-5992-0155

●カンディンスキー&ミュンター1901-1917 12/14-2/2

松屋デザイン・ギャラリー 中央区銀座3-6-1 松屋北館7F

☎: 03-3561-2572

●デザイナー・イラストレーター腕まくり [HAPPY 羽子板展]

12/27-1/13

●胎内曼陀羅 鈴木守のグラフィックデザイン

東京国立近代美術館

千代田区北の丸公園3

☎:03-3241-2561 <木館>

●プロジェクト・フォーサバイバル(仮称) 12/3-1/12

●北脇昇展

1/25-3/2 <工芸館>

●近代日本の工芸Ⅲ

-1/26 <フィルムセンター>

●映画部門の展示 12/10-2/1

東京都庭園美術館

港区白金台5-21-9

☎:03-3443-0201 第2·4水曜休

●「遥かなる東洋紀行ージョージ・チネリ ーと知られざる19世紀東・マカオ・香港 の美術」展 12/7-2/11

ワタリウム美術館

渋谷区神宮前3-7-6

☎:03-3402-3001 月曜休

●ルドルフ・シュタイナー黒板ドローイン グ展「地球が月になるとき」 -3/30

目黒区美術館

目黑区目黒2-4-36

☎:03-3714-1201 月曜休

●めぐろの子どもたち展 1/18~2/2

ARTBOXギャラリー

港区六本木6-3-8

☎: 03-3746-4141

'96回ART BOX大賞展受賞記念展 出版記念展

●斎藤千明 版画展 12/16-12/21

●安藤茂喜 写真展 12/23-12/28

●美山 深展

1/6-1/11

●竹ノ内光男 版画展 1/13-1/18

●飯田信雄 写真展 1/20-1/25

●別所智広・浅沼信也展

●七戸 停展 2/3-2/8

いわさきちひろ絵本美術館

練馬区下石神井4-7-2

☎:03-3995-0612 月曜休

●「あなたが出会ったちひろの絵」展

サントリー美術館

港区元赤坂1-2-3 東京サントリービル11階

☎:03-3470-1073 月曜休

●開館35周年記念展V サントリー美術館大賞特別展'96

-12-23 ●桃山百双

伊勢丹美術館

新宿区新宿3-14-1 伊勢丹新宿店新館8階

☎: 03-3352-1111

●フランク・ロイド・ライトと日本展 1/4-2/2

●ポール・デルボー展 2/6-3/10

東京都現代美術館

江東区三好4-1-1 (木場公園内)

☎: 03-5245-4111

●「デイヴィッド・ホックニー」版画展 1954-1995

●「シンディ・シャーマン」展

●「日本の美術,世界の美術-この50年の

1/5-2/16 ●「中西夏之展 白く,強い,目前,へ」 1/18-3/16

●「20世紀絵画の新大陸 ニューヨーク・ スクール」 1/25-3/16

Gallery ART SPACE -

1/14-1/26

渋谷区神宮前3-7-5 篠原ビル4F

☎:03-3402-7385 木曜休

● 「Language-Material.1997 | vol.1 福本浩子展











三越美術館

新宿区新宿3-29-1

- ☎: 03-3354-1111
- ●ロバート・メイプルソープ展 12/5-1/19
- ●カール・ラガーフェルド写真展"内緒話" 1/25-2/12 月曜休

■ラフォーレミュージアム原宿

渋谷区神宮前1-11-6 ラフォーレ原宿6F

- ☎: 03-3475-0411
- ●「大アート展」 12/6-12/15

ストライプハウス美術館

港区六本木5-10-33

- **a**: 03-3405-8108
- ●カリグラフィー作品展 12/4-12/21
- ●異色物故作家シリーズVol 11 荘士・矢野文夫全貌展

ザ・ギンザ・アートスペース

中央区銀座7-8-10 ザ・ギンザビルB1F ☎: 03-3571-7741

- ●川原文洋&森川大二のヘアメーイキャップ展 <混在=インターミックス> -12/19
- ●アウトサイダー・アート 「ヘンリー・ダーガーが生んだ少女たちの 大国 1/14-2/16

■Bunkamuraザ・ミュージアム

渋谷区道玄坂2-24-1 Bunkamura B1 ☎:03-3477-9252

- ●世紀末ヨーロッパ 象徴派展 12/14-2/9

キリンアートスペース原宿

渋谷区神宮前6-26-1キリン原宿本社ビル1階 ☎:03-5485-6321

- ●アントニ・タピエス展 -12/25

西武アート・フォーラム

豊島区南池袋1-28-1 西武百貨店池袋店6F

- a: 03-5992-8920
- ●中国工芸逸品展 12/18-12/24
- ●西の会ー油彩展 12/18-12/31
- ●迎春掛軸·酒器展
- ●新春日本画展
- 1/2-1/13 ●新春版画展
- 1/8-1/13
- ●第14回日本伝統漆芸展 1/15-1/27
- ●第13回蓬莢会作陶展 1/29-2/3

新日鉄本社ビル1F イベントエリア

千代田区大手町2-6-3

- ☎ · 03-3275-5018
- ●第5回STEEL ART展「鉄たちの風景~ 水・地・気・光| 12/16-1/31

安田火災東郷青児美術館

新宿区西新宿1-26-1 安田火災海上本社 ビル49時

- ☎: 03-3349-3591
- ●レオポルド・コレクション ウィーン世紀末展-クリムトの夢,シーレの愛-1/18-4/13

INAXギャラリー

中央区京橋3-6-18 INAXアーキプラザ2F

- ☎:03-5250-6530 日曜·祝日休 〈INAXギャラリー1〉
- ●鳥かご・虫かご展

(INAXギャラリー2)

- ●馬場 彬展
 - 12/2-12/25

●日野田 崇展 自然を感じて…Vol. II 1/6-1/29

INAX ガレリア セラミカ

新宿区西新宿1-6 新宿エルタワー20F

- T: 03-3340-1700
- ●嵯峨山 祐子展 -12/15
- ●渡辺 三奈子展 1/6-1/29

川崎市市民ミュージアム

川崎市中原区等々力1番2号

- **3**: 044-754-4500
- ●写真のタイポロジーその発現と展開 -2/11 <写真ギャラリー>
- ●向秀男の広告美学(前期)

3/2 〈グラフィックギャラリー〉

千葉そごう美術館

千葉市中央区新町1000番地

- ☎: 043-245-8285
- ●近代名画に描かれた京洛の四季展 -12/28
- ●アメリカ・カナダ帰朝記念展−竹辻が 花・自然への賞賛

天保山現代館

大阪市港区築港3-1-41

- a: 06-572-0036
- ●5th ART BUSINESS AUDITION EXHIBITION 「大アート展」OSAKA

12/20-2/3

キリンプラザ大阪

大阪市中央区宗右衛門町7-2

- ☎: 06-212-6578
- ●早川 タケジ展

「World of Takeji Hayakawa」 ~ファンタス

マゴリア~

1/10-2/23 -

ナビオ美術館

大阪市北区角田町7-10 ナビオ阪急3階

- ☎: 06-316-1343
- ●セシル・ビートン写真展 -12/26
- ●長興会浪華書展
- 1/5-1/8

ジャン・ジャンセン展

1/11-2/16

サントリーミュージアム [天保山]

大阪市港区海岸通1-5-10

☎: 06-577-0001

●「クリムトとウィーン印象派」展 12/14-2/2

DDDギャラリー

大阪市北区堂島浜2-2-28 堂島アクシスピルIF

- ☎:06-347-8780 ±·日·祝日休
- ●ウッディ・パートル展 -12/26
- ●ジョー・マシカド展 1/16-2/13

INAXギャラリー大阪

大阪市西区新町1-7-1 INAX大阪ショールーム2F

- ☎: 06-359-3518

- モダニズムとフォークロア-12/9-2/22

INAXギャラリー名古屋

- 名古屋市中区錦1-16-20 **3**: 052-201-1716
- ●お守り動物園

12/5-2/16

スペースプリズム・デザイナーズギャラリー 名古屋市東区東桜1-2-26 マツイビル3F

- T: 052-953-1839
- ●X'MAS DESIGNER'S SHOP 1996
- 12/12-12/22
- ●年賀状展1997 1/9-1/14
- ●新春・春画展
- 1/16-1/21

■富山県立近代美術館

- 富山市西中野町1-16-12
- ☎:0764-21-7111
- ●みんなでつくろう'97 12/21-2/2

郡山市立美術館

郡山市立安原町字大谷地130-2

- T: 0249-56-2200
- ●アルフォンス・ミュシャ「生涯と芸術」
- ●煙と霧-若林奪展

1/25-3/2

国際デザインセンター

名古屋市中区栄3-18-1 ナディア・パーク デザインセンタービル

- ☎: 052-26-2100
- ●「グラミックス'96」名古屋展 12/11-12/16
- ●ハッピー・デザイナーズクリスマス 12/20-12/23
- ●ニュートラディション展 1/18-1/26
- ●デザイン・名古屋 デザインフォーラム 2/7-2/8

水戸芸術館現代美術センター

- 茨城県水戸市五軒町1-6-8
- ☎: 029-227-8111
- ●「アートシーン90-96」水戸芸術館が目 撃した現代美術

第1期-1/19 第2期2/1-3/16

(Overseas)

- Van Gogh Museum Paulus Potterstraat 7 1071 CX Amsterdam, The Netherlands
- Tel: +31 20-5705200 Sir Lawrence Alma-Tadema
 - Retrospective Paintings, works on paper, photographs, furniture
 - 29 Nov 1996 2 March 1997

- Royal Academy of Arts Piccadilly, London W1V 0DS, U.K. Tel: +44 71-494 5615
- <Main Galleries> From Mantegna to Picasso
- 9 November 1996 19 January 1997 Braque:The Late Works
 - 23 Jan 6.April1997

- Jerusalem Artists House 12 Shmuel Hanagid St., Jerusalem
- 94892 Israel
- Tel:+97 2-253653
- NATURE-MATERIAL AND IMAGE
- Contemporary Art from Japan -21 Nov 1996 - 14 Jan 1997

Museum of Art Ein Harod

- Ein Harod 18965 Israel
- Tel:+97 65-31670 ONATURE-MATERIAL AND IMAGE

Contemporary Art from Japan 25 Jan 1997 - 21 Feb 1997











'97[アイデア] グラフィックデザイン 卒業制作誌上展と展覧会のお知らせ



「アイデア」卒業制作誌上展は、グラフィックデザイン科を中心とした学生たちの作品発表の場として、毎年好評を得ています。1994年から始めた、東京:銀座のガーディアン・ガーデンでの展覧会では、より立体的な展開となり、創作意欲向上にますます貢献できるようになったのではないかと思います。来年度も、1997年6月10日発売の「アイデア」263号で特集を予定しています。前回は、69校・約2,000点もの応募がありましたが、当編集部では、さらに多くの学生に参加していただき、優秀な作品を掲載していきたいと望んでいます。全国の大学、専門学校からのより多くの参加を期待しています。募集概要等は、原則的に例年通りとなっています。各校該当部科の先生方には趣旨をよくご理解いただき、より多くの学生諸氏の作品をご応募いただけるようお願いします。

応募方法

■学校の代表作です!

学校または学部・学科単位を原則とします。個人で応募する学生は、学校とご担当の先生の承認を必ず得て下さい。その際、先生のお名前、連絡先を明記して下さい。

■応募作品は

35ミリ以上のポジを、なるべくマウントに入れ、紙焼き(キャビネ、サービス判でも可)を添えてご応募下さい。モノクロ作品の場合はキャビネ大の紙焼きをお送り下さい。できるだけグラフィックまたは平面に近い作品のご提供をお願いします。(展覧会では、壁面展示が可能な作品が中心となるので、立体作品の場合、輸送や展示が容易なものに限る場合があります。) 撮影は、作品一点ずつにし、フラッシュ光の写り込みや、他の作品との重なり、アングルによる歪みなどに充分ご注意下さい。

■必ずご記入を!

応募の際には以下の内容を記載したリストをお付け下さい。①学校名・学部科名(英文表記も併せて、略せずに正式名称で)②学校の住所、電話番号③ご担当の先生のお名前(複数の場合は代表者がわかるように)④制作者名(要フリガナ)⑤タイトル⑥サイズ(立体的な厚み、高さ、重量なども)⑦参加人数、作品点数⑧展覧会へ実作品の出品が可能か否か、以上を明記したもの。また、作品のボジ等とリストにタイトルと制作者名を対応させた番号を付けて下さい。

■日科

応募確認:1997年2月3日まで・・・・応募される前に、編集部宛にご連絡下さい。

作品送付:1997年2月末日締め切り・・・・やむを得ず期日に間に合わない時は、事前にご相談下さ

審查……1997年3月中旬頃予定。

誌上展掲載・・・・1997年6月10日発売の「アイデア」 263号で特集予定。

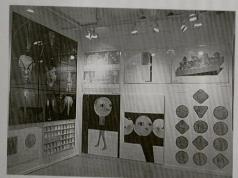
展覧会開催……1997年7月7日~7月31日予定。

■作品選考

作品の選考は青葉益輝氏と編集部が行なう予定です。審査基準は、創造性、将来性、作品の精度などを加味しますが、創作意欲、今後の可能性を重視します。

■その他

応募作品はデザインの盗用等、著作権上の問題などに充分ご注意下さい。また、他のコンペ等への応募はその主催者側の規定に反する場合がありますのでご注意下さい。問題が生じた場合、編集部では責任を負いかねます。応募していただいたポジや資料は原則として返却いたしません。ご担当の先生には、掲載の有無に関わらず「97グラフィックデザイン卒業制作誌上展」特集号を1冊謹呈します。発売前の本誌掲載の有無についてのお問い合わせには応じかねますのでご了承下さい。



※写真は前回の展示風景です。

お問い合わせは一

(株)誠文堂新光社 アイデア編集部 〒164 東京都中野区弥生町1-13-7 TEL 03-3373-7255/FAX 03-3373-7313

展覧会は・

「アイデア」の特集のために選考した卒業制作作品の中から、特に優秀な作品で、展示に適した平面作品を中心に「グラフィックデザイン卒業制作展」を実施します。会場のガーディアン・ガーデンは、若手作家を中心とした意欲的な企画で注目されているギャラリーです。前回は、会期中大勢の来訪者があり、ギャラリーの動員記録数を塗りかえるほどの好評を博しました。

■会場/主催

ガーディアン・ガーデン 東京都中央区銀座8-8-18 ガーディアン・ガーデンビル 日曜、祝祭日は休館、12:00~19:00 Tel 03-5568-8818

■会期

1996年7月7日~7月31日予定。詳細は263号でお知らせします。

■展示作品

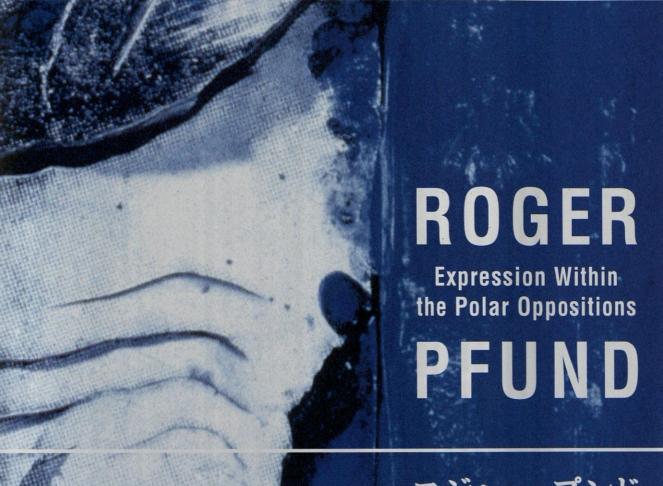
展示作品は、掲載された作品の中から、ギャラリーの担当者と青葉益輝氏、編集部が展示効果を考えて決定する予定です。輸送、搬入、展示、保存上の事由で展示不可能な作品は、本誌への掲載をもって代替することもあります。

■ 出思 依賴

展示候補作品は、後日同ギャラリーから制作者 またはご担当の先生宛に出品をご依頼します。 展示作品のご依頼は4月中旬頃の予定ですので、 応募作品の保管場所と制作者の所在の把握をお 願いします。出品料は無料。会場の構成上、制 作者のプロフィールや顔写真をお願いすること があります。詳細は、決定次第追ってご連絡し ます。

■その他

ガーディアン・ガーデンでは展覧会の告知・広報のため、DMなどを作成します。そのため、展示作品をチラシ、カタログ、紹介記事などに無償使用させていただくことがありますので、あらかじめご了承下さい。



ロジャー・プンド

両極をかける表現者



国際的にも名を知られ、作品も高く評価されているスイスのマルチプル・アーティスト、ロジャー・プンド。彼の多岐にわたる活動は、まさに国境を越え、その表現領域も演劇ポスター、緻密な紙幣のデザイン、そして家具や時計といったプロダクトにまで及ぶ。極端なまでに異なったジャンルの中でも不変な彼のヒューマニズムあふれる創造姿勢は、現在もなお進展するマルチメディア環境における一つの指針となるはずだ。アイデアでは、彼の近作を中心に、その多彩な創造性をトレースしてみた。

La Bâtie Festival de Genève 1a barre

Service Culturel Migros Tél 0033 - 50 72 90 32

La Cie CMP présente Cassandre



La production genevoise est soutenue par

avec le soutien de

marivaux pitoiset 2 au 18 novembre 95

risotto

fago fago beggiato
21 novembre au
au 2 décembre 95

théâtre national dijon bourgogne

violences à vichy II chartreux vincent 15 au 17 décembre 95

> la force de l'habitude bernhard engel 4 au 14 janvier 96

> > oh les beaux jours beckett brook 17 janvier au 1et février 96

gloucester time matériau -shakespeare/richard III shakespeare langhoff 6 au 17 février 96

> quatre heures à chatila genet milianti 5 au 16 mars 96

chambre obscure nabokov kouznetsov 12 au 23 mars 96

l'illusion comique corneille vigner 27 mars au 6 avril 96

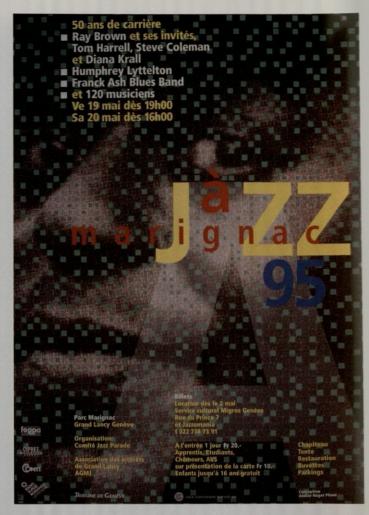
la bataille de stalingrad gabriadze gabriadze souvenirs des jours passés gabriadze gabriadze 23 avril au 4 mai 96

> théâtre en mai festival

14 mai au 26 mai 96

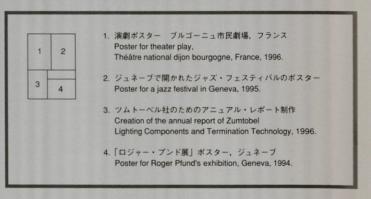
la carte renseignements 80 30 12 12





einen Übergang von Licht zu Stille, won Stille zu Licht - eine Atmosphäre der Inspiration, in der das Verlangen, zu Sein und sich auszudrücken, sich mit dem verquickt, was Möglich ist. Louis I. Kahn







8

Les figures de la liberté

Nouvelles expressions artistiques de l'immédiat après-guerre

du 27 octobre 1995 au 7 janvier 1996

ouvert de 10 à morrendi 12 à 2 montes de 10 à 10 montes de 10 montes d

usee rath

milsée rath





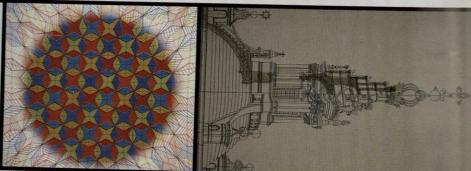




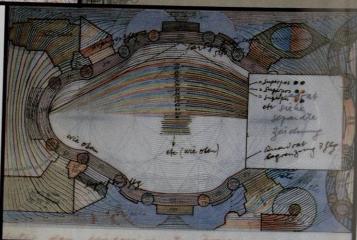
ROGER
Expression Within the Polar Oppositions
PFUND

スイス国立銀行 50スイス・フラン紙幣(裏面のディテール、デザイン案) Swiss National Bank, reserve series SFr 50.-Details of backside, draft designs.









スイス国立銀行 100スイス・フラン紙幣(裏面と表面のディテール、デザイン案) Swiss National Bank, reserve series SFr 100.-Details of backside and frontside, draft designs.





スイス国立銀行 1000スイス・フラン紙幣(裏面のディテール、デザイン案) Swiss National Bank, reserve series SFr 1000.-Details of backside, draft designs.





フランス銀行(新紙幣シリーズ)50フラン紙幣(表面と裏面)500フラン紙幣(表面と裏面) Bank of France new series of banknotes FF 50.-frontside and backside. FF 500.-frontside and backside.





Graphic artist, painter and designer,
Roger Pfund is all of these but above
all a colourist who knows how to
colour our daily life, from the picture
on a billboard to banknotes creation and office
furniture.

Right from the start, he has combined indifferently the professions of graphic artist and painter, since the language used for both style adopts techniques as varied as image fragmentation, collage, montage, retouching, superimposition, modelling, dooding and graffiti; in addition to which one can add playful manipulation of all categories of writing: typeface, letters which have been stamped or stencilled, calligraphy or sketched lettering. Roger Pfund does not just work with print in its primary role as a vehicle for text but also as a means of creative expression to accentuate a pictorial message.

Concurrently, winner of the first prize in the Swiss Banknote Competition, he is awarded a contract for the creation of the reserve series for the Swiss National Bank. Since then he has acquired such knowledge that he is today a specialist in banknotes. Both producer and creator of the new series of French banknotes and a serious contender for the European single currency, the Euro, Roger

Pfund broke new ground in this aera with his proposition, from the beginning, of the thematic series where all the technical data, printing conditions and security requirements are as much elements as the rest, which counterbalances the more liberal style of his posters. By studying, for example, the FF 50 or FF 500 French notes it can be seen that nothing has been left to chance, be it at the level of the technical treatment or the subject themes. The work of the graphic artist is above all to define an architectural structure for the series and then to establish an iconographic record of the portrayed personality. Once the principal theme has been chosen, the next step is the handling of the images, he combines the elements to create models. The composition follows a progression beginning with the largest pieces and then refining the detail until it is ready to be created on the computer.

But his course does not finish here. As a born inquisitor of the world around him, Roger Pfund and his team, which today comprises 17 people from different horizons, are able to pool their resources to achieve various creations such as the museological installations of the International Red Cross and Red Crescent Museum, the construction and interior layout of a children's theater as well as

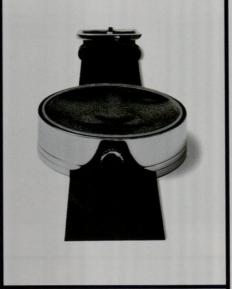
the scenography for it, or more recently a big project for the celebration of the United Nation's 50th Anniversary. Entitled Geneva, Place des Nations, People' Forum for Peace, it presented a tree of life; a monumental sculpture, 30 meters high was implanted as a symbol of Human Rights. From this nerve centre, five major thoroughfares in Geneva were staked out with 50 sail-messages floating on poles retracing a moment in the history of mankind.

True to his role as mediator between institutions and the people, Roger Pfund does not propose final solutions. On the contrary, he is always opening up new fields for investigation and consequently continues to widen the range of his interventions and blending the professions of painter, graphic artist and designer. The proof lies in his founding today of a company specialised in multimedia as well as a brand name, LaurensCarouge, for the creation of design objects of which <Minuit Cinq> (a watch) is the first product.

Roger Pfund works continuously within a series of polar oppositions, he behaves like a true iconoclast and iconolater.

Text : Ines Scolari

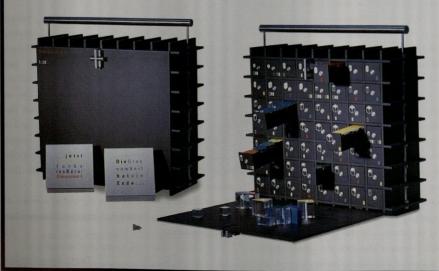




腕時計Minuit Cinqのデザインと製作 (ローランカルージュ社) Design and creation of a watch Minuit Cinq (five minutes after midnight) LaurensCarouge 1995.



D4ボックス (ドイツのDLW社のオフィス家具システム) 家具の様々な形を示すプレシキグラス (アクリル酸樹脂) 模型、 D4 box, office furniture system for DLW Ltd, Germany. Creation of a box with plexiglas models representing all the diffrent shapes of furniture, 1993-1996.



グラフィックアーティスト,画家, デザイナー。ロジャー・プンドはさ まざまな顔を持つ。しかし何より もまず生活を彩る達人であり,そ

の守備範囲はビルボードのデザインから紙幣、 オフィス家具のデザインにまで至る。

プンドは早い時期から、グラフィックアーティストと画家という2つの仕事を両立させてきた。それは、いずれも多様な手法を用いることができるからである。イメージの断片化、コラージュ、モンタージュ、レタッチ、スーパーインボジション(二重焼き付け)、モデリング、落書きの類。さらにあらゆる文字を、活字や写植、スタンプやステンシル、カリグラフィ、レタリングなどに置き換えて遊ぶこともできる。彼にとって印刷は、メッセージを伝える手段であると同時に、イメージを際だたせるクリエイティブな表現手段でもあるのだ。

彼はスイス紙幣コンテストで1位になると同時に、 スイス国立銀行紙幣デザインの契約を獲得する。 以来専門知識を身につけて、今や紙幣のスペシャ リストとなった。フランス新紙幣のプロデューサ - 兼クリエイターを務め、ヨーロッパ統一通貨 ユーロの制作候補者にも名を連ねるほどである。 ポスターに見られる自由なスタイルとは対照的に、 技術的な知識や, 印刷や偽造防止のための要件 が問われるなか、 紙幣の分野で新たな境地を開 いた。フランスの50フランや500フランを見ると、 技術的にもテーマに対しても、徹底して取り組 んでいることがわかる。まずはシリーズ全体の 構成を決め、それから肖像に取りかかる。基本 的なテーマが決まると、次にイメージ部分に移り、 さまざまな要素を組み合わせてカンプを作る。 大きな部分から作り始めて徐々にディテールを 詰め、最終的にコンピュータ上での制作となる。 しかし彼の仕事はこれだけにはとどまらない。 プンドのスタッフは現在17名を数える。彼とそれ ぞれ異なるバックグラウンドを持つスタッフたち は, その力を結集して, 国際赤十字博物館の展 示デザイン、子供の劇場の建築・インテリア・ 舞台デザインなどに取り組んできた。最近では 国連50周年を記念する一大プロジェクト「平和の ためのフォーラム」を手がけている。ジュネー ブの中心部プラス・デ・ナシオンに「生命の木」を イメージした高さ30メートルの彫刻を、人権のシ ンボルとして作った。またここから市内5つの目 抜き通りに沿って、国連発足という人類史に残 る瞬間を見直すための、50本のメッセージ入りバ ナーも立てられた。

プンドは企業や公共団体と人々を結ぶ「媒介者」 に徹し、最終的な解決策は提示しない。そのか わり新しい分野に対して常にオープンで、その 結果、活動領域を拡げ、そこに画家、グラフィ ックアーティスト、デザイナーとしての自分の 専門性を調和させている。その証拠に彼は最近 マルチメディアの会社を設立したり、デザイン グッズのブランド「ローランカルージュ」を作り、 最初の商品として「ミニュイ・サンク」という 腕時計を発売したりしている。

ロジャー・プンドは、両極のあいだを絶え間なく行き来して仕事をしている。偶像破壊論者である一方で、偶像崇拝者でもあるかのようだ。

テキスト: イネス・スコラリ 編集協力: 菊池雅美







国連50周年記念展(人権をテーマにした都市問題展) 「生命の木」と人権に関する「50のメッセージ」 Urban exhibition for UNO 50th anniversary on the theme of Human Rights, Geneva, 1995. "Tree of Life" and "50 massages" for Human rights.

「国際赤十字博物館」のためのシンボルマークと 景観デザインのコンセプトとデザイン (「人道主義運動展」、ジュネーブ) Concept and design, signage and scenery for Red Cross and Red Crescent museum.Temporary exhibition "Humanitarian Endeavour", Geneva, 1995-1996.





ROGER
Expression Within the Polar Oppositions
PFUND

ROGER

Expression Within the Polar Oppositions

Biography

PFUND



画家,グラフィックデザイナーでもあるロジャー・プンドは,1943年スイスの首都,ベルンに生まれる。1971年からジュネーブに住んで仕事をしている。1981年,AGI会員。

◎グラフィックデザイン 1971年 新紙幣シリーズ・コンペで第1 位入賞(スイス国立銀行)

1971-96年 プロのグラフィックデザイナーとして、はじめから文化の領域での活動(音楽、演劇、人道主義運動関係のデザイン・コンセプトとポスター)に専念。
1995年 ローランカルージュ社のためのラベルの制作

◎立体デザイン分野

○「国際赤十字博物館」(ジュネーブ)の シンボルマークと景観デザインのコンセ プトとデザイン

○子供の劇場"Am Stram Gram"のキネティック・タイポグラフィ彫刻,シンボルマーク・システム、エントランスホール、クローク

○「スイス交通博物館」(ルツェルン)の 展示会の新コンセプト

○国連50周年記念展(人権をテーマにした都市問題展,ジュネーブ)

○「テレコム95」(ジュネーブ) のコンセ ブトとデザイン

○腕時計Minuit Cinqの製作

◎紙幣と保証発行紙幣

○準備紙幣シリーズ (スイス国立銀行)○フランス国立銀行の新紙幣のデザイン○欧州通貨デザイン・コンテストのデザイン・プロジェクト (欧州通貨機関)

◎ペインティングの展覧会 (1966-96) ジュネーブ、ベルン、ローザンヌ、バー ゼル、チューリッヒ、パリ、ハイデルベ ルク、ケルン、ベルリン、フランクフル ト、シッツットガルト、ミュンヘン、ニ ューヨーク、ワシントン、東京、アムス テルダム、ロッテルダム

Painter and graphic designer, was born in Bern in 1943. Lives and works in Geneva since

1971. AGI member since 1981.

O Graphic design

1971 1st prize contest new banknotes series, Swiss National Bank.

1971-1996 Since the beginning of his career, Roger Pfund concentrates his activities in cultural fields. Concepts and posters for music, theater and humanitarian actions carry his signature.

1995 Creation of a label LaurensCarouge

for design objects.

O Tridimensional field

Concept and museum design, signage and scenery of the International Red Cross and Red Crescent Museum, Geneva.

Kinetic typographic sculpture, signage system entrance hall, cloakroom of the children theater Am Stram Gram.

New concept for exhibition Swiss Transport Museum, Lucerne.

Urban exhibition for UNO 50th anniversary on the theme of Human Rights, Geneva Telecom 95, concept and design of the stand, Geneva.

Creation of a watch Minuit Cinq (Five

Minutes after midnight).

Banknotes and fiduciary field Assignment to the realization of banknotes reserve series, Swiss National Bank. Design of new banknotes series for French

National Bank.

Design projects for contest of european money, European Monetary Institute.

O Painting exhibitions

Geneva, Bern, Lausanne, Basel, Zurich, Paris, Heidelberg, Köln, Berlin, Francfurt, Stuttgart, Munich, New-York, Washington, Tokyo, Amsterdam, Rotterdam.

ロジャー・プンドの仕事場 Workshop Roger Pfund, 1995.



Vol. 8: KEIJI ITO (R. CAGE INVISIBLE)→SHINYA NAKAJIMA

Special Thanks: Hiroki Horiuchi, Omunibus Japan

The 8th guest creator in this series is Shinya Nakajima internationally well known CF director for his "Hungry?" series for Nissin Co. which have awarded as Grand Prix in Canne.

He is one of the creators who expresses present Asian pop culture through his commercial films.

The images in this article he produced using Ito's elements somehow make us imagine his anbivalent feeling toward graphic art.

"Asian Pop Art" is the theme we selected for the article.

エレメンツ-リ·エレメンツVol.8 伊藤桂司→中島信也

協力:堀内宏城(オムニバス・ジャハン

今回、この連載には、CFディレクターの中島信也氏にご登場願った。 世界的な評価を得ている日清カップヌードルの"Hungry?"シリーズの演出をはじめ、 現在の日本、いや、アジアのポップ・カルチャーの一端を、映像を通じて担っている存在である。 彼の中に潜む、アートへの憧憬とおちょくり、といったアンビバレントな感覚が、 伊藤のエレメンツのリミックスを通じて、

> 日頃のブラウン管とは一線を画したこのような場で、どんな図像を結ぶのか。 「アジアのポップ・アート」――これが今回のテーマである。



Elements by Keiji Ito (R. Cage Invisible)

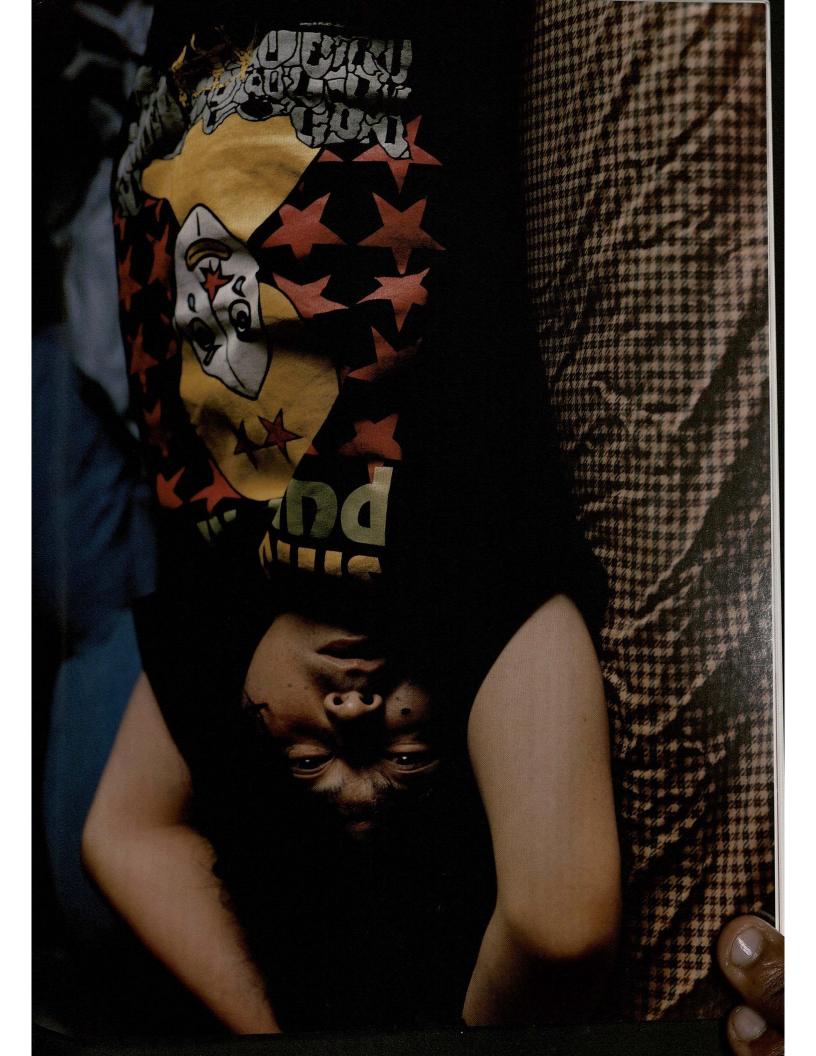








One in a Million







- 今日は、写真という表現の作家論みたいな ことと, 写真家が撮る写真に写る世界というも のは、通常われわれが見ている視覚の世界とは 異質のものがある。そんなことを頭の片隅に置 きながら、いろいろお話ししていただければと 思っています

原 耕一(以下H):例えば、恭司の写真がなぜ よく写るんだろう。このことはみんなが言って いる定説でさ、僕の決めたことじゃない (笑)。 だからみんな恭司に仕事を頼みたがる。じゃあ 何でよく写るのかという、それがひとつあるよね。 ―よく写る?

H:光とか影とか、そういうものでもないんだよね。 でもよく写る。技術的なものも少しあるかもし れないんだけど……。今までよく写る写真って 言われてきたものは、うまく光が当たって、色 がきれいとか。でも、恭司の写真はそうでもな くて、光もうまく当たってないし……

それも技術なんですか。

H:技術だと思いたいじゃないですか。言葉にす るとつき並みになるんですけど、距離とかタイ ミングとかって。被写体、タイミング、フレー ム……それだけだよね、だって写真だもん。

高橋恭司(以下T):技術的な,特別なことはほ とんどないよ。露出は普通に計っているし、特 に変わったプリントしているわけじゃないしね。

--そのタイミングや距離っていうのは?

T:被写体からカメラまでの?

H:実際的な距離っていうのもあるだろうけど、 そうじゃなくてもっとマインドに近いものって 言うか……。それは最初会った時から感じたな。 カメラどこに置くのかってことなんかで。

T:でも、俺なんかの名前が出てくるのは、写真 が流行っているからっていうのもあるんじゃない。 やっぱり

H: 写真が流行っているから、みんな恭司の良さ に気がつきはじめた!

T:違う違う、何となくどさくさに紛れて人気 があるとかさ (笑)。

原さんは、よく俺の写真は、撮られた人が喜ぶ っていうんですよ。俺なんかそんな考えてなか ったけど

でも、どうもわからないっていうのが多い。い いらしいとか、人気があるらしいとか。そうい うのわからないよね。だいたい、写真って人気 があったりするものなのかどうかってのもわか らないしね

――例えば,写真を実際仕事にも使われている 原さんが、今まで見てきた写真と「ここが違う」 って明確に言えます?

H:言葉で言うとなー……

その写真を見ると、それに僕の意識の中のある 部分が反応するわけじゃないですか。ある感情 やら言葉にならないものが、意識の中から出て くる。それは決して意識の全体じゃないんだよね。

こういうのはあまり見たことなかったなぁ, み たいなさ。自分が実際一緒に撮影に行く現場だ ったらさ, 自分で見たことのある風景だから, 違うということがわかるわけだよね。それは明 らかに自分の見た現実のものと違う。僕の見た ものと、恭司がこういうふうに見せたいと思っ たものと

恭司にも言ったことあるんだけど、一緒にメキ シコ行って、海があって地平線があって、岩が あって。プリントで見せてくれたんだっけ。そ の時、オオッとか思って。こういうふうに見るか、 こういうふうに写るかって。

決して、俺は恭司のことを変わった作家だとは 思ってないけど、みんなが感じているある部分、 共通に持っている感覚の部分に確実に来るとい j

T:わりと共通している意識みたいなものを切 り取るってことがあるのかもしれないね。絵に 対して、みんなが持っているような。

H:でもそれは全体ではないよね、決してね。 全体的な写真ではないなぁ、ってことは感じて いる

――例えば恭司さんが撮って、原さんがアート ディレクションして, 見る人がそれに対してい ろいろ勝手に言うわけですが、「癒し」とか「安 らぎ」を恭司さんの写真に感じている人が結構 多いとよく聞くんですが

H:頭ん中に残っちゃう写真だよね。不思議だ よね。フッと写真を見るじゃないですか、僕、 いろんなカメラマンの写真見るけど、強力に残 るんだよね、恭司のはね。このことは本人に聞 いてみないとならないんだけど (笑)。

T: 今みたいな時代だとさ、テレビとか印刷と か見るものに全部、消費が絡むよね。そういう んじゃなくて、俺のは個人的だから残るのかな。 H:異質なものが残る……かもしれないね。広 告で言うと、例えば写真が入って、コピーが入 って、商品が入って、わかったと。それでもなお、 異質なものが残ったら、それはカメラマンの勝 ちかもしれないね。

それと、あともう一つ考えなければならないのは、 意識して写真を見るようになったのは、そんな に古い話じゃない、ということだよね。写真単 独で、それを見るっていうのは、

T: ここ5~6年か7~8年。

H: やっぱり、そんなもんなんだよね。

知らないものを見るとか、そういうために写真 があった時代があるでしょ。みんなが写真の良 し悪しを言ったりするのは、最近ですよね。

T: 写真に深入りしてきた (笑)。映画とか小説 の評論するみたいに, 写真についても評論する。 H:どういうカメラだとか、良くないカメラだ とか……。でも、写真の場合っていうのは違う んだよね。自分に関係ない写真ってのがあるから。 映画の場合、映画館まで足運ばなきゃならない から、関係ない映画まで見にいかないじゃない ですか。写真は飛び込んできちゃんうんですよね、 いやおうなしに

T: 最近は写真を単独で見る土壌はあるのかな。 H:ないんじゃないですか (笑)。

土壌ってのは難しくって、権威だったり、美術 館がどうってことじゃないですか。それでしか、 結局成り立っていかないから。アートとか人気 の評価をしっかりしていく。そういうところに 頼らざるを得なくて……でも、それは個人的な ものの視点からは、難しいじゃないですか。

T:俺,立派なものって好きじゃないんだよね。 まあ、若い頃から何かそういう片隅に押しやら れていたものが、何か前に出てきてもいいんじ ゃないかと、そういうのはあったね。それが原 さんとの共通点かな。かなり近い体質っていう のはあるよね。なんとなくちょっと情けないよ うなものがいいっていう……。だから、随分、 年はちがうんだけど、ある種の無責任さ、ある 種の恥知らずなところっていうのが共通してあ って。そういうもの、みんながいいって言って

H:時代は変わってきたな。意を強くするよね。 いいことだよ。

T:原さん、音楽とかは? 音楽とビジュアルと かもあんまり差がないよね。

H: それも一元的だよね。アートとか全部一緒 だよね

そういう見方から言うと、恭司さんの写真は、 ジミ・ヘンドリックスのギターなどに近いもの がある。誰とも同じではない異質さをはらんで いながらも、多くの人がそれに何かを感じる…… T: ジミヘンみたいの? 今, 聞くといいよね。 マイナスの部分が結構出ているってことかな、 意識のなかの片隅にある, 立派じゃない, ちょ っとした部分, そういう部分が結構出ているか ら……。ジミヘンだって、そうだよね、情けな い部分あるよね。なんかすごい対談になってきた。 情けないことについての話だな(笑)。

H: ダリの絵とか俺好きなんだけど、どこか情 けないよなとか思って、いいなあって (笑)。こ れはもうしょうがねえなって、好きだな一って、 ダリの絵見たのは中学生くらい。ホテルかなん かで、デカい展覧会やっててそこで見た。

立派なものが嫌いっていうのもある。昔からそ うだし。立派なものはよくないな。映画でも何 でもそうなんだけど。あんまり立派なものだとさ、 やっぱりなあって。悪魔の仕業かみたいに思っ ちゃう。情けないといいなと思っちゃう。

女性が恭司さんの写真を見てもそういうふ うに感じるんですか

女性スタッフ:全然そんなことない。だけど, 写っている人の目が透明だったり……。そうい うのにはすっごくびっくりした。

雑誌であんなふうに撮っている人はいなかったし、 ああいうふうに写されている人はいなかった。「何 だこの目は」っていう感じ。この人、本当にア ブない人なんじゃないかしらと思った、被写体 の人が……

あとは、すごくちっちゃいときに見た風景だな、 この風景は,っていう印象。

H:写っている人の目が透明……すると、やっぱ I)狂気じみてるのかな。

女性スタッフ:それはそれで、すごく気持ちよ かったですけど。

T:能, 誰を撮っても, ああいうふうになっちゃうんだよね, 最近。俺にはあんまり違いがわからないんだよね, 写っている人の。だいたい同じだなとか思って見ているんだよね。人の形しているなぐらいの感じで。透明な目っていうのは, 写真に写りにくかったのかな。

姓スタッフ:全然違うカメラマンの写真でも, この人, 恋人だったでしょ, っていうのはスグ わかる。

T:でも、写真ってバレるよね、ものすごく自分のこと。いろんなことが。あからさまな感じがする。だから恥知らずじゃないとできない(笑)。今に合っているんじゃないの。こういう時代にものを見るのには。そんなあからさまなものってないじゃない。例えば会話だってあからさまなもんじゃないよね。そういうのに比べると、かりと恥ずかしいよね(笑)。

一恭司さんの作品に出ているそういう部分って、 総望ではないですよね。

T:被写体があって、何かを写真機のほうに置き 機えているような感じが自分でするのね、俺の 作業って。何かに似ているなと思ったら、学生 の頃にやった彫塑とかデッサンとかに似ている なって。見ながら置き換える……手動かしたり しないんだけど写真だから。そういうのに近く で……人のことが好きとか嫌いとかってそんな にないのね。写し変えてみるのが面白いとか、 わりとそういう感じ。だから被写体とカメラマ ンの関係でわかりやすい「欲望」の感じはない よね。

でもおかしいのはそれがかなり似てると別だけど、 影刺やデッサンは、抽象形態みたいなもののひ とつになるじゃない。写真はロコツじゃん。写 真ってそういうところがかなり辛いなって。

能だとさ、かなりモデルに似てたとしても、かなり抽象的にもできるし具象的にも。どっちかにできるよね。写真の場合はモロに……具象的なものが出てきちゃって、そのなかで目が透明とか、透明じゃないとかっていう感じが出てきたり……それは成熟してるんじゃないの。

H:写真のほうが?

T:いや、時代みたいなものが。成熟してくると 写真なんか見だすとか、そういうのあるかも知れないな。情けないものなんてなかなか成熟しないと人は見ないもんね。

職写真家がどうしたこうしたっていうの全然 動なくて、俺も自分の写真の一枚が良けりゃ といいなと思ってたんだけど、何か知らないけど、 まとまって発表するようになっちゃって。

『真家の時代』なんて最近の話だよね。

H:生き方みたいになりがちだよね、写真家の生き方みたいなことで、いいみたいな。

たた、写真家って、ある種の技術を持った人で あることは確かだよ。技術としか言いようがな いんだけど。普通の人が撮ったら写んないんだから。みんな写るかなと思ってやるんだけどダメなの。だから写真家って尊敬に値する人達ではあるよね。

――原さん自身は「見たこともないものを見たい」 っていう気持ちが強いんじゃないですか。

H:見たいのか、要約したいのかわからないけど。 要約したいっていう言葉のほうが当たっている のかもしれない。頭ん中いろんなものがあって、 要約して……。そういう写真がいいなと思って いるんだよね。要約されてないものは、あんま り興味ないんだよね俺ね。関わっている暇はな いっていう感じがするんだよな、本当に。そう いう楽しみだと思うんだよな、写真って。

――恭司さんも見たいって気持ちは……風景と か撮りたいものでも何でもいいんですけど。

T:情けないもんな、俺の撮るものとか(笑)。特別なものとか好きじゃないし。特別なことじゃないことの方が、あんまり見られてないんで……。何か特別のことがあるとすごい盛り上がるじゃん。お祭りとか。ああいうのうんざりするんだよ、子供の時から。戦争とか起こると……きっと何か、喜ぶというか盛り上がるんだよ。——写っているものが普通で、モヤモヤっとし

たところが好きだという感じがあるんですが。 T: それは時代性とクロスしているでしょ。モヤ モヤ感とはクロスしているんじゃないかと思う, 別に意識してないけど。そんなかで生きてるから, そうなるよねどうしても。

一カッコイイってみんなの言うものは、撮ってないですよね。

T: だってそういうものカッコよくないんだもん, 大抵。自分から見るとね。っていうか, わかん ないんだよね俺。そういうのあんまり。

情けないっていうのも、俺は本当はよくわからないけどね。見てて、これは情けないな、なんていうのも思わない。本当は何も思ってないっていうのが正しくて、自分のなかでは。

――原さんは写真は技術だとはおっしゃっているけど、原さんが見たいのは技術の先にあるものでしょ。それを言い表す言葉がないんですけれども。

H: まとまっていないわけね,自分の中にある気持ちみたいなものが。それをまとめてくれると,オーッこれだーみたいなさ。やっぱりそれは技術た。(笑)

僕にとってはそうなんだよ。そんなもの言葉に できない。生まれとか育ちとか教育とか、好き な食い物とか……外堀から埋めていっても、遠 いよわ

T: 定着するってそういうことなのかな。時間を 定着する場合は、要約されている……。

――恭司さんは自分で以前とは写真が変わって きている,あるいは変えていこうとか,意識し てますか。

T: あんま思わないよね。変わったらいいなとか、 変わらなかったらいいなとか、あんまり考えない。 そんなの強要できないもんな。こういうふうに 変わったらいいななんで、俺、あんまり思わないからね。

H:でも、変わるんだよ。カメラマンって多分は じめは撮ってるのが部分なんだよ。それがだん だん年とってくると全体に向かってくる。そう すると写真もわかりやすくなってくるんだよ。 俺絶対そう思う。

T: そうだろうね、年とったら自然にね。変わらなかったらいいなみたいなこと、別に思わないからね。ほら……今のことしかできないからね。前に戻って直すなんてことないし、先のこと計画するつもりもないから。

H: その辺は結構, 写真的だよね。

T: どうかな。写真的かどうかはわからないけど。 写真的なんじゃなくて、俺的なんじゃないの。 その辺がね、誤解がすごく生まれやすいよね。 別に誤解でいいんだけど。

いろんな人に写真は俺に向いてるってよく言われるから、向いてるんだろうけど。自分では向いてるなんで思わないよね、あんまり。

ギターよりは上手いなぐらい。ギターよりも上手いし、スケボーよりはかなり上手いとかってランク。

もっとスゲー音とか出したら、ギタリストになっていたかもしれないなとかさ。でもならないっていうのは、スゲー音が出なかったんだな… …とか

H: そうだよ, みんなそうだよ。

T: 俺、ギターなんか弾くと、いっつも思うんだけど、もうカーンって音が違うんだよね。それは、その人の持っている音しかでないということじゃないかな。だから、自分の中ではギターよりも写真のほうが上手いなと思ってて。だから飽きないでやっているんだろうなって。

あと、俺ってどっちかっていうと、きれいだなと思って見るのね。見ていて、きれいに見えるとき撮るようにしているんで、例えば人を撮る場合でも、特にその人に関心があって撮りたいという気持ちは何もないんだ。見ているうちに少しきれいだなと思えば。それ以外にあまり理由がない、撮ることについて。

多分、好きな形があるみたいなんだ、俺。それに近くなったときシャッター切ってるって感じがあるんだよね。何か知っている形だなとか。それはヘリコプターに似てるとか、そんなのでもいいんだけど。じゃあ撮られている人はどんなんだろう、というようなことは関係ない。その人がどんな人かみたいの、写真と関係ないからね。俺、関心がないから、そういうの。

何か似ているものが、きっと自分の中にあるん じゃないかな。俺の中に原型みたいなものがあ ってさ、それに近くなったりするとシャッター 押すんじゃないの?

俺,自分の次撮る写真って、まだ見ることができないけれど、きっと知ってるんだよね、どこかでは。自分はまだ見てないけれど、その写真って、自分が撮れば、あるんだよね。その時から。

'96-11-7





HIROMU HARA

The dawn of Japan Modern Graphic Design

From Retrospective Exhibition, **Iida City Museum of Art**

特別展: 原弘 近代グラフィックデザインの夜明け 飯田市美術博物館より





Born in 1903, HIROMU HARA is one of the pioneers in Japanese graphic design history.

As early as in his twenties, he was affected by designs from Europe and U.S.A., most importantly by BAUHAUS, and absorbed them while studying their languages by himself. At the same time, he developed his original style and maintained the Japanese decent quality in it, without just imitating them.

Japanese design industry was still at the dawn when he started as graphic designer.

His activity was focused then on letting people know the importance of design in such various fields as lithograph, posters, typography, advertisement, package design, design of exhibition site, layout of graphic magazines and book design, which was his forte.

On the other hand, he was eager to cultivate the young designers, establish design organizations and companies, and develop the qualified papers for ever-progressing graphic design.

It is not too much to say that he created the foundation of Japanese graphic design industry.

Commemorating a decade since he passed away, the retrospective exhibition of him has been held in his home town, Iida city, Nagano prefecture.

Looking back his great achievement, IDEA, too, is honored to be able to show some of his works here.







特別展「原弘」~近代グラフィックデザインの夜明けは'96年9月28日-10月27日まで











バウハウスの中では、モホリイ・ナジとハーバート・バイヤーの業績が、 もっとも身近に感じられ、それにチヒョルトの理論も加えられて、

将来のコミュニケーションにおけるタイポグラフィと 写真の果たす役割に確信をもち、僕のその後の仕事は、 おおよそその中に方向づけられた。

(平凡社『原弘 デザインの源流』1986年より)







原弘がこの世を去って10年が過ぎた。原の郷里、長野 県飯田市にある飯田市美術博物館ではこれを機に, そ の偉業をあらためて振り返る特別展「原弘」展が開催さ

●原弘といえば、日本におけるグラフィックデザイン のパイオニア的存在としてデザイン史に名を残し、そ のデザイン活動についてはこれまで多くのデザイナー、 評論家, 装幀家によって論述されてきた。だが, 今回 の展覧会にはこれらとは違った意味で感慨深いものが あった。それというのも、原が亡くなってからの10年 の間にデザインを取り巻く環境は大きく変わり、時代 が要求するデザイン自体も変わったような観がある。 グラフィックデザインにおける円熟した状況は, 一方 では多種多様な表現の洪水的状況を生みだし, デザイ ンという概念そのものを希薄にしてしまうような不安 をそのムーヴメントの中に内在している。

具体的な例でいえば、原弘がそのデザイン活動のなか でも、とりわけ力を入れていたタイポグラフィの分野 では、心血を注いだホットメタルからコールドタイプ への推移の時代から、さらにデジタルタイプへと時代 はシフトし、書体の数も百花繚乱のごとく激増、中に は目新しさのみが先走りして, 可読性を欠いたものも 少なくない。こうしたものも同じタイポグラフィ、ひ いてはデザインとして取り込まれていく中で, いつの 間にかデザインに求められている本質が曖昧になって

はいないだろうか。そのような状況の中で目にする原 弘の仕事は、まさにわれわれの意識の中で希薄になり つつある「デザイン」の概念を呼び覚まし、気持ちを引 き締める。そしてプロとしての仕事の厳しさを無言の 教えのようにその作品の中に湛えている。今展のカタ ログの中で田中一光氏は「常に本物に接して積み上げら れた確かな眼, その美意識の高さは, デザインという 仕事の支柱の部分に突きあたると, いつも私は原先生 の『名答』を思いうかべるのである」と原弘の仕事につ いて述べている。本物や本質が見えにくくなった現在 だからこそ、デザインの概念をわが国に定着させ、自 ら体現した原弘の活動を振り返ってみることは、これ までとは違った意味で重要性をもってくる。

●今回の展覧会ではポスター24点、装幀やレイアウト を手掛けた書籍90点、そのほか原の代表的な仕事の一 つである『FRONT』やパッケージやチラシ,東京オ リンピックに関する仕事や、開発に尽力した紙の仕事, そしてこれまで紹介されなかった東京府立工芸高校の 教員時代に作成した石版図案集にいたる約180点が展示 され、原弘の回顧展としてはこれまでにない大々的な ものとなった。だが、原弘のデザイン活動の特徴は、 他のデザイナーとは違って作品として残されたものだ けでは、その活動の全貌を総括できないところにある。 ざっと見てみても, グラフィックデザインはもとより, 真骨頂である装幀(原弘の仕事ほどこの表現がしっくり

くるものはないのではないか)、教育者、デザイン評論家、 また日宣美や東京アートディレクターズクラブ設立へ の関与(職能団体を組織化することにより、デザイナー と社会との接点を築いた),日本デザインセンター設立 への参画(社会におけるデザイナーの職種的確立), そ してデザインに不可欠な紙やインク, 活字などの開発 に携わるなど、まさに現在のデザインが必要とする基 礎的な部分にはすべて原弘の手が及んでいるといえる。 戦前, 戦後を通じて、わが国のグラフィックアートが 図案からデザインへと成熟していく貴重な橋渡し役を 担っている。(詳細な活動については、この記事末の略年譜を参照) 以上のように、原弘のたどった歩みを紐解いていくと, その活動はあまりにも広範におよび、おのずと日本の デザイン史をたどることになるのだが、そもそも原が このようなデザイン人生を歩むことになったきっかけ は何だったのか、今度は視点を変えてその人物像に迫 っていきたい。

●歴史に名を残す多くのデザイナーがそうであったよ うに、原弘の場合も数々の人間との出会いの中で自己 形成がなされていく。印刷業を営む父のもとに生まれ た原は、東京府立工芸高校(現・東京都立工芸高等学校) 製版印刷科へと進む。そこで出会った科長は新進デザ イナーの宮下孝雄であり、宮下は教員という立場より もデザイナーとしてのスタンスで原たち生徒に接して いたらしく、海外のデザイン事情を多分に含んだ授業











1. 巴里万国博覧会 日本観光写真壁画 1937年

235.0×1800.0cm 写真: 木村伊兵衛, 渡辺義雄, 小石清 日本タイポグラフィ展 ポスター 1959年 ダダ展 ポスター 1968年

ピカソ展 1964年

FRONT」1-2 海軍号 1942年 東方社刊 「FRONT」3-4 空軍号 1942年 東方社刊 「FRONT」10-11 鉄号 1943年 東方社刊 「FRONT」14 フィリピン号 1944年 東ブ

1944年 東方社刊

9-12. 『FRONT』見開きページ

『FRONT』はA3グラヴュア刷りのグラフで、第一号は海軍号で、 の年の暮の日米開戦直前に出来上がり、この号はロシア語版はもち **ろん、ビルマ語やバリー語、蒙古語というように全部で十三ヵ国版** のレイアウトをやり、ぼくとしてはその後にもないような経験をした。 編集のスタイルは号によってリシツキーなどがつくった「ソ連建設」 に範をとり、号によっては「ライフ式」のピクチュア・マガジンのスタ イルをとったりした。上海の書店である中国人が、これはアメリカ の雑誌だといってゆずらなかったことが、滑稽にも思い出される。

(「デザイン彷徨記」ダヴィット社「日本デザイン小史」1970年より)

● 要するに一冊の本をデザインするといえば非常に簡単なんですが、 それでは一冊の本のどこまでをブックデザインというか。 わたしは外箱から奥付まで全部やってしまうのが 理想的なブックデザインだと思います。

(「最近におけるブックデザインの傾向」、「出版クラブだより」69号、1970年所収)





「法隆寺」 法隆寺金堂壁画再現委員会編 朝日新聞社刊

が原の好奇心を駆り立てた。このデザイン 意識の目覚めに関する最初の出会いの有無が, 原の その後の人生を大きく変えたのではないだろうか。 原はそれからも頻繁に雑誌等を通じて海外のデザイ ンに関心を寄せ、「学校でとっていた『インランド・ プリンター』のあるページを開くと、ぼくは息が止 まるほど新鮮な活版作品を見出した。辞書をひきな がら読んでみるとドイツの印刷雑誌『ティポグラフ イッシェ・ミタイルンゲン」の特集<エレメンターレ ・ティポグラフィ>の紹介で、そこに紹介されてい た赤と黒の二色刷の作品は、忘れもしないエル・リ シッキーのマヤコフスキーの詩集の見開きページだ った。ぼくは『インランド・プリンター』のジョップ・ プリントの紹介ページで、新しい組版のデザインに ついて, 今でいえばレイアウトやタイポグラフィに ついて, 当時の図案の本からは全く学ぶよすがのな かったものを多く学んだ」(「デザイン彷徨記」、ダヴィット社「日 本デザイン小史 1970年 所収と素直にその影響を認めて いる。海外の刺激的なデザインに触発されて自己の デザインの活路を見出す者は現在のデザイナーの中 にも多い。しかし、原の場合は影響を受けても、そ の表現の中核をなす部分を的確に見抜き, 受けた影 響をダイレクトな造形で出さなかったところに今日 のデザイナーとの開きがある。他からもたらされた 視覚的影響を, 模倣あるいはサンプリングというか たちで自己のものとしている今日のデザイナーとは 根本的に創作意識が違う。原はバウハウスからも多 大な影響を受けているが、そこで彼が感じ取ったの は今後のデザインにおけるタイポグラフィと写真の 重要性であり、それはまさに的中した。原の活動の 基幹となる, 表現上の形式にとらわれない本質を見

極める眼はそのころから備わっていたようだ。 模倣に流されず自己を律した姿勢こそ原弘のデザインだといえる。

その後, 原は木村伊兵衛をはじめとする多くの写真 家との出会いによって、その表現力を大きく開花さ せていく。1937年に開催されたパリ万国域では、フ ォトモンタージュの技法を用いて大壁画を構成する 画期的な仕事を成し遂げ、1940年代に入ると軍国主 義の下で対外向け宣伝グラフ誌『FRONT』を手掛 けている。これらの仕事は半世紀を経た今でも十分 通用する先駆的なデザインであり、わが国のデザイ ン黎明期における数少ない国際的名作である。これ らの仕事には、戦後、原の仕事の中心となる装幀の 表現にはない前衛的でダイナミックなデザインが展 開されている。特に『FRONT』では戦車や飛行機、 兵士が映画的なクローズアップ効果を活かした遠近 感の中で迫力を増し、フォトモンタージュによる併 置や反復がそれを引き立てる。戦時中の厳しい創作 環境にも関わらず、レイアウト技術を駆使した精巧 な誌面構成には、エイゼンシュタインやロシア・パ レエ, バウハウス, リシッキーのタイポグラフィな どから吸収したエッセンスが鮮やかに反映されている。 そしてこの刷りものには、ページを繰った時の展開 を考慮にいれたディレクションと造本がなされており, その仕事は、いまの写真プームに乗った生半可なデ ザインを一蹴するほどの計算と厳密さに満ちている。

このような『FRONT』のつくりには原の本における表現的可能性への実験が見て取れ、この紙メディアに対する可能性追求の姿勢は、電子メディアの台頭で紙メディア軽視の風潮が高まりつつある今日、再考を要する教訓をわれわれに発信しているかのようだ。

●終戦後、仕事を失った原は谷川徹三や林達夫らの紹介をきっかけとして、出版界とつながりを持つようになる。そして、これがおそらく彼が天職としたであろう装幀の仕事を担うきっかけともなった。原弘の代表的な仕事として装幀を挙げる人は多い。事実、終戦後からその天寿を全うするまでの間、原はつねに装幀の仕事とともにあった。原が精魂傾けた装幀の神髄は、豪華本ほど顕著に表れている。その見事な仕事に関しては、これまで多くの装幀家、デザイナーがそれぞれ専門的な立場から見解を寄せているのでここで細かい内容について触れるのは避けるが、原のともすれば地味にも映る装幀の数々が、なぜこうも強く心に響くのか、この感銘を誘引するものについて掘り下げてみる。

豪華本の装幀には選びぬかれた紙はもちろん、表紙・ 化粧箱用の紬、その内側に貼るクロス、笹爪(こうぜ)、 そのほかにも贅を尽くした素材が用いられ、印刷や インク、和綴じといった造本にいたるまで、あらゆ る手業と英知、そして時間がつぎ込まれている。し かしそうした素材や技術よりも、そこに見えかくれ する、一つ一つの素材を手に取りつぶさに吟味した であろう原弘のまなざしに感動を覚える。

原弘が残した装幀を含むあらゆる作品を見る限り, 決して原は天才肌のデザイナーではなかったと思う。 しかし、それに匹敵する本質を見定める限力(これこ



「世界大百科事典」 平凡社刊 1955年



「書道全集」 平凡社刊 1965年



「大観」河北倫明編·著 平凡社刊 1962年













3 4 6

Paper is the heart of design

そ原のデザインセンスだったのではないだろうか)。 横溢するデザインへの好奇心、そして原のデザイン のカギとなる自己制御力, これらが相互に作用し, 何度も試行錯誤を繰り返すなかで、どんどん作品が 純化されていったような、そんな余韻が仕事の端々 に感じられる。画竜点睛のごとく, 禁欲的かつ効果 的に入れられた表紙文字一つをとってみてもそれが 伝わってくる。原の作品に覚える感銘は、きっとこ の純粋さ、厳しさの中にあるのではないだろうか。 質素なる前衛――原が向かっていた美の世界は、ま さにこれだったのだと思う。

●最後に、原弘の重要な仕事として<紙の開発>に 触れなければならない。

田中一光氏がモリサワのためにデザインしたポスタ 一の中に「文字の演技力」という日暮直三氏の名コピ 一がある。この「文字の演技力」に重点を置き、忠実 にデザインしたのが原弘ではないだろうか。そして 原はその演技をより引き立てるため、その舞台とな る「紙」にも注意をはらい、演目(作品)にふさわしい 紙を自らの手で開発していった。その数は約50種に および、作品にとってもそうだが、それに接した人々 に十分な豊かさを与えた。これも竹尾用紙店の竹尾 **禁一氏との出会いがもたらした所産である。しかし、** その背景には「戦後非常に紙が不足していた時期に 装幀をはじめて、 仙花紙を使って装幀ともいえない ような装幀をしながら、ときにはこういう材料が欲 しい。こういうときにはこういう材料が欲しいとい うことを、切実に感じていました」(PIC「著者と編集者」 1971年)という、よりよいデザインを希求する気持ち が幸運を呼び寄せ、実際に開発にあたっても「新し い紙を何十種類もつくると厖大な量のストックがで きるわけです。もしそれが売れなかったら大打撃を こうむるわけで、私も本当のところ途中でこわくな ったくらいです」(前出書)とコメントされている通り、つ ねに不安と背中合わせであり、並々ならぬ情熱がな ければ達成できなかったことを伝える。

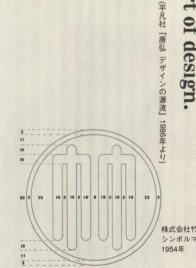
「Paper is the heart of design」 --- 原弘が竹尾榮一 氏に語ったこの言葉に、紙に対する想いが集約され ている。

こうして原弘によって生み出された紙は、現在も多 くのデザイナーによって愛され、表現に多様性を与え、 広くデザインの舞台として迎え入れられている。自 分が普段使っている紙が、実は原弘の手によるもの だと知らないデザイナーも年をおうごとに増えてい るのは事実で、恩恵を授かる後輩は、新しい素材を 開発するに及んだ、先人の飽くなきデザインへの探 究心について, 一度はじっくりと考えてみる必要が ある。

● 時代が世紀末に向けて急加速し、それに引っ張ら れるかたちでデザインも急激な変貌を遂げている。 ややもすると、その勢いに呑み込まれ自分のデザイ ンを見失いそうになってしまう。情報過多の環境に 身を置いていると、時としてデザイン的理性に混乱 をきたし「原点に返りたい」と願う。

デザインにおける原点――これが原弘の仕事なのだ ろう。原弘の仕事はどんな時でも堂々と、潔く、こ ちらが求めれば静かにいろんな教えを与えてくれる。 そしてそれは、われわれが新しい経験を積み、造詣 を深めるほど、仕事に託されたその尊い意味が一つ 一つわかってくるような気がするのである。

(編集部· 小間 学) ※一流の故人には敬称をつけない慣習にならい、原弘先生に対する敬称を



株式会社竹尾のための シンボルマークの設計

文中で略しました。 ◆ 順 引が手掛けた主か紙 (~~にもこのけるの 一般です)

用 紙 名 (図版番号)	開発年	用紙名	開発年
NTラシャ	1949年	マサゴオペーク	1963年
MLファイバー (2.6)	1949年	ベルクール	1964年
STカバー	1950年	波光	1967年
アングルカラー	1953年	LKカラー	1967年
パルテノン (3)	1953年	ダックボード	1967年
マーメイド	1956年	コルバス	1968年
マイカレイド	1957年	ピルゴ	1968年
パンドラ (1)	1959年	玉しき	1969年
サーブル	1959年	彩雲	1969年
フロッケン	1960年	プリマ	1970年
パミス	1960年	新だん紙 (7)	1970年
新局紙	1962年	羊皮紙 (4,5)	1970年
ダイヤベーク	1962年	シープスキン	1970年













花王石鹸パッケージ 1931年



「die neue typografie - 新活版術研究」 1932年



日本歌舞伎舞踊 ポスター 1958年 CL: 国際文化振興会



第18回オリンピック競技大会 入場券



ANSHIN BUTTER

南信バター パッケージ 1948年

昭和23年頃、長野県下伊那郡伍和村の酪農組合が計画した「南信バター」は、同じ長野県の飯田市出身で、組合内にも類縁のあった原弘にデザインを依頼し、バッケージの型取りまで完成させたが、製品化を待たずに計画は中断され、このバッケージが市場を流通することはなかった。

- 1903 長野県飯田市に生まれる。
- 1918 飯田中学校を中退し東京府立工芸学校(現・都立工芸高校)の 印刷料へ入学。(当時, 科長にデザイナーの宮下孝雄がいた)
- 1921 同校印刷科第一期生として卒業後、母校の要請により教員 として石版実習と印刷図案の指導・研究にあたる。
- 1925 「みずゑ」誌の仲田定之助の論文によりバウハウスの活動を知る。
- 1928 第1回日本プロレタリア美術大博覧会に3点のポスターを出品。うち「無産者新聞を読め」は官憲により撤回させられる。
- 1930 花王石鹸の新製品パッケージデザイン指名コンペで採用される。(このコンペではほかに杉浦非水、村山知義らが指名を受けていた)。
- 1932 モホリ・ナギ、ヤン・チヒョルト、ウィリー・バウマイスター などのレイアウト、タイポグラフィに関する論文を翻訳し た『Die neue Typografie・新活版術研究』を自費出版する。
- 1933 写真雑誌「光画」に連載執筆。同誌を通じて多くの写真家との知遇を得る。名取洋之助主催の「日本工房」(第一次)の設立に木村伊兵衛、岡田桑三、伊奈信男らと参加。東京府立工芸学校出身者による東京印刷美術家集団(PAC)が結成され主幹となる。太田英茂主催の共同広告事務所の嘱託としてパッケージなどを手掛ける。
- 1934 木村伊兵衛、岡田桑三、伊奈信男らとともに日本工房を脱退 し、中央工房を設立する。また、同工房内に国際報道写真協 会が設立されメンバーとなる。
- 1935 帝国美術学校(現・武蔵野美術大学)の講師に就任する。
- 1937 鉄道省国際観光局の依頼により,バリ万国博覧会日本館に わが国最初の写真大壁画を構成する。
- 1939 商工省·日米協会の依頼により、ニューヨーク万国博覧会日本館日米国交参考部の写真壁画を構成する。
- 1941 岡田桑三、木村伊兵衛らと東方社創立に参加し,美術部長に 就任。同社発行の対外宣伝グラフ誌『FRONT』のエディ トリアルデザインを担当する。
- 1945 終戦を待たずに東方社は解散。その後、デザインと写真ス タッフにより文化社を設立するが、数点の出版活動を経て 解散。
- 1946 名取洋之助主催の「週間サンニュース」の発行に協力。 日本デザイナー協会設立に参加する。
- 1950 東京作家クラブ(後の日本宣伝美術会)の設立に参加。平凡 社『児童百科事典』の編集委員となり、後に同社の顧問と なる。
- 1951 日本宣伝美術会の設立に参加し中央委員を務める。毎日新 聞社『NEW JAPAN』のアートディレクションを河野鷹思 と担当する。
- 1952 武蔵野美術学校デザイン科商業デザイン科教授に就任。 この年より国立近代美術館のポスターを手掛ける。
- 1953 彰国社『世界の現代建築』で53装頼美術展文部大臣賞を受 賞。日本デザイン学会設立に参加。
- 1955 国際デザインコミッティー(現・日本デザインコミッティー) のメンバーとなる。「グラフィック55展」に参加。(ほかの 参加メンバーは河野鷹思, 亀倉雄策, 伊藤憲治, 早川良雄, 山 城隆一, 大橋正, ボール・ランド)



原弘アートディレクションによる グラフィック'55展覧会カタログ

- 1956 MoMAでの「日本のグラフィックデザイン展」に参加。
- 1957 「日本のポスター展」(西ベルリン美術館)に参加。
- 1958 「日本グラフィックデザイン展」(オーストラリア・リンツ市 美術館)に参加。「歌舞伎舞踊のポスターデザイン」でADC 銀賞を受賞。
- 1959 雑誌「クラフィックデザイン」(編集長:勝見勝)の創刊に顧問,およびアートエディターとして参加。マルマン株式会社のスパイラルノートの企画・製作にあたり、用紙製造のため竹尾榮一と真砂製紙(現・特殊製紙)を訪問。以降、紙のデザインに精力的に取り組む。翌年開催の世界デザイン会議の準備委員会が発足し、日本実行委員会副委員長となる。
- 1960 日本デザインセンターの創立に参画し取締役を務める。世界デザイン会議開催。同会議の広報を担当するとともに議事録をも作成する。1964年に開催される東京オリンピックの組織委員会デザイン懇談会書体の統一および広報を担当。公式招待状、賞状、公式広報、入場券などを製作する。

- 1961 東京アートディレクターズクラブの会員となる。竹尾用紙 店の「製紙におけるシリーズデザイン(アングルカラー、ST カバーなど)」で第7回毎日産業デザイン賞を受賞。
- 1962 日本デザインセンターの専務取締役に就任する。武藏野美 術大学造形学部産業デザイン料商業デザイン主任教授とな る。「日本建築家協会モヂュール展のディスプレイ・パネル デザイン」でADC銅賞を受賞。
- 1963 平凡社『太陽』の創刊にあたりアートエディションを担当。 外務省発行の『GRAPH JAPAN』のアートディレクショ ンを担当。
- 1964 ICTA(International Center for the Typographic Arts)の日本代表となる。そして同会主催の「TYPOMUNDUS 20展」の国際審査員を務める。日本政府の委嘱によりIMF年末総会東京大会の記念刊行物『JAPAN』のエディトリアル・デザインを担当する。雑誌『太陽』のアートディレクションでADC鋼賞を受賞。
- 1965 ハワイ大学主催「EURASIAN GRAPHIC EXHIBITION」に参加。『JAPAN』のエディトリアル・デザインでADC鋼質を受賞。『日本列島』『世界写真年鑑65』(以上、平凡社)、『正倉院の宝物』(朝日新聞社)の装幀でライブチヒ国際ブックデザイン展の書籍美術賞を受賞する。
- 1966 国際芸術見本市選定委員になる。
- 1967 札幌冬季オリンピック大会デザイン委員となる。国際グラフィック連盟(AGI)の会員となる。ユネスコのアジア地域 出版技術研修コース実行委員、日本デザイン学会の評議員 を務める。アムステルダムでの「日本のグラフィックデザイン展」に出品。
- 1968 愛知県立芸術大学の非常動講師となる。第3回造本装幀コンクールで「技術と人間」「現実と創造」(いずれも美術 出版社)が最高特別賞を受賞。
- 1969 日本デザインセンター代表取締役社長に就任。ユネスコ東京出版センターの委嘱によりタイプフェイス研究委員となる。日本出版学会理事に就任。写研主催の創作タイプフェイスコンテスト「石井賞」の創設に参画。田中一光、勝井三雄らとデザイン・ギャラリー「ブラザDIC」(大日本インキ株式会社)を開設。彫刻の森美術館のマークとポスターを創作する。
- 1970 第1回アジア地域装幀コンクールの実行委員長を務める。 第5回造本装幀コンクールで『芸話 おもちゃ箱』(朝日新聞 社)が金賞を受賞。
- 1971 紫綬褒章を受章。ユネスコ東京出版センターのタイプフェイス研究委員会で製作したタイ文字の新書体をタイ政府に寄贈する。第6回造本装幀コンクールで『ボール・クレー』 (求龍堂)が文部大臣賞を受賞。第44回ライブチヒ国際ブックデザイン展で平凡社『アポロ百科事典』が金賞を受賞。
- 1972 第4回ワルシャワ国際ポスタービエンナーレの審査員を担当。ユネスコ主催「アジア地域図書開発専門会議」のテクニカル・アドバイザーを務める。「オフ・デザイン」の設立に参画。文部省国語審査会委員になる。第7回造本装幀コンクールで「世界版画体系(全16巻)」(筑摩書房)が文部大臣賞を受賞。
- 1973 フジテレビ・ネットワークのシンボルマークを制作する。
- 1974 「デザインフォーラム・グラフィックス74展」開催。コミッショナーを務める。ライブチヒ国際ブックデザイン展で「萬業大和路」(保育社)が金賞を受賞。カナダ・グラフィックデザイナー協会より名誉会員の称号が贈られる。日本出版学会に入会して常任理事となる。
- 1975 日本デザインセンター顧問に就任。第10回造本装幀コンク ールで「建築大辞典」(彰国社)が通商産業大臣賞受賞。 「東洋陶磁大観(全12巻)」(講談社)で講談社出版文化賞ブッ クデザイン賞を受賞。8月,東南アジア旅行中にクアラルン ブールで倒れ入院する。
- 1976 7月に退院し、中伊豆リハビリテーションセンターで療養。
- 1977 第12回造本装幀コンクールで「特殊製紙五十年史」(特殊製紙)が通産大臣賞を受賞する。
- 1978 勲四等旭日章を受章。
- 1981 『中国の博物館』(講談社)で第16回造本装幀コンクール文 部大臣賞受賞。
- 1982 『西域美術』(講談社)で第17回造本装幀コンクール通産大臣 賞受賞。
- 1983 東京ADC創立30周年の会員貢献賞を受賞。
- 1985 田中一光、江島任らの手により「原弘 グラフィックデザインの源流』(平凡社)が出版される。
- 1986 3月26日未明に死去。享年82歳。



SHINRO OHTAKE'S SILLY BUT STRIKING BOOK



小誌258号の巻頭で特集した 大竹伸朗のスクラップブックへの反響は

予想以上に大きかった。

なかでも多かったのは

「もっと大竹伸朗の作品が見たい」

という声だった。

そこで,今回はその要望に応えて,

大竹本(作品)の中でも

特異な作品の一つに数えられ,

以前,あるメディアの"悪趣味"特集にも登場した

問題作をここに紹介する。



「ザ・ハード・バイブ くいこみ蜘蛛 1995年制作 385×295×45mm, 228ページ

ドンッと送ってきたことに端を発する。

にいる友達が八十年代のポルノ映画ポスターを

この本をつくったきっかけは、

四、五年前東京

は正直な話、あまりにひどい代物でしばらく放け下直な話、あまりにひどい代物でしばらくないら送られてきたポスターを初めて目にした時だまだ教えてもらうことばかりだ。そんなM君は若いが、内に独特の美意識があり、古本屋の映画の話などをするうちに仲良くなった。M君新宿のレコード屋で働いていたのだが、音楽・本・の友達であるM君はその頃よく行っていた西

はなかった。

それらのコレクターの常套基準に興奮することターも多いが、僕はコレクターではない為か、ターは印刷やグラフィックが素晴らしくコレクっておいた。六十年~七十年代のこの手のポス

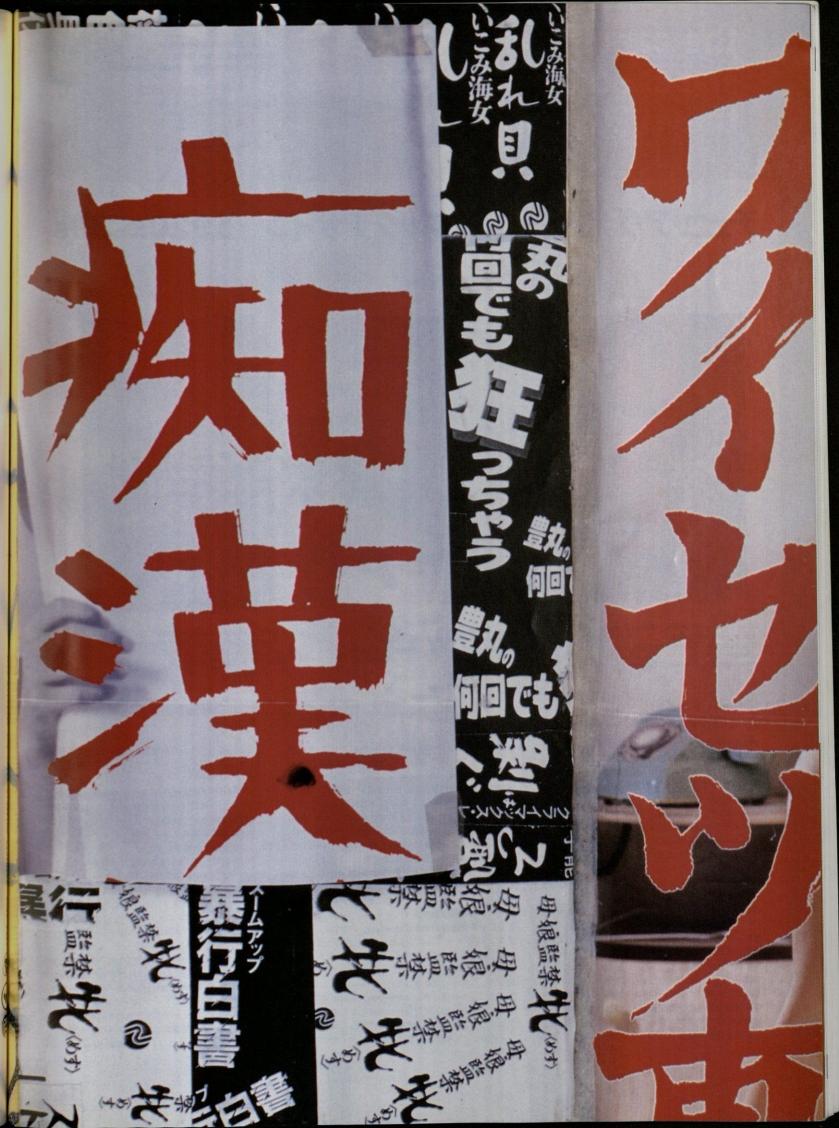
られた業界向けの帯の束を見つけた。それを見 久々に放っておいた八十年代のポスターの束を うしようもない本という考えが浮かび、その時 スターを組み合わせ、"読める"要素を持ったど ストーリー内容や配役やモノクロスチールが刷 が、中に映画タイトルを表一色で、そして裏に 見てみると、やはりどうしようもないと思った と思う。僕がそのどうしようもなさと張り合う 行きつき一人深く納得した。あとはほとんど何 だったのかと、なんだかわけのわからぬ答えに 初めてこの 。どうしようもなさ。はこういうこと た瞬間、頭の中でその帯とどうしようもないポ ドンッと送られてきたことは言うまでもない。 も考えてない。本制作には3日ぐらいかかった こうなるしかなかったと今でも思ってい M君から再びどうしようもない代物が

"どうしようもなさ。の落ち着き先









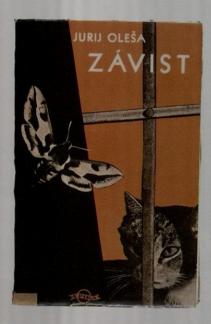
the czech avant-garde and czech book design: the 1920s and 1930s

An Exhibition drawn from the Emma Linen Dana Czech Avant-Garde Book Collection

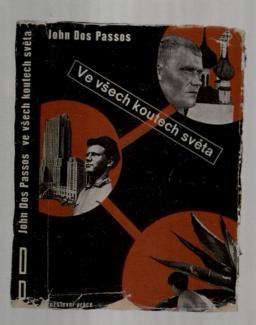
協力: ギンザ・グラフィック・ギャラリー

テキスト: 川端直道 Text: Naomichi Kawahata

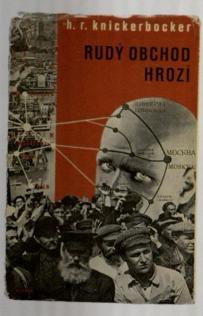
チェコ・アヴァンギャルド ブックデザイン 1920s-'30s



Iurii Karlovich Olesha Závist (Envy)
 Praha, Melantrich, 1936.
 Translated by T.S. Berczynski.
 Designer unknown
 Frontispiece by František Janoušek.



2. John Dos Passos Ve všech Koulech světa (In All Countries)
Praha, DružstevnÍ práce, 1935. Translated by Gerta Schiffová.
Volume 124 of the series "Živé Knihy A" (Living Books A).
Edition size: 4,000 copies.
Cover and binding design by Antonin Pelc
Typography by Ladislav Sutnar



3. Hubert Renfro Knickerbocker Rudy obchod hrozí (The Red Trade Menace) Praha, Česka graficka unie, 1932. Cover design by Josef Hesoun

チェコ・アヴァンギャルド ― ブックデザインの実験

1989年ベルリンの壁が崩壊し、チェコスロバキア、ハンガリー、ボーランドなど旧東欧圏への扉が開かれると、これらの国々で二つの世界大戦間に展開されたアヴァンギャルド運動に対する再評価が急速に始まった。1920-30年代、ロシア・ドイツの両大国に挟まれたこの地域は、ロシア・アヴァンギャルドやバウハウスといった近代デザイン運動から多大な影響を受けつつ、それぞれのユートピアを求めて独自の実験的なデザインを繰り広げた。なかでも中欧の地理的・文化的中心であったブラハを中心としたチェコ・アヴァンギャルドは、この地域において最も重要な地位を占めるデザイン運動であった。

今秋、ギンザ・グラフィック・ギャラリーで開催された「チェコ・アヴァンギャルド ブックデザイン1920s-30s」 展は、この運動を米国ファーレイ・デッキンソン大学図 書館が所蔵する約120点の書籍・雑誌のデザインから展 望する展覧会であった。

では、なぜブックデザインなのだろうか?

それはチェコのアヴァンギャルド運動が、文学界と密接な関係を伴って発展したからである。1920年10月, 1920年代のチェコのアヴァンギャルド運動において最も重要な芸術家集団「デヴィエトシル」がプラハで結成

された。そのなかには詩人ヴィーチェスラフ・ネズヴ ァル(1900-1958)や、1984年にノーベル文学賞を受賞し た詩人ヤロスラフ・サイフェルト(1901-1986), そして理 論面で中心的な役割を果たした評論家、建築家、グラフ イックデザイナーのカレル・タイゲ(1900-1951)が含ま れていた。1924年、タイゲとネズヴァルの二人は、チェ コ構成主義を代表する宣言文「ポエティスム」を発表した。 この宣言は「詩」を単に文学的な意味としてではなく 「純粋な美・遍在的な美の総称」と定義し、生活の中のあ らゆるものを「詩」に置き換えて美的対象にすることを 目的としたものであった。このような文学的要素を基 盤にもつデヴィエトシルの活動において、印刷媒体が 果たした役割は重要であり、とりわけブックデザイン の分野で革新的な実験が試みられた。非対称のタイポ グラフィ、ダイナミックな構成と繊細な罫線の対比、多 色刷りによる独特の色彩構成、「写真詩」と呼ばれた高 度なフォトモンタージュなど、ロシアやドイツとは一 線を画したデザインを確立した。デヴィエトシルが解 体した1931年以降、チェコのデザイン運動は機能主義 を軸に展開された。視覚情報の客観的な伝達と合理性 を追求したこの運動は、構成主義に変わる新たなデザ イン理論として国際的に展開されたが、ドイツでは1930

年代初頭のナチズムの台頭によって、はやくも挫折してしまった。しかしチェコにおいては、進歩的な出版社ドルジュステヴニー・ブラーツェのアートディレクターを務めたラディスラフ・サトナー(1897-1976)や、パウハウスで学んだズデニェック・ロスマン(1905-1984)により1930年末まで継続して試みられ、その端正なタイポグラフィは戦後のインターナショナル・スタイルにも少なからず影響を与えた。

このほかにも、ロシアに影響を受けたプロレタリア・デザイン、ヒトラーの弾圧から逃れてブラハへと亡命して活動を続けたジョン・ハートフィールド(1891-1968)のモンタージュ・デザイン、そしてデヴィエトシルから発展した「シュールレアリスト・グループ」による幻想的なデザインなど、多様なイズムが同時代のブックデザイン上で開花した。

1918年の共和国独立から、1939年のヒトラーのプラハ 入城までの約20年間、チェコで展開された前衛的なプックデザインとその実験的な精神は、デザイン界の古典である「ロゼッタ・ストーン」や「ケルムスコット・プレス」と同様に、我々が学ぶべき点の多い<20世紀の古典>の一例として記憶されるべきであろう。

川端直道グラフィックデザイナー

Zdeněk Rossmann

písmo a fotografie

v reklamě

ndex

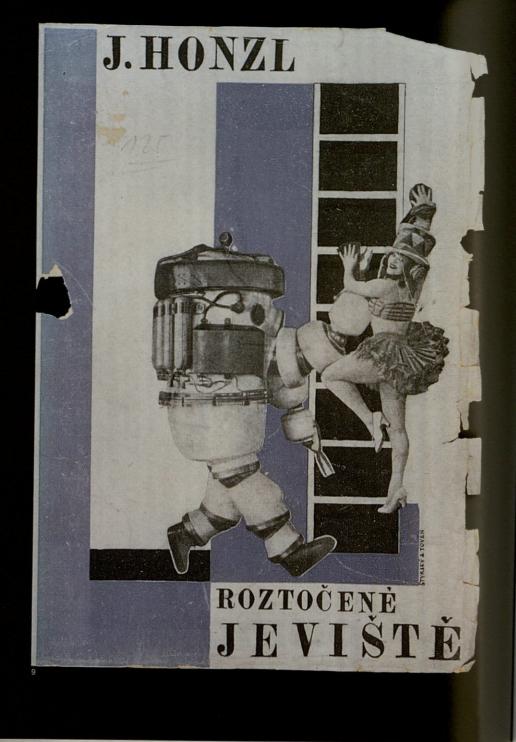
Zdeněk Rossmann
 Písmo a fotografie v reklamě (Typography and Photography in the Advertisement) Olomouc, Index, 1938. Design by Zdeněk Rossmann











5-8. Red. Revue Svazu moderní kultury Devětsil (Red: Review of the Union for Modern Culture Devětsil)

Edited by Karel Teige. Praha, Odeon, 1927-1931. Design by Various designers.

9. Jindrich Honzi Roztočené jevíště. Úvahy a novém divadle (The Unfolding Stage: Reflections on the Contemporary Theater) Praha, Odeon, 1925. Cover design by Jindřich Štyrský and Toyen Typography by Karel Teige

10. George Bernard Shaw
Drobnosti I (Triftes I)
Praha, Družstevní práce, 1930.
Translated by Alfred Pflanzer and Karel Mušek. Volume
15 of the series "Hry G.B.Shawa"
(Plays of G.B.Shaw). Edition size: 1,700copies.
Cover design and broography by Ledislay States. Cover design and typography by Ladislav Sutnar Drawing on title page by Zdeněk Kratochvíl

11. Nejmenś**i** dúm (The Smallest House)
Edited by Oldřich Starý and Ladislav Sutnar
Praha, Svaz československého díla, 1931
Introduction by Karel Herain and Oldrich Starý
Cover design and typography by Ladislav Sutnar

12. George Bernard Shaw

Obrácení kapitána Brassbounda
(Captain Brassbound's Conversion)

Praha, Břetislav M. Kika (an imprint of Družstevní
práce), 1932. Second edition.

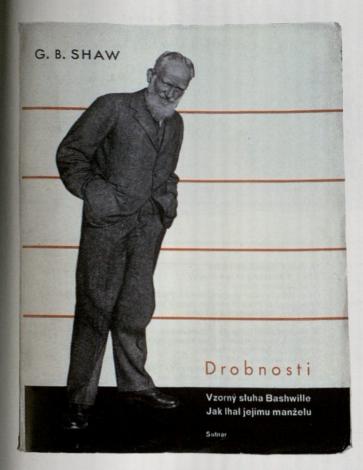
Translated by Vladimír Procházka and Karel Mušek.

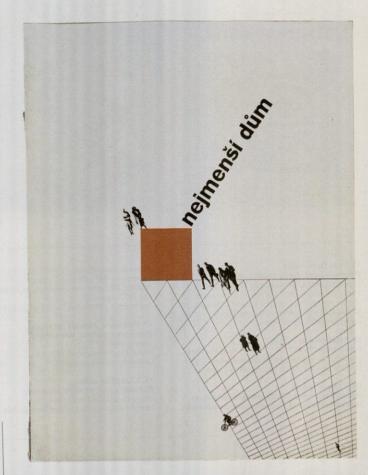
Volume 12 of the series "Hry G.B. Shawa" (Plays of
G.B. Shaw). Edition size: 1,700 copies.

Cover design and typography by Ladislav Sutnar

Drawing on title page by Zdeněk Kratochvíl

13. Žijeme 1931 Obrázkový magazin dnešni doby (Life in 1931: An Illustrated Magazine for the Present Day) Edited by Josef Cerman and editorial board Praha, Družstevní práce, 1931 Design by Ladislav Sutnar

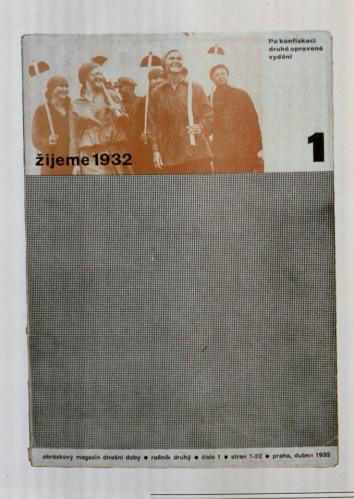


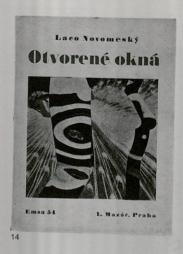


10 11

12 13











Vítězslav Nezval SEXUÁLNÍ NOCTURNO

Přiběh demaskovaně iluse

14. Laco Novomeský Otvorené okná. Tretia sbierka poesie (Open Windows: Third Poetry Collection) Praha, L. Mazáč, 1935. Volume 45 of the series "Edicle mladých slovenskych autorov" (Young Slovak Authors) Edition size: 2,000 copies. Cover design by Karel Teige. Cover design by Karel Teige

15. Karel Konrád Dinah Praha, Václav Petr, 1928. The first 25 copies were numbered and printed on hand-made paper. Cover design and typography by Karel Teige

16. Vítězlav Nezval Sexuální nocturno. Přiběh demaskované iluze (Sexual nocturne: A Tale of Illusion Unmasked) Plaha, Jindřich Štyrský, 1931. Edition size: 138 numbered copies. The first 10 copies were hand-colored by Štyrský The FDU copy is No.10 Typography and five illustrations by Jindřich Štyrsky

16

17. Panorama, Kulturni zpravodaj (Panorama: Cultural Newsletter) Various editors Praha, Družstevní práce, 1923-1942. Design by Various designers.

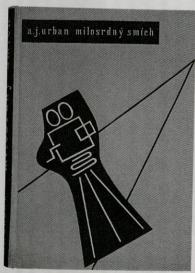
18. A. Jaroslav Urban Milosrdý smich (Merciful Laughter) Praha, Druzstevni prace, 1934. Design by Ladislav Sutnar and Antonin Pelc

19. Život II. Sbornik nové krásy 19. ZIVOT II. SDDTIIK NOVE KRASY (Life II. A Miscellany of New Beauty) Edited by Jaromír Krejcar Praha, Vytvarny odbor Umelecke Besedy, 1922. Cover design by Bedrich Feuerstein, Jaromír Krejcar,

Josef Šíma, Typography by Karel Teige

20. Moderní česká fotografie. Album desetí původních snimků (Modern Czech Photography: An Album of Ten Original Photos)
Praha, Národní práce, 1943.
Edition size: 50 copies. Introduction signed by Teige; each original photograph signed in pencil by the photographer. The FDU copy is No. 29, the only known complete portfolio in the United States.
Design by Karel Teige





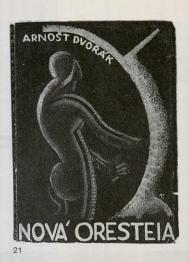
18

Karel Teige (カレル・タイゲ 1900-1950) 評論家、理論家、編集者、建築家、グラフィックデザイナー、フォトモンタージュ作家。1920年、芸術家集団デヴィエトシルの設立に創設メンバーとして関与し、1923年には詩人ヴィーチェスラフ・ネズヴァルと共に構成主義宣言文「ポエティスム」(第一宣言)、1928年「ポエティスム宣言」(第二宣言)を発表。1920年代を通して建築雑誌『スタヴパ』(1922-1938)や論評誌「レッド』(1927-1931年、図5-8) などの編集兼寄稿者として活躍。グラフィックデザイナーとしてのタイゲは、当初ドイッの雑誌『アクテティオン』からキュビズムと表現主義の影響を受けていたが、1922年以降は構成主義的な傾向を強め、1925年にインジフ・ホンズルと共にモスクワを訪問してロシア構成主義者たちと交流した。ネズヴァルの「アルファベット」(1926年、図23、24)と1928年に出版されたコンスタンチン・ビーブルの2冊の詩集におけるタイゲのタイポグラフィは、チェコ構成主義を代表するデザインとして国際的な評価を受けた。 表するデザインとして国際的な評価を受けた。 [図5-8, 9, 14, 15, 19, 20, 22-24]

100









21. Arnost Dvořák
Nová Oresteia. Tragedie o trech dejstvích
(The New Oresteia. A Tragedy in Three Acts)
Praha, Čin(press office and publishing house of the
Czechoslovak Legionnaires), 1923.
Cover design and three drawings by Jiří Kroha.

22. Konstantin Siebi S lodi jez dováží čaj a kávu. Poesie 1926-1927 (On the Ship Bringing Tea and Coffee: Poems 1926-1927) Praha, Odeon, 1928. Second edition.

Design and typography by Karel Teige.

23,24. Vítězslav Nezval
Abceda (Alphabet)
Praha, J. Otto, 1926
Edition size: 2,000 copies.
Photocollages and typography by Karel Teige
Photographs by Karel Paspa of dance compositions
by Milča Mayerová

Residuk cemulach te piinovad Fri links tähti niu voj zamisti Trisgratiore nickoli kisi Nint'i Trij links kaidakstejne prasidrij



hovizontála I vertikální smer
Iniverse vi čes vákná řívní jejich
Studenti říkají ti dyboře uhloměr
Dělníko svitis jak kampicka na kolejích

创发。全代表144本个行为

Ladisav Sutnar (ラディスラフ・サトナー 1897-1976) グラフィックデザイナー、インダストリアルデザイナー、展示デザイナー。 1923-1939年 プラハの公立印刷工芸高校で教鞭をとり、1932年からは学 長を務めた。1929年プラハの出版社ドルジュステブニー・プラーツェ社 のアートディレクターに就任。端正なタイポグラフィ、斜軸をもちいた構成 フォトモンタージュを多用したブックデザインにより、1930年代の機能 主義を代表するデザイナーとして国際的な評価を受けた。[図2,10-13,18]

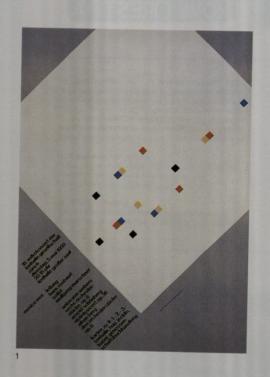
Zdeněk Rossmann (ズデニェック・ロスマン 1905-1984)
グラフィックデザイナー、建築家、舞台デザイナー。社会主義建築家同盟のメンバーで、デヴィエトシルのブルノ支部を代表する同人の一人。
1924-1927年ブルノ工業大学で学ぶ。国際的な前衛評論誌「フロンタ」
(1927年)で小文字のみを用いた機能主義的なタイポグラフィとレイアウトを展開。1929-1930年ドイツのデッサウ・バウハウスに留学し、1938年『広告におけるタイポグラフィと写真』を著わし、1920-30年代のモダン・タイポグラフィと写真による広告表現の体系化を試みた。[図4]





「チェコ・アヴァンギャルド・ブックデザイン 1920s-'30s」展は1996年10月4日から26日まで、東京のギンザ・グラフィック・ギャラリーで開催された。なお、同展の構成は平野甲質、川畑直道、島多代の各氏が担当した。

Good-Bye JOSEF MÜLLER-BROCKMANN







「昔ながらの友, ブロックマンの死」 亀倉雄策

突然のようにヨセフ・ミューラー=ブロックマンの死を知らされた。ショックでしばらく信じられなかったが、夫人の吉川静子さんからの知らせだから信じるというか、納得したとしかいいようがない。

今年の3月、画家である吉川静子さんの個展が 恵比寿の現代彫刻センターのギャラリーで開催 された。この時はご夫婦が一緒に日本に来ると いうので期待していたが、吉川さんだけだった。 吉川さんにブロックマンが何故来なかったのか と聞いたら、「主人は丁度体調をくずしたので ……」という簡単な答えだった。私はその言 葉に一抹の不安が胸をかすめたが、今考えると、 それが現実になったのかもしれない。

申すまでもないことだが、ヨセフ・ミューラー =ブロックマンはスイスを代表する抽象パター ンのポスター作家である。そして世界を代表す る作家でもある。彼のポスター作品のほとんど は音楽に関係したものだった。だから音楽の持 つリズムとかハーモニーを形象化するのだが、 その作品の数学的な構成でありながら動きのある表現には感動する。しかも流動的な効果をあげながら、その厳しい造形は一分のスキもない。 更にブロックマンの色彩に対する洗練さは天才的だと思う。それは音楽会の曲目と色彩とを一致させるからである。

1960年は私が日本デザインセンターの創立に参加した年であるが、その年か翌年か忘れたがヨセフ・ミューラー=ブロックマンが3ヵ月以上も日本に滞在したことがあった。その頃ほとんど毎晩のように銀座のバーで彼と会っていた。彼が日本のどこを気に入ったのか知らないが、とにかく日本をひどく好きになっていた。あんまり日本が好きで、住むところも畳と障子といった日本風の下宿屋だった。そこで彼は毎日日ブロックマンがだんだん痩せてきた。私が心配してステーキを食べに誘っても、日本食以外は食べなかった。このままでは彼の身体が衰弱するので、もう日本をはなれてスイスに帰った方がいいと

何度もすすめてやっとスイスに帰ったが、やっぱり栄養失調で入院してしまったという。栄養失調で入院してしまったという。栄養大調で入院するほど日本が好きだったのか、吉川静子さんと結婚したのはそれからすぐ後である。ブロックマンのデザインは哲学的だと私は思っている。彼の構成は一分のスキもない厳しさで、時として禁欲的でさえある。だから精神的な高さを感じるのだ。その点日本の禅の境地に似ているのは、日本を好きだったことにも原因しているのだろうか。ブロックマンは決して派手な色彩で配色するということはない。色彩を抑えて、必要な分量だけで見事な効果をあげている。だから彼の作品は清涼とした凛然たる格調の高さがある。

ブロックマンが亡くなったことで世界の抽象デザインの燈が消えたような淋しさである。 しかも私にとっては、昔ながらの友をソール・バスに続いてまた1人失ってしまった淋しさでもある。

- 1. "The 19th Folk-Concert," concert poster,
- 2. "I Vispri siciliani," concert poster, 1971
- 3. "Erich Schmid/Clara Haskil," concert poster,
- "Mozart , Messe in c-moll,"conccert poster, Tonhalle Zürich, 1973
- 5. "Hans im Glück," concert poster, Opernhaus Zürich, 1972
- "Erich Schmid/Clara Haskil," concert poster, 1954
- "shizuko yoshikawa," exhibition poster, Brandenburg Art Collection, Germany, 1994
- 8. "j. müller-brockmann," exhibition poster, Brandenburg Art Collection, Germany, 1994
- "Juni-Festwochen (June Festival) , Zürich 1967," concert poster, Tonhalle-Gesellschaft, 1967
- "Joseph Haydn, Nelson-Messe/Paul Huber Hymnus," conccert poster, Tonhalle Zürich, 1968
- 11. "W. A. Mozart/de Boer-Reiz-Qualtett," concert poster, Tonhalle Kleiner Saal, 1953
- "the architectonic in graphic design
 the concert poster series of
 josef müller- brockmann," exhibition poster.
 Reinhold-Brown Gallery, New York, 1980



Opernhaus
Zurich
Hans im Glück
Die Reise nach
Pitschiwaya

Friedwerder
Hank von frei bereit
H



j. müller-brockmann

ji. müller-brockmann

piakala 1940-81

susskildung son (2 05. bis 03. 02 1994

nt emellikung son (20 05. bis 03. 02 1994



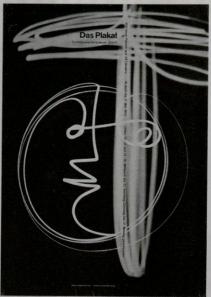




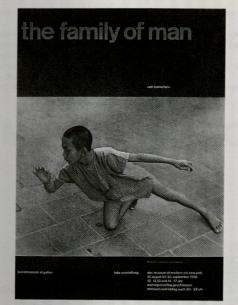


Visuals from Ruki Matsumoto Collection, Batsu Art Gallery 図版提供: パツ・アート・ギャラリー 松本瑠樹コレクションより

1



13. "Das Plakat," exhibition poster, 1953

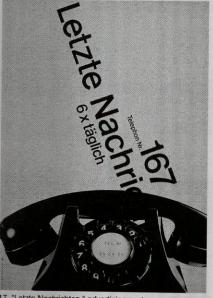


14. "the family of man," exhibition poster, 1958

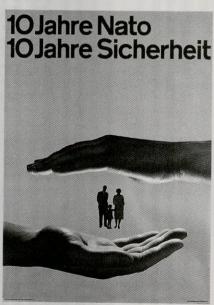


15. "Werner Bischof," exhibition poster, 1958





"Letzte Nachrichten," advertising poster, Entwurf Fred Troller



18. "10 Jahre Nato, 10 Jahre Sicherheit," 10th anniversary poster of Nato, 1959

JOSEF MÜLLER-BROCKMANN

- 1914 Born on 9 May in Rapperswil. Childhood in Rapperswil, Schmerikon and Uznach.
 1930 Completed secondary school in Rapperswil. Started apprenticeship as a graphic designer in Zürich.
 1932 Broke off apprenticeship and audited courses by Ernst Keller and Alfred Willimann at the Zürich School of Arts and Orafts.

- After and Affred Willimann at the Zunch School of Arts and Crafts.

 1934 Work as a free-lance designer and illustrator in Zürich.

 1937 Member of the Swiss Werkbund.

 1938 Designed the pavilion of honor for the Swiss unversities and the "Physics and Medicine" and "History of Swiss Art" sections for the 1939 National Fair.

 1939-1945 Active service as a lieutenant in the Swiss army.

 1945 After the war continued to work as a designer, concentrating on exhibition design and illustration.

 1950 Gradual move away from illustration to objective-constructive design. First typographical posters for the Tonhalle, Friendship with Samuel Hirschi, secretary of the Tonhalle, led to years of collaborative work (until 1972).

 1951 Member of the Alliance Graphique Internationale.

 1952/1953 Left the theatre to concentrate on graphic design. Expanded his studio. First poster successes with "Watch that Child!" for the Swiss Automobile Club and poster series for the Zürich Tonhalle.

 1956 Spoke at the International Design Conference in Aspen, Colorado.

- Spoke at the International Design Conference in Aspen, Colorado.

 Appointed graphic design teacher at the Zürich School of Arts and Crafts. Successor to Ernst Keller. Founded the magazine "New Graphic Design" (Neue Grafik)with Richard Paul Lohse, Hans Neuburg and Carlo Vivarelli (18 issues appeared through 1965,published by Verlag Otto Walter, Olten).

- 1960 Left the Zürich School of Arts and Crafts. Spoke at the World Design Conference in Tokyo.
 1961 Published: "The Graphic Artist and his Design Problems."

- 1961 Published: The Graphic Artist and his Design Problems."
 Visiting lecturer at design schools in Tokyo and Osaka.
 Returned to Europe by sea.
 1962 Advisor and designer for Rosenthal-Porzellanwerke,
 Selb, Germany, and consultant and designer for Max
 Weishaupt GmbH, Schwendi, Germany.
 1963 Visiting lecturer at the Institute of Design in Ulm.
 1964 Several pieces of new music commissioned in her honor.
 Designed the "Education, Science and Research" section
 for the 1964 Swiss National Fair.
 1965 Founded "Galerie 58" in Rapperswil with Eugen and Kurt
 Federer. Renamed "galerie seestrasse" in 1974 and run
 by Brockmann alone until 1990.
 1967 Appointed design consultant to IBM Europe (until 1988).
 Founded the Müller-Brockmann & Co advertising agency
 with three other partners. Advertising and design work for
 industrial, commercial and cultural clients. Married artist
 Shizuko Yoshikawa.
 1971 Published two books "Geschichte der visuellen
- Published two books "Geschichte der visuellen Kommunikation" (A History of Visual Communication). "Geschichte des Plakats" (A History of the Poster),
- co-author Shizuko Yoshikawa.

 1974 Produced a sculpture for the Interkantonales Technikum in Rapperswil.
- 1976 The partners in Müller-Brockmann & Co. split up. MB continues with the agency until 1984. Consultancy and design work for clients including Olivetti, Swiss Raliways,
- "Transatlantik"magazine, etc.

 1978-1983 Jury member for the German "Gute Form" prize,

- 1981 Published "Grid Systems in Graphic Design".
 1985 Worked on the exhibition "Sprache der Geometrie heute-Suprematismus, De Stijl und Umkreis" (The Language of Geometry Today Suprematism, De Stijl and their Circles) in the Kunstmuseum, Bern.
 1985/8/194 Won the Brunel Award, London / Vienna
- Washington DC.
 1986-1993 Touring exhibition of posters in North, Central and South America.
- 1987 Awarded the Gold Medal of the Canton of Zürich 1988 Nominated "Honourable Royal Designer for Industry" by

- 1988 Nominated "Honourable Royal Designer for Industry" by the Royal Academy of Art, London.
 1989 Published "Fotoplakate Von den Anfägen bis zur Gegenwart" (Photographic Posters From their Origins to the Present Day), co-author Karl Wobmann.
 1990 Awarded the Middleton Award of the American Center for Design, Chicago.
 1990/91 Lecture tour of the USA and Colombia.
 1993 Death of son Andreas.
 1993 SBB(Swiss Railways) project awarded the Swiss Design Prize. Traveled to Japan and Israel.
 1994 Touring poster exhibition in eastern Germany, including work by Shizuko Yoshikawa. Euro-Design Award, Ostend, Belgium.
- 1995 Trip to Beijing via Kashgar, following the ancient silk route. Paper presented at the International Graphic Design Conference, Cancun, Mexico. Second journey through Mexico, visiting ancient sites.

 1996 The end of August, passed away.
 Lived and worked in Unterengstringen near Zürichtill his

Death of My Old Friend, Brockmann

Yusaku Kamekura

It was such sudden news. When I was notified of the death of Josef Müller-Brockmann, I was so shocked that I could not readily believe it. I had to make myself believe it only because the person who delivered the news was his wife, Shizuko Yoshikawa.

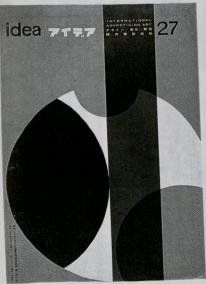
This March, Ms. Yoshikawa, a painter, had a solo show at a gallery in Ebisu. I was expecting to see the couple again in Japan, but Ms. Yoshikawa came alone. Asked why Brockmann did not accompany her, she simply replied, "He's just under the weather...." Her words made me slightly uneasy. Looking back, that worry became reality.

Without argument, Josef Müller-Brockmann is the premier abstract pattern poster artist of not only Switzrland, but of the world. Most of his works were music-related: He put musical rhythm and harmony into graphics. The mathematical composition and dynamic expression of his art moves people's hearts. His artwork has an austere nature that is tempered by its fluidity. Also, his refined sense of color is so brilliant that I should say he was a genius. He harmonizes the program of a concert with a color scheme.

In 1960 when I was taking part in the foundation of the Nippon Design Center, Brockmann stayed in Japan for over three months. He and I met almost every night at a bar in Ginza. I did not know what part of Japan intrigued him but he was very enthusiastic about this country. Brockmann was so much in love with Japan that he stayed at a Japanese-style boarding house with tatami mats and shoji screens. He ate Japanese food here day after day. I noticed that he was losing his weight because of the diet. Concerned, I asked him out to eat steak but he insisted on eating only Japanese food. Finally he accepted my persistent suggestion that he return to Switzerland before his health deteriorated too far. Upon returning to his homeland, this artist was hospitalized for malnutrition. He loved Japan so much that soon after this incident he married Shizuko Yoshikawa.

I believe that Brockmann's design is philosophical. His composition is so thorough at times to the point of stoicism. That is why his works have the feel of a highly elevated mind. In this sense, his work reminds me of Zen, which may have been derived from his love of Japan. He never used a flamboyant color scheme. Brockmann achieved wonderful effects with just the right amount of controlled tones of color. The results were stylish and awe-inspiring.

I am saddened by Brockmann's death as I feel the light in the abstract design world has been extinguished. Also, I am saddened by the departure of another good old friend of mine, as I mourned the recent passing of Saul Bass.



19. Cover design for IDEA magazine No. 27, 1958

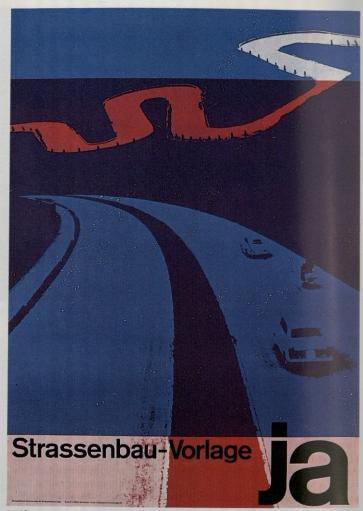
Oper von Luigi Cherubini Erstaufführung in Italienischer Sprache Samstag, 19. Februar 1972 20 Uhr Musikalische Leitung: Nello Samit Inszenierung: Günter Roht Bühnenbild/Kostüme: Max Röthilsberger Chöre: Hans Erismann Musikalische Leitung: Nello Samit Inszenierung: Günter Roht Bühnenbild/Kostüme: Max Röthilsberger Chöre: Hans Erismann Glade Peterson, Aurelian Neagu, Gejza Zelenay

20. "Anthologie de Musique," concert poster, Opernhaus Zürich, 1972





22. "Fly Viscount, Fly BEA," advertising poster, British European Airways



23. "Strassenbau - Vorlage,ja," political poster

















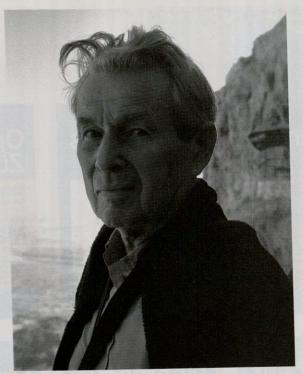


Photo: Sizuko Yoshikawa

ヨセフ・ミューラー=ブロックマン

1914 スイスのラパスビルに生まれる。チューリッヒ応用美術学校で2 年間学んだ後、1936年フリーのグラフィックデザイナーとなり、 チューリッヒにスタジオを設立。

1939-52 スイスでのEXPOのデザインや、ヨーロッパの都市やニューヨ ークで数多くの展覧会やステージデザインを手掛ける。

1957-60 チューリッヒ市立応用美術大学で教鞭を執る。その後ウルム、 東京、大阪、オタワ、アリゾナ州トゥーソンの美術大学などで 講義をする。

1958-65 国際雑誌「ノイエ・グラフィック」を創立、編集に携わる。

1964 ローザンヌで開催されたスイス万博の科学館をデザインする。

1965-93 コンストラクティブ・アート専門のギャラリーを運営。

1967 IBMヨーロッパ地域のデザイン・コンサルタントに就任。

1956-95 この間に41回の個展を世界各地で開催。

1987-94 スイス文化財団後援の北米、中南米巡回個展。 スイス・ポスター最優秀賞を多数受賞。

1985 「スイス鉄道デザイン・マニュアル」のデザインに対し1985年ロンドン、1987年ウィーン、1994年ワシントンDCにてブルネール賞を受賞。

1987 チューリッヒ州から文化功労者に贈られるゴールド・メダルを授与。

1988 ロンドン王立美術アカデミーから「ロイヤル名誉工業デザイナー」 の称号を受ける。

1990 シカゴのアメリカン・デザイン・センターからタイポグラフィー分野の貢献に対しミドルントン賞を受賞。

1993 スイスデザイン賞受賞。

1994 ベルギーのユーロ・デザイン賞受賞。 作品集「ヨセフ・ミューラー=ブロックマン:造形者」を出版。

1996 8月末日, 永眠。

主な著書として、「グラフィックデザイナーとデザインの問題」(1960年)、「ボスターの歴史」(1960年)、「ビジュアル・コミュニケーションの歴史」、「グリッド・システム」(1982年)などの7冊がある。

- 24. "Bschüsssig," advertising poster for a pasta brand, Gebr. Weilenmann A.G.,
- "Juni-Festwochen (June Festival) ," concert poster, Tonhalle-Gesellschaft, 1950
- 26. "DAS SCHWEIZERISCHE B NENBILD," theater poster
- 27. "Dada," exhibition poster, Art Museum of Zürich , 1994
- 28. "für eine bessere neue welt," exhibition poster, 1984
- 29. "Das Unfallbarometer am Paradeplatz meldet: ," announcement poster
- "sprache der geometric," exhibition poster, Art museum of Bern, 1984
 "hans arp/hugo ball," exhibition poster, Art Museum of Zürich, 1986
- "akari Lampen auss Japan," exhibition poster, Zürich Museum of Arts and Crafts, 1975
- 33. "Ein Stern geht auf aus Jakob," concert poster, Opernhaus Zürich, 1973
- 33. "Ein Stern gent auf aus dakob, Cornect poster, Opermander 34. "der Film," exhibition poster, Zsürich Museum of Arts and Crafts, 1960



32



33



































108





Diensthundeschau

52

51. "acier et fer - Stahl und Eisen, acifer, " advertising poster 52. "Diensthundeschau," poster for an event,1974 53. "das freundiche Handzeichen" (The Friendly

Hand - signal), campaign poster,

Swiss Automobile Club, 1955

54. "schützt das kind!" (Watch that Child!), campaign poster, Swiss Automobile Club, 1953

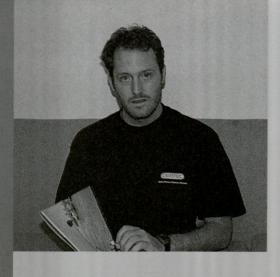
55. "Cycliste - Attention, Attention - Cycliste,"

campaign poster, Swiss Automobile Club, 1958
56. Üerholen...? Im Zweifel nie!" campaign poster,
Swiss Automobile Club, 1957









「キディランドの方が大きなことを言っている人たちより、 実生活への影響では、アヴァンギャルドだよね」(笑)

マイク・ミルズ

with MIKE MILLS

話題のクリエイターと同時代のトピックをフランクに語 り合うために誕生したこのシリーズ"IDEA TALKS"。最 初のゲストとして登場していただいたのは、アメリカの オルタナティブ・シーンを担う新たなタイプのグラフィ ックデザイナー,マイク・ミルズである。ソニック・ユ ース, ビースティーボーイズ, ジョン・スペンサー・ア ンド・ブルース・エクスプロージョンをはじめとした音 楽関連の仕事はもとより、X GIRL、スケートボード・メー カーのシュープリームなどファッション分野での新たな 勢力のための数々のデザインを手がけている。彼のグラ フィックスの最大の特徴は特定のスタイルにとらわれて いないこと。変幻自在のヴィジュアルの振幅は、新たな デザイン・シーンの到来を予感させる。彼はどのように、 そしてなぜ、こういった従来にない活動を行なうように なったのだろうか。個展を機に来日したマイク・ミルズ 自身に, 少々「辛口」に真相を語ってもらった。

インタヴュー:アイデア編集部(Y)

MIKE MILLS (マイク・ミルズ)

1966年アメリカ生まれ。サンタ・バーバラで育ち、高校時代、パンク・バンドとスケートボードに明け暮れる。ニューヨークのクーパー・ユニオン卒。マイク・ミルズ・ダイバーシファイド主宰。ディーライトのジャケットデザインをはじめ、そのデザイン活動はファッションや映像にまで及ぶ。96年5月渋谷のパルコギャラリーで開催された「BABY GENERA-TION」展のプロデュースや同名の書籍

「BABY GENERATION」(リトルモア
刊)のデザインは彼によるもの。最近ではMo WaxレーベルからLPジャケット・サイズの(ピンナップのための)ヴィジュアル集「マイク・ミルズ・ヴィジュアル・サンブラー」をリリースした。今回の来日は、彼のツアー形式のソロ・エキジビション「マイク・ミルズ・ヴィジュアル・サンプラー・ツアー」の巡回展(青山Kyozonで開催)のため。

Special Thanks: Nakako Hayashi Takashi Homma HK Productions

一一われわれが日本からマイクやマイクが 属すると思われるジェネレーションの動き を見ていると、自分のしたい仕事を、それ も商業的成功をあまり強く意識しないでや っているように感じる。ナチュラルに見え るんだけれども……。

Mills: 僕にはデザイナーの友達がいないん でよくわからないんだけれど……。(笑) 実を言うと、僕自身デザイナーにしがみつ く気はないし、若いデザイナーのグループ なんかにも特に参加していないんだ。僕か ら見ると、アメリカの30歳以下のデザイナ ーたちは、多くのグループに分かれている ように思える。そのうちのいくつかは完全 にデザインをコマーシャルなビジネスとし てやっているし、コマーシャルな成功を目 的としているように見える。僕も含めて、 デザイン・スクールを出て、デザイン雑誌を 見ているような若いデザイナーたちは、ス タイルがアップデイトされているというだ けで、あまり古いタイプのデザイナーとの 違いがないような気がする。

―マイク自身は自分のことをどう思って

いるの?

Mills: 僕はグラフィックデザインをつくっているんだけど、デザイン界には興味がないんだ。僕が興味あるのはデザイン以外のもの全て。(笑)

つまり、僕は世の中に多くのエネルギーを 生み出すためにグラフィックデザインを利 用しているということなんだ。デザイナー というより僕は、パブリック・エンターテイ ナーやコメディアンに近い。そう、ヴィジ ュアル・コメディアン!(笑)

のっけから、マイクは変化球を投げてきた。 なかなか一筋縄ではいかない、半ば屈折した ような彼のトークは、グラフィックスでも見 られるような彼自身のトリックスター的性格 を物語るものだとも思う。読者も、その真意 は何かを注意していただきたい。

一でも、マイクの活動を見ていると、デ ザインする際に織り込まざるをえない規則 やルール, 自らのスタイルにすら強く束縛 されていないように見えるんだけど……。 Mills: ほとんどのデザイナーが一つのスタ イルで活動しているよね。それを僕はシグ ネチャー・スタイル (サインのようなスタイ ル)と呼んでいるんだ。古い人も新しい人 も同じようにやっているこのやり方は「見 え方」が全てで他に何もない。でも、僕に とっては,全ては「アイディア」なんだ。 僕のつくるものはアイディアによってスタ イルが変化しているんだ。スタイルはどん なものでもいい。一つの仕事が終わった後, 次に全然違うスタイルのヴィジュアルをつ くることは僕にとっては問題じゃないんだ。 だから自由に見えるんじゃないかな。僕は あまりまじめにやってないんだ。(笑) 一つのスタイルや一つのアイディアにとら われることは好きじゃない。多様な方がい いよ。

マイクの活動を支えているのは、アイディアである。それにかたちを与えるのがデザインで、だからこそ様々なスタイルがある、ということなのだろう。日本でも最近になってクリエイターがある一つのスタイルに執着することに対しての議論が一部で起きている。

――日本でもよく話題になるんですが、クリエイターが一つの型に執着してしまう状況がある。そういうスタイルは、同時代性もさることながら、その人の個性やパーソナリティと程遠いところにあったりするんだけれど、それについてコメントは?

Mills: デザインは単なる仕事, サービス業だと思っているクリエイターが多いから,

それはパーソナリティや個性とは関係ない わけなんだ。つまりデザイン=ビジネス, ということ。

僕は、自分のやり方を変えなければならなかったり、商業的なことばかりを気にしなければならない大きなクライアントの仕事をしていなくて本当にラッキーだったと思う。 僕はほとんど友達のために仕事をしている。 それが僕の性に合っているし。

― ビースティーボーイズやX Girlといった アメリカのオルタナティブなシーンを支え ているクライアントのために仕事をしてい ますよね。

Mills: バンドのために仕事をするのはいいことだよ。彼らは僕のパーソナリティや、僕が何に興味があって、何がしたいかを知っていて、割と自由に仕事をさせてくれる。まあ、僕がしたいのはMoWaxから出したヴィジュアル・サンプラーのようなクライアントがないグラフィックアートなんだけれどもね。(掲載のヴィジュアル参照)

音楽の話が出てきた機をとらえて、彼の中で、 異なった分野での表現活動がどのように彼の デザインと関係し合っているのかを聞いてみ たくなった。

――最近は注目の日本人女性2人組のバンド、 チボ・マットのメンバーたちなどとバター08 というユニットで音楽活動も始めましたね。 音楽とあなたのヴィジュアルには何か響き あう関係がある?

Mills:正直に言うと今までそういうことは考えたことがなかった。音楽はグループのために、みんなでつくり上げていくので、僕一人でやるグラフィックスの仕事とはかなり違うと思う。グラフィックは、そのバンドのために何が必要かを僕が一人でヴィジュアルに翻訳してやるんだけれど、バンドではみんなでつくり上げるから。でも、バターはいろいろジャンルの音楽をやっていて、いろいろなテイストを持っているからいいと思うんだ。みんながやりたがらない、あるいはダサいなんて思っている音楽をやるのは大好きだよ。カントリー&ウェスタンなんかをね。デザインでも、みんなの期待を裏切るグラフィックをやってみたいし。

カントリー&ウェスタン!? 音楽同様、彼はよい意味で裏切り続けるデザイナーである。それが、これほどまでに多様なスタイルを生みだしえた背景の一つだ。分裂にも似た「多様性」は彼を理解するときのキーワードと言えるだろう。また、自分のヴィジュアルを称して"Just Wrong" (正しくない) と彼はよく語るのだが、人々の期待をよい意味で裏切って、少

しズラすこと、クレージーであることは彼に とっては楽しみのようだ。これも多様性とい う文脈の中で理解できる。

―マルチ・アクティビティというか、マルチテイスツ(このインタビューの際に思いついた和製英語)というか……。

Mills: マルチテイスツって単語はいいね。 これからそれを使わせてもらうよ。(笑) 日本もそうだと思うけど、デザイン・スクー ルでは、ある種のグラフィック・テイストを 学ぶわけだよね。先生たちはそこでグッド テイストを守ろうとして教育する。アメリ カのデザインの先生やデザイン誌は,グッ ドテイスト、そしてモダニズムを守ろうと しているんだ。彼らはテレビや自動販売機, 雑誌などのポップ・カルチャーを敵視して, 全てのものを美しくしようと強いているよ うに見える。僕はむしろ悪趣味なものも含 めて多様であることが大切なことだと思うよ。 -最近はアメリカのデザイン・シーンもい っそう多様化しているように見えるんですが、 マイクはその中にいてどう思う?

Mills: 最近有名人となった若いデザイナー の多くは、古いデザインのリーダーを好き ではないし、彼らが言う「グッドテイストを 守る」というせりふも好きじゃない。こう いう若いデザイナーの多くは、モダニズム は個性がなくて, グッドデザイン, グッド テイストであることを強いるのでダメだ, 感情、個性、クリエイティヴな魂をアーテ ィストのように表現するのがいい, と語っ ている。でも、僕がやりたいことはそうい う人たちとも違う。僕にはアイディアがあ って、かたちにしたいことがあるけど、そ こで僕は自分自身の個性やクリエイティヴ な魂なんかについては考えたりしない。も ちろん僕のエモーションとは遠いところに ある。そういうことはロマンティックなこ とだよ。僕はそんなにロマンティックじ ゃない。(笑)

あまりこれは一般的には言えないかもしれないけれど、モダンはダメだという彼らの議論では、彼らが「クリエイター」と言う時、それはアーティストと変わらない響きがある。でも、僕自身はもっとヴィジュアル・エンターティナーというのが自分にはふさわしいと思っている。僕は決して自分のやっていることに対してロマンティックじゃない。僕はもっとコメディアンに近いよ。

話が深まってきて、彼が考えていることの輪郭がおぼろげながらにつかめるようになってきた。彼自身の感覚では、自分のやっていることはどういうボジションにあると感じているのだろうか。

――モダニズムそして最近アメリカで隆盛 しているポストモダニズムの流れどちらに もこだわっていないということ?

Mills: 僕はモダニズムとそれがつくり出したデザインの原則には反発を感じている。 モダニズムについてはもう飽きちゃったというのが本音かな。

でも、もう一方で行きすぎのポストモダンにも反発しているんだ。どちらとも大げさにものを言い過ぎるよ。結局、どっちも信じていないということかな。僕は辛口のヴィジュアル・コメディアンだから。(笑)

哲学ばかりが語られすぎる。この手のおしゃべりはもういいよ。

いずれにしても,こういった議論でのデザイナーのトークはちょっと大げさすぎる。 リアリスティックになったら,そんな大げ さな考え方はもてないはずだけど。

デザイナーのものの考え方を語るものは実 際の制作物以上のものはないんだ。でも, デザインがつくり手の手を離れたら, いろ いろな人がそれに対していろいろなことを 考えるのは自然だし、そういうもの(デザ イン) に大げさな考え方を込めたりしてコ ントロールしようとするのはばかげている と思う。人々の考え方を変化させたり、驚 かせたりするのは好きだよ。でも、そうい うことを言葉で説明したりするのが僕の仕 事とは思わない。もしも、僕のやっている ことが何となく革新的, アヴァンギャルド に見えるとしたら、グラフィックスがグッ ドテイストじゃなくて、ちょっとズレてる 感じだからだと思う。自分の作品が革新的 だなんて言えないよ。(笑)

ポストモダンを標榜する人たちの多くは、 自分たちがアヴァンギャルドであるという ことを愛しているし、それを自分のアイデ ンティティだと思っている。そして、自分 がどれだけアヴァンギャルドかを語りたが るけど、それはマッドなことだと思う。多 くの人が自分はアヴァンギャルドだって簡 単に言い過ぎるよ。

それはスケーターが「俺はタフでクレージーだ」って言うように。でも、実際にはそんなに多くの人がタフでクレージーで、物事を変えていっているわけじゃない。

僕からすれば、ポストモダンだって言っている人たちは本当にアヴァンギャルドじゃない。彼らが何かを大きく変えたとも思わない。彼らは新しいデザインのメインストリームなんだよ。

僕の友達で20歳のヤツがいて、スケートボード会社のためにデザインをしているんだけど、彼は有名なデザイナーの名前や仕事、彼らがどんな人たちかなんていうことは全然知らない。デザイン雑誌も見たことがな

いし、もちろんデザインスクールにも行っていないんだけど、彼はいろいろなものを自分の目で見て、その中からいろいろなエレメントをチョイスしてやっている。こういった人たちこそアヴァンギャルドだよ、彼らはノーマルなルーツを持っていないんだから。もしデザインにおいて新しいジェネレーションが生まれているとしたら、こういう連中のことだと思う。メインストリームの人じゃなくてこういった人たちがデザインを変えていくんだよ。「デザインはこうあるべきだ」なんて考えたこともないし、ADCやAIGAなんて全然知らないし。(笑)

「見え方」だけで、真に革新的なのか。それは世の中の流れを変えているのか。そう考えると、何もそれはポストモダンやモダンといった次元でなく、より大きくとらえても、今のグラフィックスの無力さを改めて感じてしまう。それよりも、マイクが自分の仕事について語る「グラフィックスを見た人、手にした人がちょっとした喜びを感じるもの」――ヴィジュアル・エンターテイメントの方が説得力があるようにも思える。ここから続くトークもマイクのそんな姿勢を反映している。

──マイクのデザインはよくジャパニージー(Japanesee),つまり日本人ぽいって形容されます。アメリカ人の目からすればどこかヘン,ファンシーでキッチュだったりするものをデザインの中のエレメンツやモチーフとして取り上げていますが、日本に実際に来て、そういうグッズなどに触れた印象は?

Mills: キディランド (玩具店) にあるファン シーグッズなんかを見ると、確かに子供の ためにファニーにできているんだけど、日 頃僕がアメリカで触れているものに比べて, 実際デザインが繊細になされている。キデ イランドで見たレターセットなんかも封筒 に描かれたキャラクターが、便せんでは、 違ったアクションをしていて、それぞれが 連動していたりする。そこにはいろいろな アイディアが仕掛けられているんだ。子供 向けなんだけれどデザインもいいし。僕は こういったちょっとしたアイディアが好き だよ。そういうものを扱っているキディラ ンドの方が大きなことを言っている人たち より、実生活への影響では、アヴァンギャ ルドだよね。(笑)

一こういった匿名的なデザインで、身近においておきたい、とっておきたいって思うものが好き?

Mills: そう。でも、今僕が東京にいるのは、 自分の展覧会のためで、そういう立場を楽 しんじゃったりしているから、それはデザ インでの有名人ということだよね。だから ちょっと矛盾するけれど……。

アメリカでは、デザイナーは日本ほど尊重 されていないんだ。でも、デザイナーがや っていることは視覚的な部分でとても大き な役割を果たしている。デザインは自分の 第二の肌のように、自分たちの身の回りの 環境をつくっている。普通の人たちももっ と知らなくちゃ。

でも、それは名前がブランドになっている デザイナーの仕事についてっていうことじ ゃないんだよ。

やっぱり僕は少し矛盾しているね。日本では、 アメリカ以上にデザイナーが若い子に人気 があるようだし。正直言って、そういう状 況を僕は手放したくない。(笑)

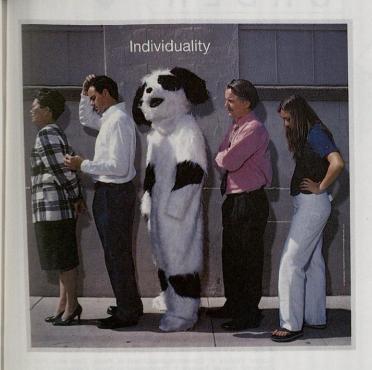
一クライアント・サイドはあなたのやり方をどう見ている?

Mills: がっかりしたのは、一つのスタイル、つまり、シグネチャー・スタイルのようなワン・パターンの仕事にクライアントの多くがお金を払いたがること。デザイナーにとって、それをするのは簡単なことだよ。僕がやったビースティボーイズのアルバム・ジャケットやX GirlのTシャツを見て「それと同じようにやってよ」って言ってくる人が多い。僕はたくさんの人がそういう仕事を好きなのは知っているし、それをするとみんな喜んでくれるのはわかっているんだけど、僕はそれがいやで、二度と同じ仕事はしたくない。そういうものをつくることがさけられない場合もあるけれどね。

一だからあなたはみんなが思っている予想をいい意味で裏切り続けている……。(笑) Mills: ちょっとズラして、僕に対するみんなの期待をいいかたちで裏切っていきたい。人の期待を裏切っていくのは楽しいことだよ。(笑)

クールである、という形容がいいのかどうかわからないが、よく見える目を持ったクリエイターである。マイクのデザインに対する距離の取り方を「オルタナティブ」とくくってしまうことには抵抗を感じるが、新たなアプローチであることには間違いないし、それをできたトークだった。リアリスティックであること――仕方ないこととは思うが、僕たちは日頃からヴィジュアルに対して大げさに考えすぎ、過剰にエモーショナルであったり、熱くなり過ぎているのかもしれない。グラフィックスというフィールドだけではなく、何かもっと大きな範囲でものを見ることについて改めて考えさせられた気がする。

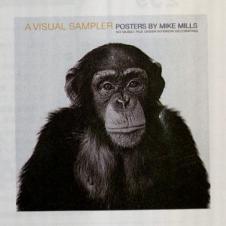
IDEΔ TΔLKS ∇ol.1 with MIKE MILLS

















Visuals from Mike Mills Visual Sampler, Mo Wax,1996 マイク・ミルズ・ヴィジュアル・サンプラー (Mo Wax) より

IDEA Back Issue Information

アイデア バックナンバーのご案内

- ■お近くの書店でご注文ください。お近くに書店がなく、お買い求めがご 不便な場合は、確実にお手元にお届けできる本の宅配システムををおすす めします。
- ■ご注文は、ご注文される号数、お名前、ご住所、電話番号を明記のうえ、下記の当社商品受注センターあてに電話またはFAXにてお申し込みください。(ご注文受付は15:00まで。それ以降は翌日の扱いとなります。)
- ■商品はご注文を受けた翌日(本州·四国), または翌々日(北海道·九州)に宅 急便がお届けします。
- ■送料は1回のご注文につき冊数にかかわらず380円です。お支払いは、 宅急便の係員に本の代金に送料をブラスしてお渡しください。なお、昼間 ご不在の場合は夜間指定(18:00~20:00)もできます。

ORDER

For international delivery of IDEA magazine, please contact our sales agent directly;

Nippan IPS CO., Ltd. Iidabashi 3-11-6, Chiyodaku, Tokyo 102, Japan.

Fax: +81 (3) 3238-7944



250 Nov. 1996

特集1: 矢萩喜従郎の視点/特集2: 「佐藤晃一の研究」 誌上研究/第17回グラフィックデザイン・ビエンナーレ・ ブルノ1996/強谷克彦/田中秀幸/ジョン・ハーシー /ホンマタカシ/コンピュータ・ゲーム [I.Q](佐藤雅彦 ・中村至男)/名古屋デザインセンター/日本ヴィジュアル・アート展●連載:エレメンツ-リ・エレメンツ 7 =伊藤性司→松蔭浩之ほか

Special Feature 1: Perspective of Kijuro Yahagi/ Special Feature 2:Studying the "Studying Koichi Sato" Exhibition/17th International Biennale of Graphic Design Brno 1996/ Katsuhiko Shibuya/ Hideyuki Tanaka/John Hersey/Takashi Homma/ Computer Game "I.Q"/International Design Center Nagoya/Japan Visual Art Exhibition '96/ Series: Elements - Re-Elements Vol.7 Keiji Ito→Hiroyuki Matsukage etc.



258 Sept. 1996

特集1: 大竹伸朗 スクラップブックNO.57/特集2: サイケデリック・ムーヴメント1966-1971/P.スコット・マケラ/前田ジョン/マー・セキグチ/第15回ワルシャワ国際ポスター・ビエンナーレ/1996年N.Y ADC, N.Y. TDC, 東京ADC/追悼: ソウル・バス/アート&サイエンスプロジェクト[FOREST](タナカノリユキ・下條信輔●連載:エレメンツ-リ・エレメンツ6=伊藤桂司→松本弦人ほか

Special Feature 1: Shinro Ohtake Scrapbook No.57 / Special Feature 2: Psychedelic Movement 1966-1971/P. Scott Makela/John Maeda/Mar Sekiguchi/15th International Poster Biennale, Warsaw/'96 N.Y. ADC, N.Y. TDC, Tokyo ADC/ Saul Bass Passed Away/Art & Science Project "POREST"/Series: Elements - Re-Elements Vol.6 Keiji Ito→Gento Matsumoto etc.



257 July 1996

特集1: テクノ・イメージ/特集2: '96卒業制作グラフィックデザイン誌上展/CSAアーカイヴとチャールズ・S・アンダーソン デザイン・カンパニー/東泉一郎/アンジェイ・クリモフスキ/第7回CLSヴィジュアル・アート・コンペティション/第88回ソサエティ・オブ・イラストレータース展/第56回美術文化展/第80回二科展デザイン部●連載:エレメンツ'リ・エレメンツ'5=伊藤桂司→暴力温泉芸者ほか

Special Feature 1: Techno Image / Special Feature 2: 1996 Graduation Works of Japanese Graphic Design Students / Charles S. Anderson Design Co. and CSA Archive / Ichiro Higashiizumi / Andrzej Klimowski / 7th CLS Visual Art Competition / Society of Illustrators, New York 38th Annual Exhibition / The 56th Annual Exhibition of Bijyutsu Bunka Art Association / Isual Design Art of Nika Exhibition / Series: Elements - Re - Elements Vol.5 Keiji Ito - Violent Onsen Geisha etc.



256 May 1996

タイポグラフィック・デザイン全面特集号 [タイポグラフィ・インフィニティ] ●パート1 今世紀のタイポグラフィック・デザイン・未来派-モダンタイポグラフィの萌芽/デ・スティユーコントラストのバランス/コンストラクティヴィズム-リアリティのヴィジョン/パウハウス-機能性のフォルム/サイケデリック・ムーヴメント ●パート2: カッティング・エッジ・オブ・タイポグラフィック・デザイン・80=90年代の代表的作品を一挙掲載

Special Issue: Typography ∞ [Ad Infinitum] / Part 1: Typography of This Century Futurism-A Germ of Modern Typography / De Stijl-A Balance of Contrasts / Costructivism-A Vision of Reality / Bauhaus-A Form of Function / NeueGrafik / Psychedelic Movement / Part 2: The Cutting Edge of Typographical Design

255 Mar. 1996 特集: オルタナティヴ・イラストレーション /リック・ヴァリセンティ/ 谷田-郎/井上よういち/ポスター23人展「NIPPONJIN」/ヘルシンキ国 際ポスタービエンナーレ'95/ ●連載 4:スタジオ・ドゥンバーの全貌-ド ゥンバー現象 ●連載4: エレメンツ-リ・エレメンツ 伊藤桂司→山本ムー グほか

Special Feature : Alternative Illustration/ Rick Valicenti/ Ichiro Tanida/ Yoichi Inoue/ Close-up of Japan Sao Paulo 1995/ XI International Poster Biennial in Finland/ Art Newspaper Edited by Marshall Arisman etc.

254 Jan. 1996 特集1: カワイイものたちの同時代性/特集2: クリエイターと社会の接点 /ディック・ブルーナ/永井一正/奥村靫正/明和電機の宣伝美術/松 本弦人●連載: スタジオ・ドゥンバーの全貌3・ヘルト・ドゥンバーの影響 ●連載3: エレメンツ-リ・エレメンツ 伊藤桂司→高橋恭司→角田純一ほか Special Feature 1: Contemporaneousness of Pretty, Cute and Poo

Special Feature 1: Contemporaneousness of Pretty, Cute and Pop Elements/ Special Feature 2: Commitment to Social Problems/ Dick Bruna/ Kazumasa Nagai/ Yukimasa Okumura/ Maywa Denki/ Gento Matsumoto etc.

253 Nov. 1996 特集: ドレス・ダウン・デザイン/ヴェルネル・イェカー/立花ハジメ/ジョナサン・バーンブルック/仲修正義/スコット・メンチン/1995年N.Y. ADC、東京ADC、N.Y. TDC入賞作品誌上展 ●連載: スタジオ・ドゥンバーの全載2・ヘルト・ドゥンバーの25年 ●連載2: エレメンツ-リ・エレメンツ 伊藤桂司→中島英樹ほか

Special Feature 1: Dress Down Design/ Werner Jeker/ Hajime Tachibana/ Jonathan Barnbrook/ Masayoshi Nakajo/ Scott Menchin/ '95 N.Y.ADC, Tokyo ADC, N.Y. TDC etc.

252 Sept. 1996 特集1: ハイパー・デザイン・ユニット=トマト/特集2: U.K.デザイナー ズ =ヴォーン・オリヴァー、ミー・カンパニー、ホワイ・ノット・アソシエーツ / ギッテ・カト/タナカノリユキ/ロドニー・グリーンブラット/●連載 バタジオ・ドゥンバーの全貌2-ヘルト・ドゥンバーの今日 ●連載1: エレ メンツ-リ・エレメンツ 伊藤桂司→東泉一郎ほか

Special Feature 1: Hyper Design Unit TOMATO/ Special Feature 2 Leading U.K. Designers/ Gitte Kath/ Noriyuki Tanaka/ Rodney Greenblat/ 37th Society of Illustrators, New York etc.

251July 1996

特集1: サイトウ・マコト/特集2: '95卒業制作グラフィックデザイン誌上 展/特別金画: スイスのニューウェイヴ・グラフィックス/ウィルト・ブ ラッケン/ホゼ・オルテガ/第3回メキシコ国際ポスター・ビエンナーレ・ / デル・デラコート・プレス/武田秀雄ほか

Special Feature 1: Makoto Saito/ Special Feature 2: 1995 Graduation Works of Japanese Student/ New Wave in Swiss Graphics / Wild Plakker/ Jose Ortega/ 3rd International Biennial of the Poster in Mexico/ Dell Delacorte Press/ Hideo Takeda/ Claes Oldenburg etc.

250 May 1996 250号記念特大号は好評につき書籍 [Design X] として刊行。 世界の40歳以下を中心とした75名デザイナーおよびデザイン・ユニット のデザインワークを, 1)Chaos & Contradiction 2)Ambience & Healing 3)New Language & Notation 3)Neo-Classic & Ethnic 4)Street & Beat, 5)Acoustic & Textured 6)Symbols & Icons, Force & Neo-Constructivism の8項目に分類して最新のデザインシーンを網羅。定価3,300円(税込)

定期購読のご案内

- ■毎号確実にアイデアをお届けできるよう、お近くの書店に定期購読としてお申し込みください。お近くに書店がなく、ご不便な場合は下記の方法で直接当社にお申し込みください。ご入金が確認されしだい最新号からお送りいたします。年間購読料は当社に直接お申し込みの場合19,380円(送料・消費税含む)です。書店でお申し込みの場合は送料が不要です。
- ■年間購読料を郵便振替でご送金ください。振替口座は00170-6-6294加入 者は(株)誠文堂新光社です。振替用紙に、お名前、ご住所、お電話番号、通信欄 に雑誌名(アイデア)とご明記ください。ご送金から年間契約完了まで10日ほど かかります。

ご注文は下記の商品受注センターにご用命ください。

(株)誠文堂新光社 練馬支社 商品受注センター 〒176 東京都練馬区豊玉上2-6 TEL: 03-5999-5121 FAX: 03-5999-5120 営業時間 月曜日〜金曜日(祝日を除く) 9:30〜17:15

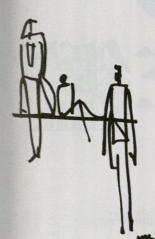
SEIRINDO SHINKOSHA PUBLISHING CO. ITD.





MEDICAL ILLUSTRATION & DESIGNING







医用デザイン科

医学とデザインのドッキング





新しい時代の予感



◆ 医学・医療の現場におけるデザインを "機能重視"から"人間重視"へ変え ハイテク時代の医療界に応える

川崎医療短期大学

Kawasaki College of Allied Health Professions 〒701-01 岡山県倉敷市松島316 TEL (086) 462-1111(代表) 内線3004・3005 TEL (086) 464-1032 (直通) FAX (086) 463-4339

設置学科

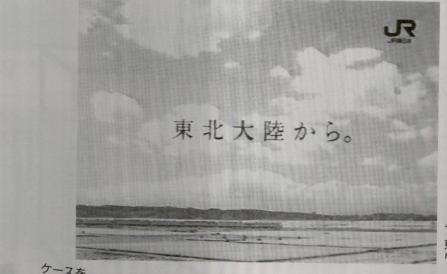
設置字科					
第一看護科	女子	50名	(修業年限3年)		
第二看護科	女子	50名	("	2年)
臨床検査科	男女	50名	("	3年)
放射線技術科	男女	50名	("	3年)
医療秘書科	男女	100名	("	2年)
医用電子技術科	男女	50名	("	3年)
医用デザイン科	男女	50名	("	3年)
マルサー					

医療秘書科 男女 150名 (修業年限3年)

Windows & Macintosh対応

1996

■東京コピーライターズクラブ編 ■A4判・上製・ケース入り ■定価19800円(税込)



TCC最高賞 東日本旅客鉄道 「東北大陸から。」

ケース入り↓ ケースを はずすと…↓

1995年4月から1996年3月までに使用された広告を一般公募、応募 総数6114点の中からプロの目で選んだ秀作663点を掲載。TCC最高 賞ほか、受賞作およびノミネート作品を収録したCD-ROMつきで よりパワーアップしました! 広告界の一年間がわかる待望の年鑑。

- ●TCC最高賞7点
- ●審査委員長賞7点
- TCC賞29点
- ●最高新人賞8点
- ●新人賞32点
- ●ノミネート38点

本のご注文は

- ◆お近くの書店でお買い求め下さい。お近くに書店がなく、お買い求めがご不便な場合は、確実にお 手元にお届けできる本の宅配システムをご利用下さい。
- ◆ご注文は、書名、ご住所、お名前、電話番号を、電話かFAXで下記の受注センター(練馬支社)宛に お申し込み下さい。営業時間は月曜日~金曜日(祝日を除く)9:30~17:15、ご注文受付は15:00まで、 それ以降は翌日扱いになります。
- ◆ご注文を受けた翌日(本州、四国)、または翌々日(北海道、九州)に宅急便がお届けします。一部お 届けできない地域もございます。宅急便システムのない地域の方はご容赦下さい。
- ◆お支払いはお届けの際、商品と引き換えに現金でお支払い下さい。
- ◆送料は一回のご注文で何冊でも380円です。本代にプラスしてお支払い下さい。
- *昼間ご不在の場合は夜間指定(18:00~20:00)ができます。

誠文堂新光社 受注センター(練馬支社): ☎(03)5999-5121・FAX(03)5999-5120

Sales agency:

Nippan IPS Co., Ltd. 3-11-6, Iidabashi, Chiyodaku, Tokyo 102, Japan Fax:+81-3-3238-7944

Seibundo-Shinkosha Publishing Co., Ltd.

Fax:+81-3-3373-7313

ナムラの **NAMURA** O



あらゆる用途の 筆を造っています

株式会社名村大成堂

〒171 東京都豊島区雑司ケ谷2-8-18 **23**03(3983)4261代 FAX03(3985)8650

Design X

グラフィックデザインの新たな地平

様々な環境、多様な価値が入り乱れ 混沌とした状況にある現在のデザイン。 そんな無秩序な中で、次代を強く予感させる 優れた作品を集大成。

まさにデザインの「今」がわかる、注目の一冊!

- Chaos & Contradiction
 Ambience & Healing
 - New Language & Notation
 - ●Neo-Classic & Ethnic ●Street & Beat
 - ●Acoustic & Textured ●Symbols & Icons
 - Force & Neo-Constructivism



したものです。

アイデア 編集部編 定価3300円

誠文堂新光社

彫刻 版 画 写真●デザイン●生活美術

- ●意欲的・実験的な作品は、俊英作家のための 〈第47回展室〉に特陳します。
- ●本展で約60名の俊英作家を選び、'97秋の〈明 日への展望〉展に招待し、その中から俊英作 家賞(約3名)を選出します。

搬入:1997年3月27日承、28日金

会期:1997年4月6日~20日

会場:東京都美術館(上野公園内)



協会賞・優秀賞 新人賞・奨励賞ほか

地方展:京都•福岡•北陸•名古屋 〈明日への展望〉展: '97秋開催予定

- ●出品規定の請求は80円切手2枚同封の上、広報部へ **〒176 練馬区小竹町2-50-15**
 - TEL. 03-3955-3235 藤沢彦二郎方
- ●問い合わせ等 モダンアート協会事務局 〒202 保谷市泉町1-9-2 サンハイツ201 TEL. 0424-64-4664

〒176 練馬区小竹町2-50-15

TEL. 03-3955-3235

力 I 当社は「どこでクリエイ SPCは、愛 7 ٤ 社 黛 T 考 で る 発 企 で か」より「どん え 2 形 H ブ けどふる T 2 9 を I 情 る 0 する 1 # な戦力を募 は T 松 面 2 グ 山 か IJ を 12 な から 9 I 拠 t 央 2 大 1 ル 点 企 0 切 テ





・32歳位まで・MAC経験者尚良◎待遇/経験、年齢、能力により優遇・各種保険完備 ューヨーク研修あり◎勤務時間/09:00~17:30◎勤務地/愛媛県松山市◎休日/日曜祝祭日、第1、2、4土曜、夏期、冬期、長期休日 他 (年間104日) ◎平均年齢28歳 ◎電話連絡の上、履歴書 (写真添付)、職歴書と主な作品のコピー (戻し不可) をご郵送ください。 ◎応募 は随時受付け。詳細は後日連絡いたします。
〇 その他、マーケティングスタッフ、販売開発 スタッフ、インターネット経験者も募集中。 愛媛県松山市湊町7-3-5 (株) SPC経営管理室 森岡まで TEL. 089-931-4422 FAX. 089-931-7612













TADANORI YOKOO'S ・アイデア編集部編

福田繁雄著

定価1800円

定価4500円

ISBN 4-416-69505-5

収録のCD-ROMっき 定価2800円

定価4800円

Shade III 評価版・形状デ

発想からフィニッシュまで 定価2800円 ISBN 4-416-69504

定価4000円

フィック

定価4350円 ISBN 4-416-69205-6

アイデア編集部編

お近くの書店でお買い求め下さい。お買い求めがご不便な場合は小社受注センターへご注文下さい。☎(03)5999-5121 · FAX(03)5999-5120 ●定価税込

MITSUWA BOND スプレーのり

3タイプ増量(480㎖)発売!!



480ml·¥1,800

※表示価格には消費税は含まれておりません。

ミッワボンド303 強力デザインスプレーのり [貼ったり、はがしたり用]

デザイン制作や版下制作に便利な強力タイプ のスプレーのり、片面塗布で強力接着ができ、貼っ たり、はがしたりが自由自在にできます。

●特長

- (1)片面塗布で強力接着ができ、しかも貼ったり、はが したりがくり返しできます。
- (2)しわやそり、伸縮等を起さずのりは透明ですからき れいに仕上がります。
- ③紙、印画紙、フィルム、金属箔、フエルト、繊維等ほと んどの素材を接着できます。

●用途例

- (1)デザインや版下制作のすべてに。
- 2)写真、ポスターのパネル貼りに。
- 3フィルムベースと用紙の接着に。

ミッワボンド305

[貼ったり、はがしたり用]

デザインや版下制作、一般家庭、オフィスでの一 時的な貼り付けに便利なスプレーのり。貼ったり、 はがしたりが自由自在にできます。

●特長

- (1)片面塗布で簡単に接着でき、貼ったり、はがしたり がくり返しできます。
- (2)しわやそり、伸縮等を起こさず、のりは透明ですから きれいに仕上がります。
- (3)紙、フィルム等ほとんどの軽量素材を接着。

●用途例

- (1)デザインや版下制作のすべてに。
- (2)新聞、雑誌やチラシ等のスクラップに。
- (3)ポスターや掲示物の一時的な貼り付けに。
- (4)縫製作業の型紙の仮止めに。

ミッワボンド307

「強力接着用]

デザイン一般から家庭、オフィス、工場で使用す る素材を強力に接着できるスプレーのり。ほとん どの素材を接着することができます。

- (1)うすい物からやや厚い物まで、接着できます。
- ②均一にまんべんなくのりが塗布でき、速乾性ですか
 - ら素早く強力に接着できます。
- (3)水、湿気に強い接着剤です。
- (4)発泡スチロールや塗装面も接着できます。

●用涂例

- (1)デザイン制作やポスター、写真のパネル貼りに。
- (2)プラスチック、フィルム、金属箔、木、発泡ウレタン、ス チロール、カーペットの接着に。
- (3)各種断熱材、吸音材、緩衝材の貼り付けに。

ミツワのデザイン・イラスト用品のカタログ 福岡工業株式会社 〒104 東京都中央区銀座1-12-4 ご希望の方は、右記宛にご請求ください。 福岡工業株式会社 TEL.03(3561)1341

ターナー アクリルガッショ **'97** 長谷川義史 ノ巻

火火マと、生きている。

いい色が、できあがる。アクリルガッシュとジンセイは、コテコテばかりじゃ、ツマラナイ。 ヒトも動物も、喜怒哀楽が寄り集まった、いい表情してるもんです。それを4つの色に託 してサラサラ~ッと描く、ハセガワ風流戯画。薄~くのばす。ぽかす。にじませる。気持ち ◎色のびがよく、ムラがない。◎耐水性で、にじまない。◎速乾性で、作業はかどる。◎マットに仕上がり、被覆力も抜群。

アートの可能性がギュッと詰まった全10色、ターナー・アクリルガッシュ。





- 色彩株式会社 〒532 大阪市淀川区三津屋北2-15-7 TEL.(06)308-1212 FAX.(06)305-3018 〒171 東京都豊島区南長崎6-1-3 TEL.(03)3953-5161 FAX.(03)3953-515

